高城 B 遺跡

-都市計画道路佐井寺片山高浜線工事に伴う発掘調査報告書-

1999年3月 吹田市都市整備部吹田市教育委員会

序 文

吹田市は、大阪市内への交通の利便性から、住宅開発が早くから進められ、そのために地下に埋蔵されている文化財も急速に失われてきました。特にJR吹田駅周辺の地域については、近世以降は交通路の接点として、早くから都市化が進んでまいりました。さらに近年は新たな開発による景観の変貌が進みつつあります。このような開発工事の増加に伴い、ここ数年のうちに、高城遺跡・宮之前遺跡・昭和町遺跡・高畑遺跡など、多くの遺跡が新たに発見されてきました。

さて、本市において計画された都市計画道路佐井寺片山高浜線の予定地は、高城遺跡B・C地点を通過することから、関係機関との協議により、発掘調査を実施することになったものです。この調査では、平安時代の建物跡とそれを囲むように掘り込まれていた大溝、粘土採掘坑と考えられる土坑群、通称「亀岡街道」と考えられる道跡など、平安時代から江戸時代にかけての遺構が数多く発見され、多大な成果を得ることができました。本報告書は今回の発掘調査で得られた成果をまとめたものです。これらの調査成果がより多くの方々に生かされ、文化財保護に役立てば幸せに存じます。

今後も、吹田市教育委員会におきましては、このような調査成果をふまえて文化 財保護に努める所存でありますので、なお一層の深いご理解とご協力を賜りますよ う、よろしくお願い申し上げます。

最後にはなりましたが、調査の実施にあたって、ご協力いただきました関係機関ならびに地元の方々をはじめとする多くの方々に感謝申し上げます。

平成11年3月

吹田市教育委員会 教育長 今記 和貴

例 言

1. 本書は、吹田市都市整備部において計画された都市計画道路佐井寺片山高浜線工事に伴う 高城B遺跡の発掘調査報告書である。

調査は、高浜町1316-3~1338-4、高城町1314-6~1353において、下記のとおり実施 した。

平成6年度 試掘調査 (T1~T22、22か所、97m²)

平成6(1994)年11月7日~11月24日、平成7(1995)年2月14日~15日

平成7年度 発掘調査 (1-1区~12-2区、22か所、1046.82㎡)

平成7(1995)年8月22日~平成8(1996)年4月4日

- 2. 発掘調査及び資料整理は、吹田市立博物館文化財保護係田中充徳・堀口健二が担当した。 なお、調査及び調査報告書作成に係る経費は、都市整備部によって予算化された。
- 3. 調査で出土した遺物等の整理作業は、吹田市立博物館(吹田市岸部北4丁目10番1号) において実施し、資料の保管も同所において行った。
- 4. 本報告書の執筆は、第2章第1節については川崎地質株式会社渡辺正巳氏より原稿をいただき、同章第2節については、焼成実験を行った第2さつき障害者作業所清水由夫氏の助言のもと田中充徳が執筆した。

また第1章第 $1\sim5$ 節及び第3章については田中充徳、同章第6節「 $1\sim12$ 区」については堀口健二、同節「石器」については花崎晶子が分担して執筆した。

- 5. 図中の方位は真北を指し、標高はT.P. (東京湾標準潮位)を示す。
- 6. 本文中の遺物番号は、図版・挿図とも統一した。縮尺については、土器は1/4、石器は1/3である。
- 7. 調査の実施に当たっては、川崎地質株式会社渡辺正巳氏、大阪府教育委員会文化財保護課 関西大学博物館山口卓也氏、第2さつき障害者作業所所長清水由夫氏及び多くの地元の 方々の協力を得た。記して謝意を表します。
- 8. 発掘調査には、調査員大城道則・木村達・竹谷俊彦・中森祥・延原由実・福住日出雄の各氏、調査補助員岩間大介・海邉博史・玉井義也・中西秀則・滑浦洋志・村上成幸・山中貴美子の各氏の参加を得た。さらに資料の整理作業には、調査員花崎晶子氏、調査補助員秋山芳江・大西文代・小田尚幸・菊池晶子・木舩安紀子・桑原暢子・小林睦・小林久美子・佐藤健太郎・高井明美・中川泉・野口佳子・長谷部裕子・林田健一郎・林裕子・正岡大実・増尾嘉祐・山根賢士・和田英子の各氏の参加を得た

目 次

労↓早	光畑神里の	·放未 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
1.	位置と環境	į · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
2.	調査の経緯	<u>t</u>
3.	基本土層序	:
4.	各調査区の	機要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
5.	遺構	
6.	遺物	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •
第2章	自然科学の	調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
1.	高城B遺跡	6 検出資料の花粉分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
2.	土坑群出土	:粘土の焼成実験について ・・・・・・・・・・・・・・・85
第3章	まとめ	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •
		図 版 目 次
第1図	調本协占 /	(縮尺 1 / 20000) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第2図	調査地周辺	
第3図		- 2 区 土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第4図	$3-1 \cdot 3$	
第5図		- 2 区、5 区 土層断面図 ・・・・・・・・・・・・ 13
第6図		- 1 ・ 7 - 2 ・ 7 - 3 区 土層断面図 ・・・・・・・・・・・ 14
第7図		
第8図		
第9図	10区	
第10図	$11 - 1 \cdot 1$	
第11図	$12-1 \cdot 1$	
第12図	$1 - 1 \cdot$	
第13図		1-2区 第2次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・ 21
第14図	2区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第15図	3-1区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第16図	3-1区	遺構内埋土土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第17図	3-2区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第18図	4-1区	第1次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・ 24
第19図	4-1区	第 2 次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・ 25
第20図	4-1区	第 3 次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・ 26
第21図	$4-2 \boxtimes$	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第22図	5区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第23図	5区	丸木杭検出状況断面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 28
第24図	6区	第1次面遺構平面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第25図	6区	第 2 次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・ 30
第26図	7-1区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

第27図	7-2区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第28図	7-3区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第29図	8区	第1次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 32
第30図	8-1区	第2次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 33
第31図	8-1区	遺構内埋土土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第32図	8-2区	第2次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第33図	8-3区	第2次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第34図	9-1区	第1次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第35図	9-1区	第2次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第36図	9-2区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第37図	9-2区	池跡032内護岸施設立面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 37
第38図	9-2区	遺構断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第39図	10区	第1次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・ 39・40
第40図	10区	第2次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 39・40
第41図	10区	第 3 次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 41・42
第42図	11-1区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41・42
第43図	11-1区	遺構内埋土土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第44図	11-2区	遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第45図	11-2区	遺構内埋土土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第46図	12-1区	第1次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第47図	12-1区	第2次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第48図	12-2区	第1次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・ 45・46
第49図	12-2区	第 2 次面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・ 45・46
第50図	12-1区	第1次面遺構内埋土土層断面図 ・・・・・・・・・・・・ 47
第51図	4-1区	フラスコ状土坑実測図 ・・・・・・・・・・・・・・ 48
第52図	谷状地形00	02検出状況平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第53図	谷状地形00	02検出状況断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第54図	5区	大型土坑実測図 ・・・・・・・・・・・・・ 50
第55図	建物跡群検	出状況平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第56図		出状況断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第57図		柵列012実測図 ・・・・・・・・・・・・・ 52
第58図		井戸跡 k 172実測図 ・・・・・・・・・・ 52
第59図		掘立柱建物跡013・014平面図 ・・・・・・・・・ 53
第60図		掘立柱建物跡015平面図 ・・・・・・・・・・ 54
第61図		掘立柱建物跡016平面図 ・・・・・・・・・・ 54
第62図		状況平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第63図	道跡検出状	
第64図		出状況平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第65図		出状況断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第66図		出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・ 57
第67図		出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第68図		出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第69図		出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・ 58
第70図		出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第71図		出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第72図	7-1区	出土遺物実測図(1) ・・・・・・・・・・・・・・・ 58

第73図	7-1区	出土遺物実測図(2)		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	59
第74図	7-2区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	60
第75図	7-3区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	60
第76図	8-1区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	60
第77図	8-2区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	60
第78図	9-1区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	61
第79図	9-2区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	61
第80図	10区	出土遺物実測図(1)		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	61
第81図	10区	出土遺物実測図(2)		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	62
第82図	10区	出土遺物実測図(3)		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	63
第83図	11-1区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	64
第84図	12-1区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	65
第85図	12-2区	出土遺物実測図	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	65
第86図	石器実測図		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	65
《付図	< The state of the sta</td <td></td>																											
	調査地域詳	細図																										

写真図版目次

```
図版 1
    調査前風景
図版2
    1-1区
図版3
     1-2 \boxtimes
図版4
     3-1区
図版 5
     3-2 \boxtimes
     4-1区 第1次遺構面
図版6
図版7
    4-1区 第2次遺構面
図版 8
    4-1区 第3次遺構面(1)
図版 9
     4-1区 第3次遺構面(2)、4-2区
図版10 5区(1)
図版11
     5区(2)
図版12 5区(3)
図版13 6区
           第1次遺構面
図版14 6区
           第2次遺構面(1)
図版15 6区
           第2次遺構面(2)
図版16 7-1区(1)
図版17 7-1区(2)
図版18 7-1区(3)
図版19 7-2区(1)
図版20 7-2区(2)、7-3区
図版21 8-1区 第2次遺構面(1)
図版22 8-1区 第2次遺構面(2)
図版23 8-2区・8-3区 第2次遺構面、8区 第1次遺構面
```

- 図版24 9-1区 第1次遺構面
- 図版25 9-1区 第2次遺構面
- 図版26 9-2区(1)
- 図版27 9-2区(2)
- 図版28 10区 第1次遺構面
- 図版29 10区 第2次遺構面
- 図版30 10区 第3次遺構面
- 図版31 11-1区
- 図版32 11-2区
- 図版33 12-1区 第1次遺構面
- 図版34 12-1区 第2次遺構面
- 図版35 12-2区 第1次遺構面
- 図版36 12-2区 第2次遺構面
- 図版37 1-1・1-2区 土層断面
- 図版38 2区・3-1区 土層断面
- 図版39 3-2区
- 図版40 4-1·4-2区 土層断面
- 図版41 5区・6区
- 土層断面

土層断面

- 図版42 6区・7-1区 土層断面
- 図版43 8-1·8-2区 土層断面
- 図版44 9-1区 土層断面
- 図版45 9-2区・10区 土層断面
- 図版46 11-1・11-2区 土層断面
- 図版47 12-1・12-2区 土層断面
- 図版48 調査・現地説明会風景
- 図版49 出土遺物(1)
- 図版50 出土遺物(2)

報告 書抄録

ふりが	なったか	しろびーい	せき													
書		高城B遺跡														
副書	名 都市計画道路佐井寺片山高浜線工事に伴う発掘調査報告書															
巻	次															
シリーズ	名	.,,														
シリーズ番	号															
編著者	名 渡辺	渡辺正巳 田中充徳 堀口健二 花崎晶子														
編集機	関 吹田	吹田市教育委員会														
所 在	地 〒564	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)6384-1231														
発行年月	日 西暦	1999年	3月31日													
ふ り が な 所収遺跡名		コード 世 市町村 遺跡番	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m²										
たかしろぴーいせき 高城B遺跡	yut したかはまちょ 吹田市高浜町 1313-6他、	T 27205 38	34° 45′ 25 ′	135° 31′ 55	19950822~ , 19960404	1046.8	都市計画道路工事									
	高城町131(45 25	31 55			に伴う事 前調査									
所収遺跡名	種 別	主な時代			主な遺物	物	特記事項									
│高城B遺跡	集落	縄文時代	フラスコ	犬土坑	石器											
		弥生・ 古墳前期	土坑谷状地形	2基	弥生土器・布 ⁴ 土器	留式										
		古墳中期	井戸跡	1基	布留式土器・	須恵器										
		平安中期		1条	土師器・黒色: 須恵器 白磁	土器										
	生産遺跡	中世	土坑群 池跡	1 基	土師器、瓦質:	土器										
	交 通	近世	池跡 道跡	1基												

第1章 発掘調査の成果

1. 位置と環境

高城B遺跡は吹田市高城町及び高浜町の境界線上に位置する、縄文時代から近代にかけての複合遺跡である。当地一帯は千里丘陵と神崎川周辺に形成された低湿地との間に広がる地域で、さらに西方から南方にかけては吹田砂堆が帯状にひろがっている。現在、当地一帯は標高T.P.約4.21~5.1mの平坦な住宅地となっており、地表から地質的な違いを見分けることは極めて難しい。

当地の北方に展開する千里丘陵は、北摂山地と淀川等の沖積作用によって形成された低湿地の間に所在し、東西約10km、南北約8kmの広がりをもつ。鮮新世から更新世にかけての大阪層群で構成され、現在の行政区画では吹田市、豊中市、茨木市、箕面市にまたがっている。この丘陵は褶曲運動によって隆起した地形で、概して北西に高く、豊中市島熊山付近を最高所として、南東に向かって低くなっていくが、長年の浸食作用で深く曲折した開析谷を形成しており、複雑な地形を呈している。そしてこの丘陵南端に吹田砂堆が広がっている。この砂堆は、縄文海進とよばれる海面上昇によって、現在よりも水位が高くなり、当地一帯にまで海水が進入した頃に、垂水方面から東方へ流れる沿岸漂流によって運ばれた砂が、波によって打ち上げられたり、砂浜から風で吹き寄せられて、かまぼこ状のたかまりとなったところである。現在の吹田市役所から高浜橋を結ぶ一帯に三日月状に広がっており、この付近に広範に広がっている、安威川や神崎川等の沖積作用によって形成された低湿地の上を覆い、他所よりいちだんと高くなっている。

この高城B遺跡の周辺地域には、北側には高畑遺跡・昭和町遺跡・元町遺跡・片山遺跡・目俵遺跡が、東側には高城遺跡、吹田城跡推定地、そして南方には神境町遺跡が所在し、さらに南方から西方にかけて高浜遺跡・宮之前遺跡・都呂須遺跡・浜の堂遺跡が所在するなど、本遺跡から半径約600mの範囲内に数多くの遺跡が分布している。このうち、元町遺跡・昭和町遺跡・高畑遺跡・目俵遺跡などの北方から東方にかけての遺跡は千里丘陵から舌状に延びる標高T.P.約3~8m台地上に立地する。これに対して、南方から西方にかけて展開する、神境町遺跡・高浜遺跡・都呂須遺跡・浜の堂遺跡などは、帯状に延びる標高T.P.約5m前後の吹田砂堆の高所に連なって分布している。これらの遺跡のうち、高浜遺跡では縄文時代中期、目俵遺跡では晩期の土器が出土し、高浜遺跡や片山遺跡では弥生土器が出土するなど、市内でも比較的古い時期の遺跡がみられるが、遺構を伴うものは弥生時代後期~古墳時代前期の建物跡を発見した目俵遺跡、古墳時代中期の土坑・溝等が見つかった昭和町遺跡B地点などであり、さらにひろがりを持つようになるには平安時代中期まで待たねばならない。10~12世紀にかけて、高畑遺跡・高城遺跡・元町遺跡など、丘陵地の周辺部のいくつかの地点において遺跡の出現が見られる。しかし、これらの遺跡は平安時代末頃には消滅したとみられ、それ以降の継続性は現在のところ認められていない。替わって、高浜遺跡・都呂須遺跡などの、南方から西方にかけて展開する、吹田砂堆上の遺跡群が繁栄するのである。

延暦4(785)年に三国川(現在の神崎川)と淀川を結ぶ開削工事が行われ、三国川から淀川へ、さらに京へと直接遡上できるようになった。神崎川流域沿いに展開する五反島遺跡は、糸田川が神崎川と合流する地点に位置し、瀬割堤や神崎川河床跡が発見された。ここからは平安時代以降の遺物の出土量が著しく増加し、瀬戸内海を囲む地域の土器も数多く出土しており、これらの地域と京を結ぶ交通の要路としての機能を神崎川が担っていたことを物語っている。平安時代には、当地一帯でも高浜遺跡をはじめ、元町遺跡、高畑遺跡など、遺跡の増加をみており、また文献からも平安時代には菅原孝標の娘が和泉国へ下向する際に高浜の地を訪れていることや、元永2年(1119)白河法皇が西宮社に参詣した帰りに皇宮権大夫源師時が高浜で遊女を召した記事など、高浜の地についてのいくつかの記載がみられることから、当地一帯においても上記にような河川交通の進展との関わりが深かったことが推測される。

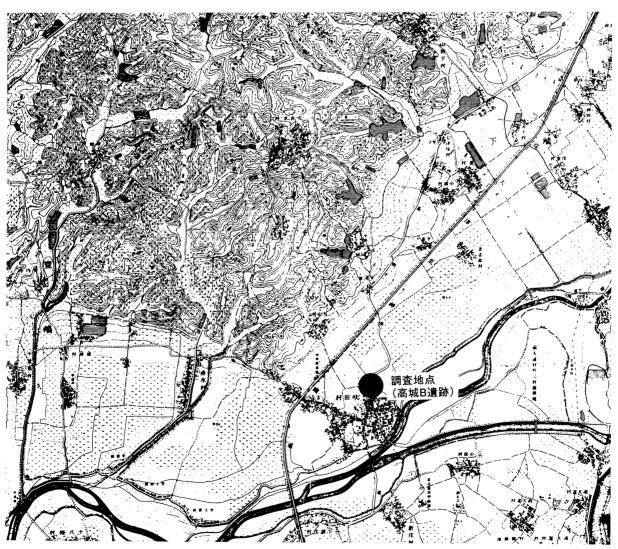
古代以降、吹田市域は西部は豊島郡に、東部は嶋下郡に属する。平安時代中期に成立した『和名類聚鈔』の記載には嶋下郡は四郷とあるが、吹田市域に比定される郷は見あたらない。また、吹田市域

における嶋下郡の条里遺構は、嶋下郡の他地域や豊島郡とは異なり、独自の方向性(方位N-約30°-W)を示している。平安時代以降、律令国家体制が変質していく過程で、各地で荘園の成立がみられるが、平安時代末までには、吹田市域でも東寺領垂水荘をはじめ、摂関家領垂水東牧・春日社領垂水西牧・醍醐寺末寺清住寺領吹田荘・興福寺領吹田東西荘・皇室領吹田御厨・倉殿荘・醍醐寺宝塔院領吉志荘等、京都や南都の有力寺社や摂関家等の権門勢家領の荘園が数多く点在しており、当地一帯においても醍醐寺領吹田荘、興福寺領吹田荘などを中心に発展していったと考えられる。

鎌倉時代に入ってからは、西園寺公経・実氏親子は吹田の地に吹田殿を建て、方違えや遊興のためにたびたび訪れており、歌人の藤原定家も随行していた。吹田殿には有馬の湯を運び込ませ湯治を行ったとされる。建長3年(1251)には後嵯峨院も行幸し、建久6年(1195)には九条兼実が方違えに訪れているなど、神崎川とその沿岸にあたる高浜津一帯の繁栄ぶりが偲ばれる。

2. 調査の経緯

当地において、都市計画道路佐井寺片山高浜線拡幅工事が実施されることとなった。工事の実施に当たり、工事区域に高城遺跡B地点及びC地点が隣接することから、平成6年度に計画路線内の試掘調査を実施した(平成6(1994)年11月7日~11月24日、平成7(1995)年2月14日~15日)ところ、全調査区(T1~T22、22か所)から遺構・遺物が発見され、遺跡が工事区域全域に分布すること



第1図 調査地点 (縮尺1/20000)

が判明した。このうち現道部分については、既存の埋設管敷設により、既に深くまで掘削が及んでい ることが想定されたため、交通の妨げにならないよう配慮するとともに、破壊を被っているとみられ る部分を省いた地域を調査対象として実施することとし、平成7(1995)年度に工事区域約3,000㎡ (全長200m×幅15m) のうち、1-1区 \sim 12-2区の計1,046.82m²にわたって発掘調査等を実施した。

調査は、平成7(1995)年8月22日より、最も南側に位置する12-2区及び1-1区から開始し、 $1-2\boxtimes$, $3-1\boxtimes$, $4-1\boxtimes$, $3-2\boxtimes$, $7-2\boxtimes$, $5\boxtimes$, $4-2\boxtimes$, $7-1\boxtimes$, $6\boxtimes$, $8-1\boxtimes$, 8-2区、8-3区、10区、7-3区、12-1区、11-2区、11-1区、9-2区、9-1区の順 に実施した。そして、平成7年12月3日には6区・7-1区・8-1区において、現地説明会を実 施し、300名を越える市民等が集まった。その後、平成8(1996)年4月4日に調査を終了した。発掘 調査終了後は、平成8~9(1997)年度に吹田市立博物館において、遺物等の整理作業を実施し、調査 報告書の刊行作業に取りかかった。

3. 基本十層序

現在調査地周辺は、民間開発や昭和初期(昭和2年に組合結成、昭和5年に竣工)に行われた、吹 田土地区劃整理組合による区画整理事業等により、標高約4.21~5.1mの平坦な住宅地となっている。 最も南側に位置する1区及び12区では現地表面の標高は約4.25m~4.7m、中央付近に当たる4区及 び10区では現地表面の標高は約4.29m~約5.1m、最北部の8区では現地表面の標高は約4.63mであ る。各調査区毎に土層序に相違はみられるが、基本的には下記の11層に分けられる。

■|層

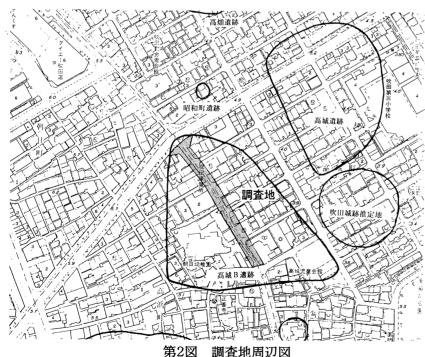
アスファルト・コンクリート及び砕石層で、舗装道路構築の際に形成された層。

■ || 層

現代の盛土層及び攪乱土層で、黄色砂若しくは廃棄物・コークス等で構成される。

■川層

近代以前の耕作土層及び整地層。現在は平坦な住宅地となっているが、旧来は広範囲にわたって、 水田等の農耕地が広がっていたものと考えられる。標高4.21~5.1m付近で推移し、平坦な地形を呈 している。

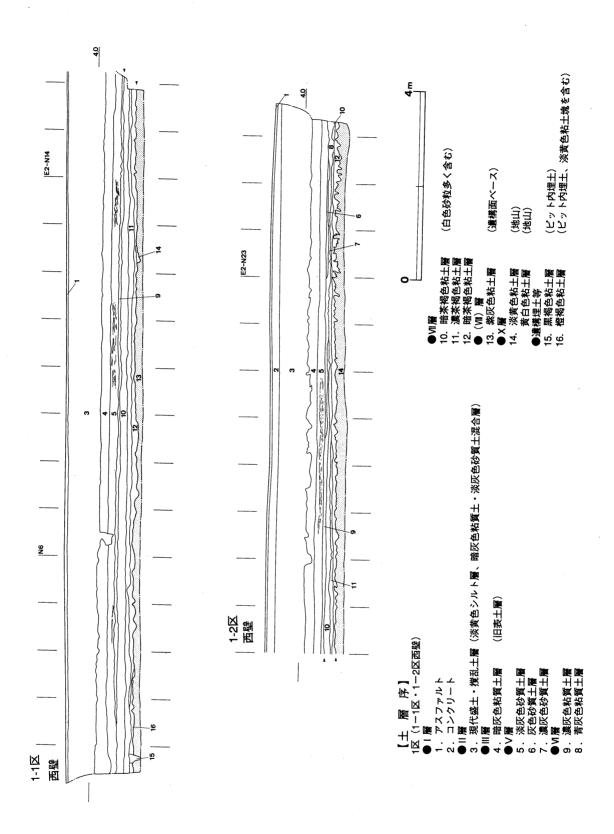


灰色・濃灰色等の粘土及 び粘質土層を主体とする堆 積層で、土師器皿、瓦器椀、 須恵器こね鉢、青磁など、 鎌倉時代を主体とする土器 が出土した。9区を除く調

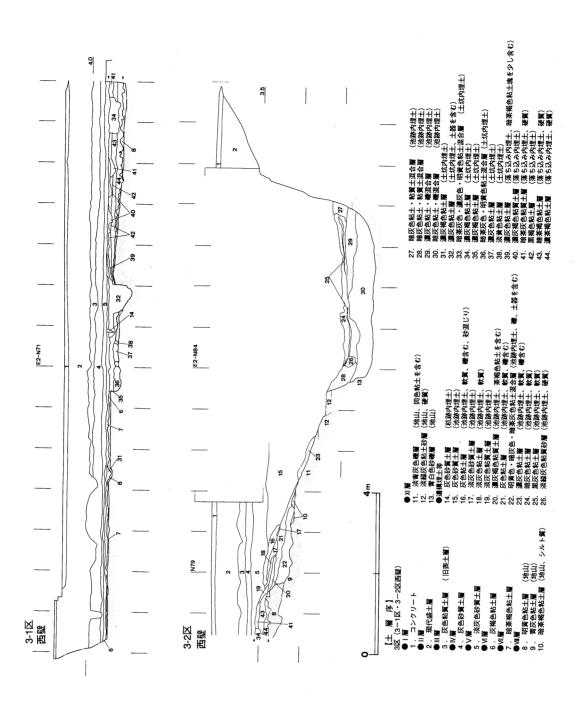
灰色砂質土を主体とする 堆積層。

■V屬

淡灰色砂質土を主体とす る堆積層で、流水の痕跡が みられることから、洪水等 により一時に堆積した可能 性が考えられる。なお流水 の痕跡の方向から、東から 西への土砂の流れが推測さ れる。この土層内からは、 数は少ないが瀬戸焼皿など の近世の遺物が出土した。



第3図 1-1・1-2区土層断面図



第4図 3-1·3-2区土層断面図

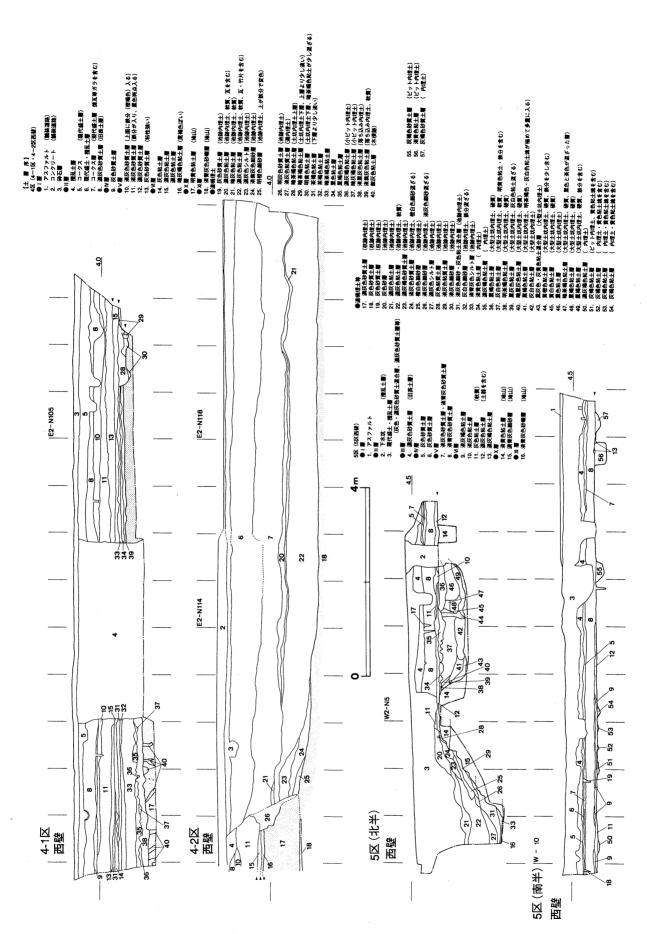
査地域のほぼ全域に分布しており、平安時代等の遺構面上を覆っている。

■VII層

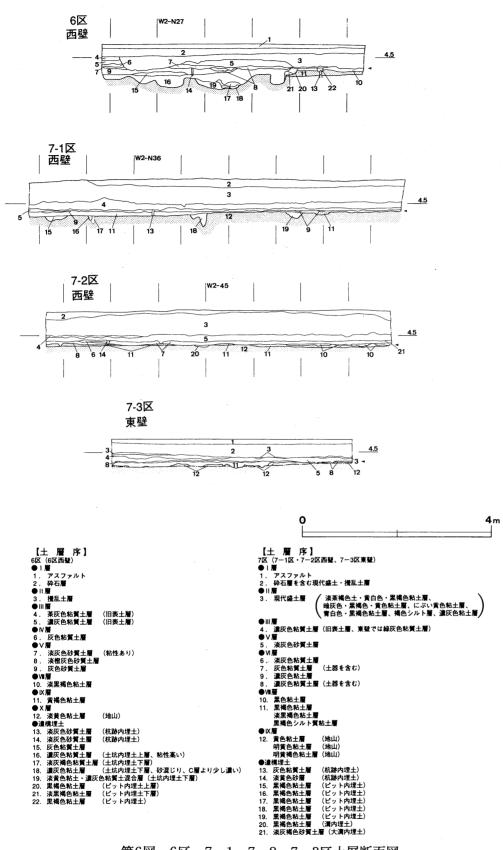
茶褐色〜暗茶褐色の粘土及び粘質土層を主体とする堆積層で、土師器皿、黒色土器B類椀、須恵器鉢などの土器を出土した。1区、3区、10区、11区、12区に分布がみられ、平安時代〜中世の遺構面を形成する。

■VII層

黒褐色粘土を主体とする堆積層。鉄分を多く有し、硬質である。 6 区、 7 区、10区、12区に分布



第5図 4-1・4-2区、5区土層断面図



第6図 6区、7-1・7-2・7-3区土層断面図

■ XI 層

淡青灰色の砂礫層。古淀川水系において形成された段丘地形の堆積層で、大阪層群の上部を被覆す

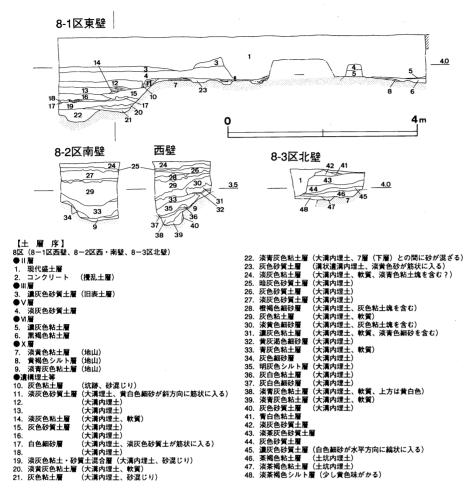
が土皿器ど出こ6かと時建列をみ師、Aの土の区ら共代物等検ら器黒類土しう、はに中跡のしれ杯色椀器たち7下平期・遺たれ・土なが。、区層安の柵構。

■以層

6 3 認堆の高~採層て褐でえる区区め積上T・4.34推層て褐でえ~のら層面P.4.3もりい粘山る7みれ、は約m、概。土と。

■X層

明黄色・ 淡黄色・淡 青灰色・白 色等の粘土 及びシルト 層で構成さ れる。地山 層。その上 面は、4区 南半で標高 T.P.約4.03 $\sim 4.22 \text{m}$ \tilde{c} 8区中央付 近で標高 T. P.約4.22mで ある。



第7図 8-1・8-2・8-3区土層断面図

る礫層と考えられる。この土層は、これまでに片山遺跡・目俵遺跡・中ノ坪遺跡などでも発見されており、吹田市南東部に広く分布しているとみられる。

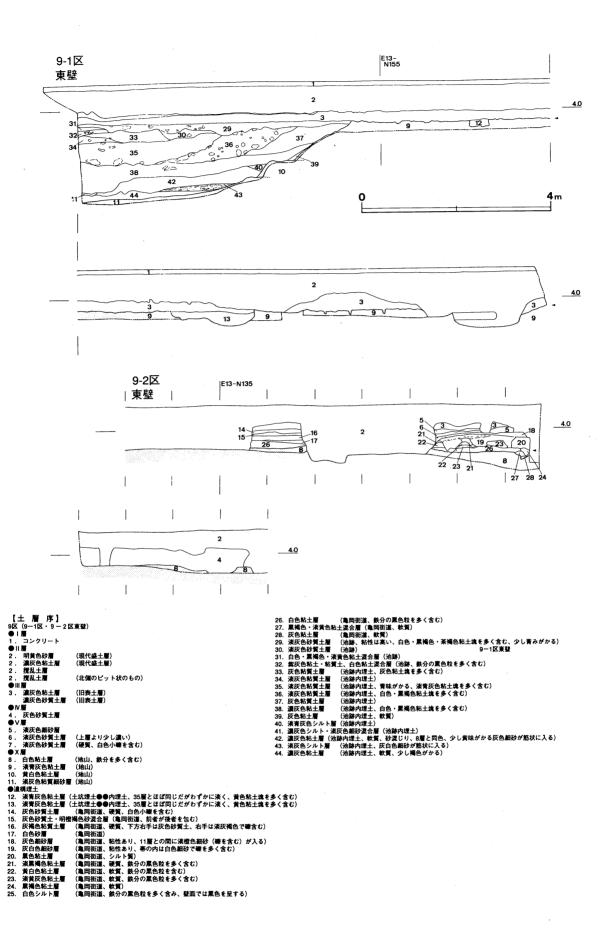
4. 各調査区の概要

調査の方法としては、 道路の中央で分割し、西 側と東側の地区に分けた (各200m×7.5m)。これ は西地区において調査が 実施されている間は東地 区が交通路となり、逆に

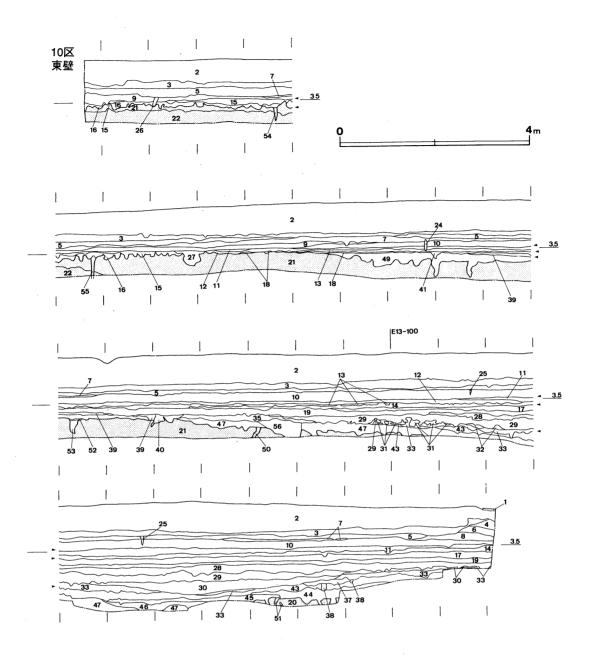
東地区で調査が行われているときは西地区が交通路になっていたからである。調査の進行にあわせて西地区では南から北へ、東地区では北から南へ番号を附した。また、交差道路との関わりから、各交差道路の交通が調査区によって遮断されないように、原則的に都市計画道路と交差する道路間を1つの区画として、1区画が交差道路をまたがらないようにした。これにより12の区域を設けることとなり、さらに周辺地域の出入り等を考慮して、必要に応じて細分化し、-1、-2等の枝番号を附した。このため、調査区は12区域22か所に及ぶ。

また、西側と東側の両地区とも、調査の際の位置関係を明確にするために、道路の形状に沿って座標を附した。この調査用座標は方位N -30.3° -W(計画道路の直線部分の方位)とし、東西方向(実際は南西〜北東)は道路の西端から東に向かってEW0〜E15とした。また、南北方向(実際は北西〜南東)については、EW0ライン上における1区の最南端をN0とし、南から北に向かって東側地域ではN0〜N127まで附したが、西地区については道路の形状より、N127W2地点から西へ角度を7 $^\circ$ (N -37.3° -W)変更し、さらにW2N0〜W2N60とし、東地区でも南から北に向かってN0〜N160まで附した。なお調査上の関係から、西側と東側の両地区の南北方向の基準ラインは約5.3mずれており、西地区のN0ラインは東地区ではN5.3ラインに相当する。

遺構については、調査区が22カ所に及び、著しく多く検出されたことから、遺構番号の先頭に調査区を示す $a \cdot b \cdot c \cdot d \cdots$ とアルファベット小文字で表記し、その後ろに数字で示した。この数字については、第 1 次遺構面は101~、第 2 次面は301~、第 3 次面は501~とし、例えば 1-1 区第 1 次面の溝 1 は、溝 a 101 となる。

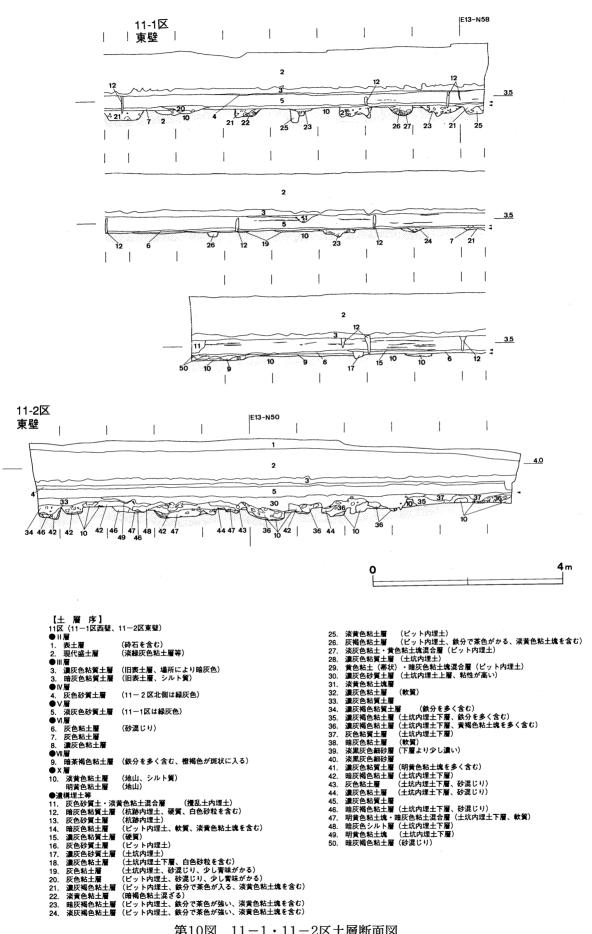


第8図 9-1・9-2区土層断面図

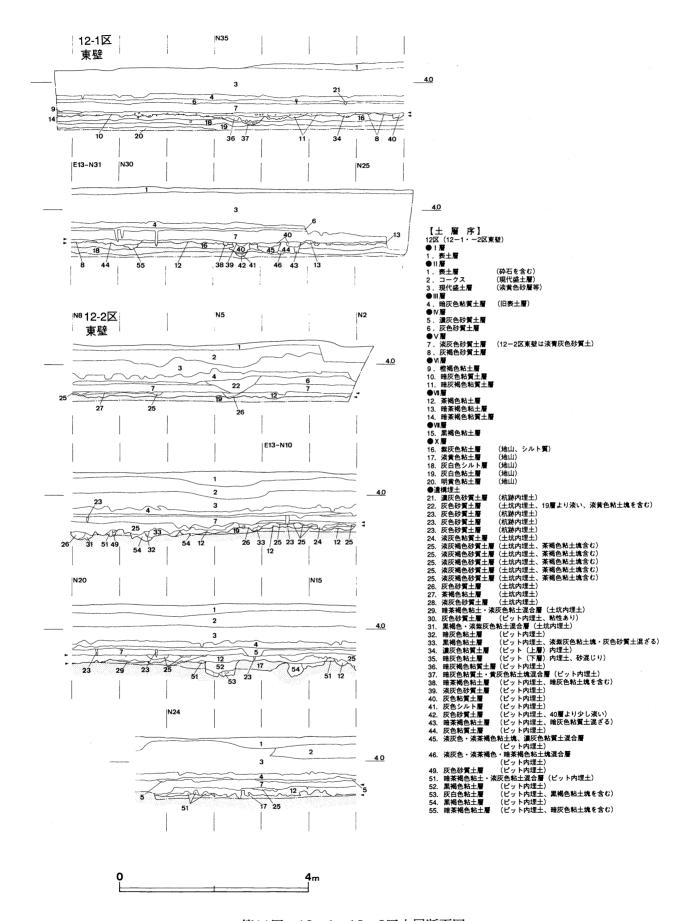


```
【土 層 序】
10区 (10区東壁)
● I 層
1. アスファルト
(現代盛土層)
                   (旧表土層)
                    (鉄分を帯び、橙色が混ざる)
                    (土器を含む)
(土器を含む、13層よりやや濃く粘性高い)
(土器を含む、白色砂粒を含む)
15. 灰褐色粘土層
16. 濃原
●VII属
17. 黒褐色粘土層
17. 黒褐色粘土層
18. 暗茶
●VII層
19. 黒褐色粘土層
● X層
20. 灰黄色粘土層
21. 淡黄色粘土層
22. 変黄色やシルト層
22. 黄白色シルト層
                    (地山)
(地山、鉄分の茶褐色を含む、少し緑がかる、シルト質で南へ行くほど強くなる)
(地山)
```

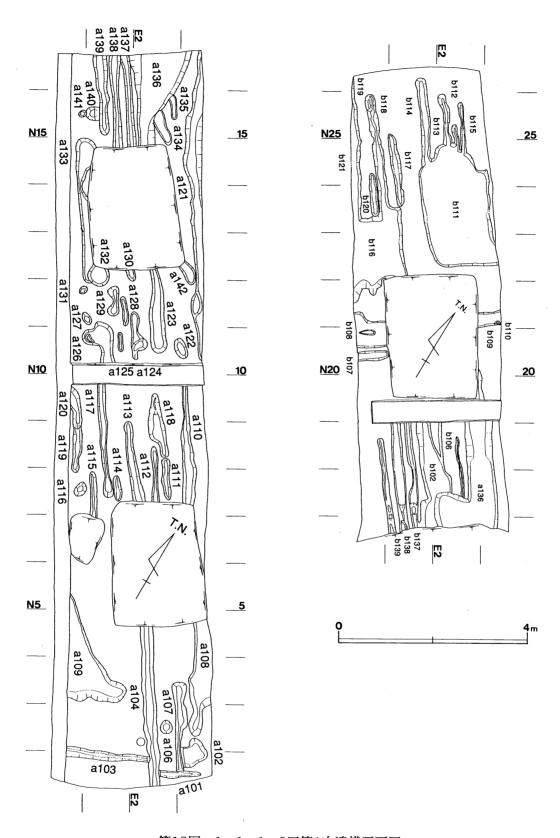
10区土層断面図 第9図



第10図 11-1・11-2区土層断面図



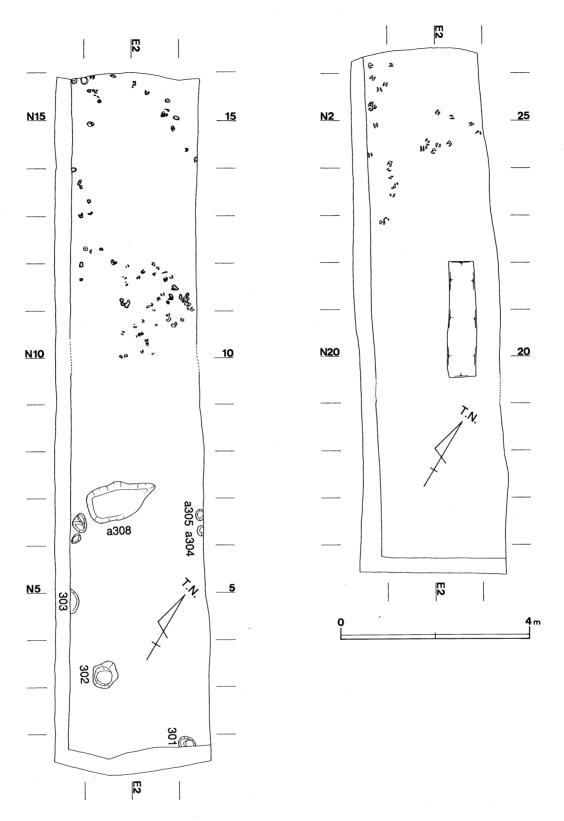
第11図 12-1・12-2区土層断面図



第12図 1-1·1-2区第1次遺構平面図

■1-1区·1-2区

西地区では最南端に位置する調査区である。 1-1区は南北長約15.68m、東西長約 $3.03\sim3.41$ m、



第13図 1-1·1-2区第2次面遺構平面図

面積約50.49 m^2 の範囲を示し、1-2区は南北長約9.74m、東西長約2.66 \sim 3.2m、面積約28.54 m^2 の範囲を示す。標高約4.48 \sim 4.7mの地表面下約0.60 \sim 0.89mまで盛土層(I · II 層)がみられる。今回の調査地域の地表面の標高は調査区全域を通じて、大きな高低差はみられないが、盛土の厚さについては、池跡埋土でもある4-2区を除いて、この調査区が最も厚い。1-1 · -2区とも、第1次

遺構面のⅧ層(茶褐色粘土層)上面では、 方位N-31.5~36.5°-W、N-54· 59.5°-Eで、調査区とほぼ同方向の細 く浅い溝数十条を検出した。これらの 溝はいずれも鋤溝と考えられる。12-1・-2区検出の溝や落ち込みとは方 向が若干ずれるが、いずれも嶋下郡条 里に規制された遺構と想定される。

1-1区では遺構内より、土師器皿、 瓦器椀、須恵器鉢・甕等、12世紀後半 ~14世紀前半の土器の細片が出土し、 1-2区ではこれに加えて、同安窯系 青磁等の細片が出土した。この調査区 では、北へ向かうほど遺物は増加する 傾向にある。

さらに下方からは、X層を検出した。 この層は乾燥時は硬質となるが、水分 を含むと若干ぬかるむように軟弱にな る。上面(第2次遺構面)からは、 1-1・-2両区の北側において足跡 と考えられる直径約10~20cmの楕円 形もしくは不定形の小ピットを多数検 出し、1-1区の南半では直径約16~



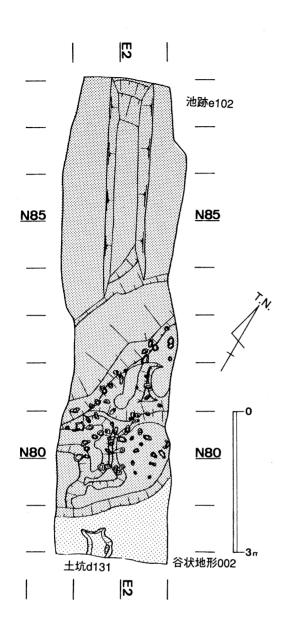
円形の 土坑d102 | ピット 7 基、 約148× 80cm, 潘d117 深さ約 4 c m の 十 坑 1 基を検 出した。 両区と も、第 1 次 面 ~ 地 山 第16図 3-1区遺構内埋土土層断面図 の間は、

第15図 3-1区遺構平面図

遺物は全く出土しなかった。

2 X

2 区は、既存の道路部分が大半を占める場所である。工場等の施設の玄関口にも当たり、出入りが 著しいことから、調査及び交通の安全を配慮して、下水管埋設時に立会を実施した。南北長約37.5m、 東西長約0.75~0.9m、面積約30.53㎡を測る。この区は、他区と同様、現代盛土層(II層)以下、旧 表土層 (Ⅲ層)・淡灰色砂質土層 (Ⅴ層) などが堆積し、地山とみられる淡黄色粘土層 (Ⅺ層) に達 する状況がみられた。このうち、淡黄色粘土層上面から、ピット及び溝と考えられる遺構を検出し、 この区においても遺構等が展開することが判明した。



第17図 3-2遺構平面図

■ 3 - 1 区

3-1区は、2区北側に位置し、南北長約 13.63m、東西長約1.38~2.4m、面積約25.7㎡の 範囲の調査区である。この区では、標高T.P.約 4.55~4.8mの地表面下約0.57~0.67mの厚さの Ⅰ・Ⅱ層の下に、Ⅲ~V層の堆積があり、標高T. P.約3.4mの X 層 (淡黄色粘土) 上面において、 調査区の中央から北側に向かって緩やかな傾斜を 有する落ち込みを検出した。この落ち込みは、 4-1区や10区で検出したものと同様で、谷状地 形の南岸に当たると考えられる。この落ち込み内 からは、土師器細片が出土し、落ち込み底面検出 の土坑(土坑 d 131南半)からも弥生土器底部1 点が出土した。この他、落ち込みの南側では、土 坑や溝状の遺構を多数検出したが、これらの遺構 群は直径約47~65cm、深さ約16~36cmの円形 の土坑が複雑に重複し、溝状に連なったものと考 えられる。この土坑群からは、土師器皿、瓦器椀、 須恵器鉢・甕、備前焼甕等の遺物の細片が出土し た。時期は明確ではないが、13世紀~15世紀と 考えられる。なお、遺構の形状・配置等に若干の 相違はあるものの、類似した遺構が11-1区・ 11-2区・12-1区等からも検出されており、 これらと同様な性格のものと想定される。

■3-2区

この調査区は南北長約10.18m、東西長約1.86 ~2.65m、面積約24.37㎡を測る調査区で、標高 T.P.約4.66mを地表面とし、地表面下約0.62~ 0.76mの現代盛土層の下にはⅢ層・Ⅳ層・V層が 堆積し、標高T.P.約3.5mのΨ層及び第41層の上 面より、南北長約10.56m以上、東西長約2.64m 以上、深さ約2.77mの池跡(池跡e102)を検出

した。この池跡内の埋土は、上層の灰色砂質土層と下層で軟質の暗灰色粘土・礫混合層に大別される。 ベースとなる面及び埋土からは土師器皿、瓦器椀、須恵器鉢、瓦質土器羽釜、備前焼擂鉢、白磁壷等 の遺物が出土した。これらの出土遺物から、この池跡については中世の所産と考えられる。

また、X層では3-1区で検出された谷状地形の緩やかな傾斜がここでもみられた。この落ち込み内埋土からは、土師器甕・皿、須恵器椀・鉢等の平安時代~中世の土器が出土した他、落ち込み底面検出の土坑(土坑d131北半)内から弥生土器底部1点を出土した。

4 − 1 区

西地区のほぼ中央に位置する調査区で、南北長約12m、東西長約4.7m、約53.6㎡を測る。標高T. P.約4.33~4.6mを地表面とし、地表面下厚さ約0.2~0.4mの現代盛土層の下にはⅢ層・Ⅳ層・V層が順次堆積し、標高T.P.約2.97m~3.78mの間に、3面に及ぶ遺構面を検出した。

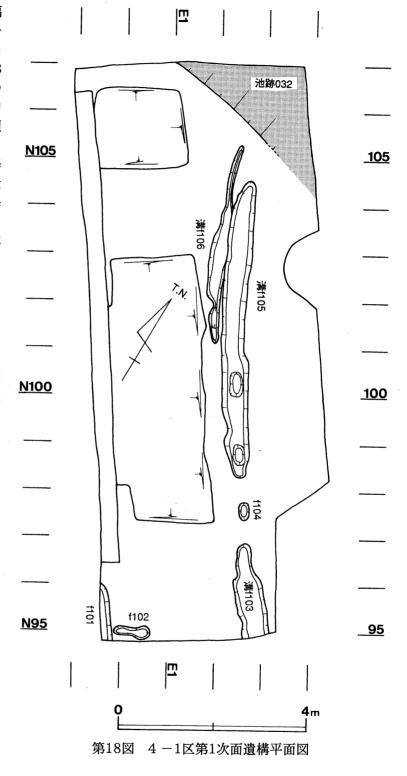
第1次面はVI層(第15層)をベースとし、南北方向に併走する溝2条を検出した。この溝からは土師器皿、須恵器鉢の細片が出土した他、遺構面からは土師器皿・甕、瓦器椀、須恵器鉢、瓦質羽釜の細片が出土した。

第2次面は第33層をベースとし、 東西及び南北方向に直行する、幅 約23~70cm、深さ約6~18cmを 測り、方位N-27・31°-W、N-61°-Eを示す溝跡3条(溝f108 ~f110)等を検出した。これらの 溝からは古墳時代の須恵器甕、中 世の土師器皿、和泉型瓦器椀、中 世郡こね鉢の細片が出土した他、 遺構面からは平安時代の土師器 甕・「て」の字状口縁皿等、中世 の土師器皿・甕、瓦器椀、須恵器 等の細片が出土した。

第3次面では地山であるX層(第17層)をベースとして、谷状の落ち込みを検出した。3-1区等で検出した落ち込みの北岸と考えられる。これにより、3-1区で検出したこの谷状地形は幅約31.45mに及ぶことがわかった。また、この遺構面からはフラスコ状の土坑1基(土坑f119)を検出し、土坑の底と谷状地形の傾斜面よりサヌカイトの剥片が各1点出土した。(第86図3・5)

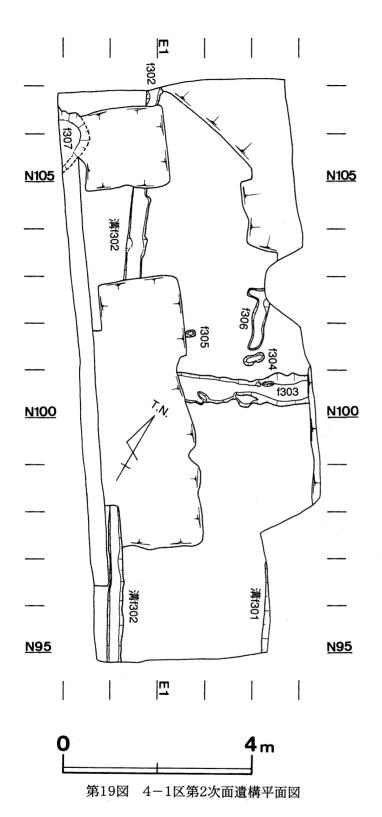
■ 4 - 2 区

4-2区は、南北長約14.3m、東西長約5.6m、面積約65.77㎡を測る。標高T.P.約4.98~5.1mを地表面とし、地表面下約1.25~1.42mまではⅡ層であるが、これを埋土(上層)とし、標高T.P.約2.93mを底とする池跡を検出した。この池跡は断面形状が逆台形をしており、調査区の南端で南岸の一部を検出したものの、その全域が池跡で占められていた。この池跡埋土は攪乱土(上層)と軟質の濃灰色粘土層(下層)に大別できるが、上層からは陶器鍋・燈明皿、桟瓦、下層からは平瓦が出土した。



■ 5区

5 区は、南北長約17.58m、東西長約4.72m、面積約72.45㎡を測る調査区で、標高T.P.約4.39~4.79mの地表面から、約0.13~0.55mの厚さの盛土層($I \cdot II$ 層)を経て、 $II \cdot IV \cdot V$ 層が順次堆積し、調査区南側ではVI 層を間に挟んで地山である X 層(第14層)を検出したが、北側ではV 層直下より検出した。調査区北側部分については旧来の地形が削平され、損われた可能性が考えられる。また



X層は、5区においては標高T.P.約3.9~4.05mと、4-1区や10区 北側のような周辺調査区よりも高所 で検出した。

また、今回この調査区の北半で検 出された遺構は、溝状に連なった長 さ約88~328cm、幅約21~56cm、 深さ約14~27cmの土坑群(土坑 h 101~h103, h105, h108, h 122、h160)、L字状並んだピット 列(ピットh110、h119、h142 ~h147) とこれを囲むように併走 する丸木杭列(杭h165~h179)、 幅約7~40cm、幅約7~40cm、 深さ約1~7cmの鋤溝と考えられ る小溝(溝h127~h138、h149 ~h152) などで構成されていた。 これらはいずれもN-51~66°-E、N-36~41°-Wの方位を示し ており、嶋下郡条里の傾きとされる 方位とほぼ直交或いは併走してい た。これに対して、南半では大型の 土坑1基(土坑h164)と池跡031 の北岸、小溝群などの遺構を検出し た。

溝状の土坑群については、本調査 区北側の6区及び8-1区でも認め られた。形状・方位・出土遺物とも に類似性が高いことから、同様な性 格のものと考えられる。また、L字 状に並んだピット列については、柱 根等から近年の所産と考えられる が、時期・用途ともに明確ではない。

■6区

6区は、西地区に属し、南北長約7.73m、東西長約2.94~5.92m、面積約39.74㎡を測る。標高 T.P.約4.74m前後を地表面とし、地表面下約0.21~0.27mの厚さのⅡ層以下、Ⅲ層、Ⅳ層、V層、Ⅷ層が堆積し、地山である IX層もしくは X層に達する状況がみられた。

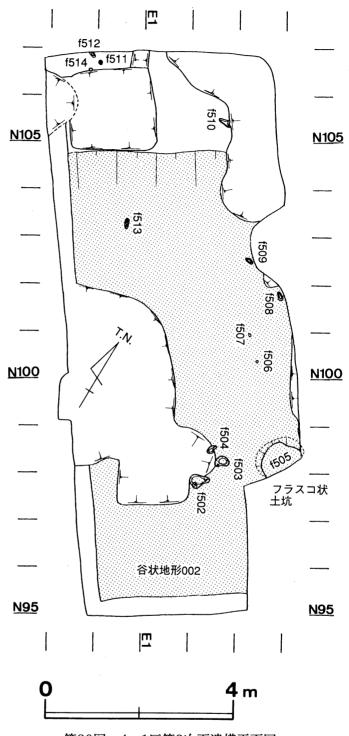
この区では2時期の遺構面が検出された。

上方の第1次遺構面では、標高T.P.約3.73mの灰色粘質土層上面から、方位N $-56\sim63^\circ$ -Eを示す、幅約 $15\sim55$ cm、深さ約 $2\sim7$ cmの溝が7条(溝 $j101\sim j107$)と、約 105×97 cm、深さ約110cmの円形の土坑1基(土坑j108)、約 51×64 cm、深さ約59cmの円形の土坑1基(土坑j109)

を検出した。溝については、鋤溝の 可能性が考えられる。この遺構面は、 北端では四層を、それ以外では第 16層(濃灰色粘質土層)をベース としており、この層の上面からは土 師器皿・甕、瓦器椀、施釉陶器、備 前焼、丸瓦の細片が出土した。遺構 内埋土については、2基の土坑は淡 灰色粘質土、溝跡では灰色砂質土層 を主体とする。溝跡からは遺物の出 土はみられなかったが、土坑j108 からは土師器、須恵器、施釉陶器、 備前焼、丸瓦の細片が出土し、遺構 面と類似した器種構成であった。こ れら出土遺物等から近世の所産と推 測される。

第2次面では、大型の溝(大溝 011-A)を検出した。この大溝は、調査区中央を東西方向(方位N-58.4°-E)に走り、東端で北へと転ずるとみられ、その両岸で高さが異なっていた。北側は標高T.P.約4.19mとし、IX層をベースとする。そして南側については標高T.P.約3.98m、X層をベースとし、この南北両岸で約21.5cmの比高差を有する。

大溝の南側では、幅約18~78cm、深さ約12~31cmを測り、方位N-31・50~59°-Eを示す、溝12条(溝j324、326、331、332、339、340、342、343、346、362~364)を検出した。溝内埋土はいずれも濃灰色粘質土であり、第1次遺構面ベース層により埋没していた。各遺構固有の埋土を持たないことから、開前状態のまま、一挙に埋没した可能性が考えられる。埋土中からは、土師器皿・甕・鍋、瓦器椀、須恵器杯・鉢・甕など、平安時代~中世の土器細片が出土した。

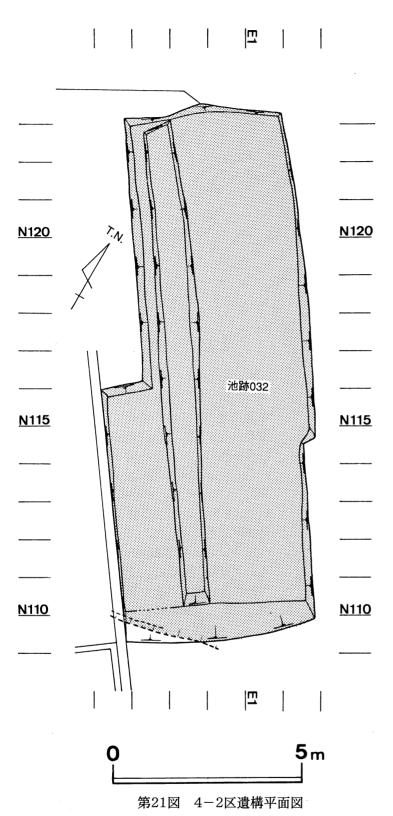


第20図 4-1区第3次面遺構平面図

そしてさらに、北側では、方位N -59° -Eを示し、柱間約 $1.24\sim1.49$ mを測る、柵列とみられる柱列1条(柵列011)を検出した。この柱列における、柱穴は直径約 $12\sim36$ cm、深さ約 $6\sim28$ cmを示した。埋土は茶褐色粘土であるが、遺物の出土はみられなかった。

■7-1区・7-2区・7-3区

7区は、西地区に位置し、7-1区で南北長約7.75m、東西長約5.95m、面積約42.39㎡を、7-

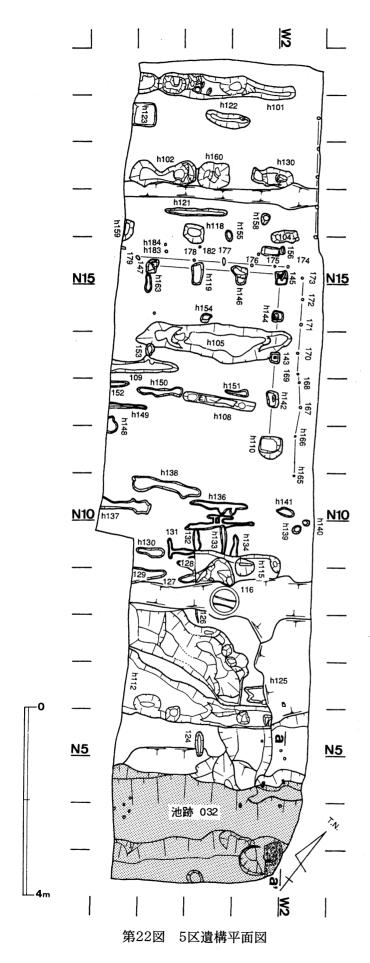


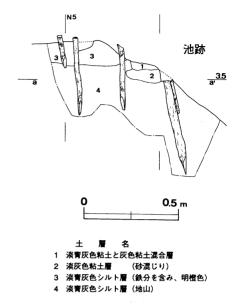
2 区で南北長約7.22~7.87m、東西長約4.67~5.14m、面積約35.75㎡を、7 − 3 区で南北長約5.12m、東西長約0.66m、面積約3.46㎡を測る。これらの調査区は、いずれも標高T.P.約4.53~4.77mを地表面とし、地表面下厚さ約0.32~0.55cmのⅠ・Ⅱ層以下、Ⅲ層、Ⅳ層、V層などの層が堆積し、Ⅷ・IX層に達する状況がみられた。なお、IX層の堆積は当区と6 区のみである。

この調査区は他区と比べて も、現代盛土層 (Ⅱ層) は比較 的浅く、標高約T.P.約3.7~ 3.9m付近でIX層を検出し、この 上面には Ш層が厚さ約2~ 11cmと薄く堆積していた。遺 構検出は
区層上面であったが、 壁面を観察すると四層が遺構面 になるとみられる。つまり、当 時の生活面は第11層上面であ り、これらの遺構はベースとな る土砂の流入によって埋没した ため、下層のIX層で検出される ことになったとみられる。なお、 この遺構面については、南隣の 6 区南半とで約19cmの、8-1区の中央付近とでは約17cm の比高差がみられた。7-1区 では、掘立柱建物跡3棟とこれ とほぼ併走する東西方向の溝、 井戸跡、大溝の一部などを検出 し、7-2区では建物跡1棟、 溝跡2条、大溝1条のほか、ピ ット多数を検出した。また、 7-3区でもピット5基を検出 したが、調査区の範囲が限られ ており、現在のところ、建物跡 との関連性は不明である。

图 8 区

今回の調査中、最北に位置し、最大面積の調査区で不規則な六角形を呈する調査区で、南北長約12.83m・東西長約15.35m、面積約133.55m²を測る。標高T.P.約4.63mの地表面から約0.71mで第1次遺構面であるV層上面に達した。この遺構面ではN53.5・W9地点付近から埋桶2基(埋桶n101・n102)を検出した。





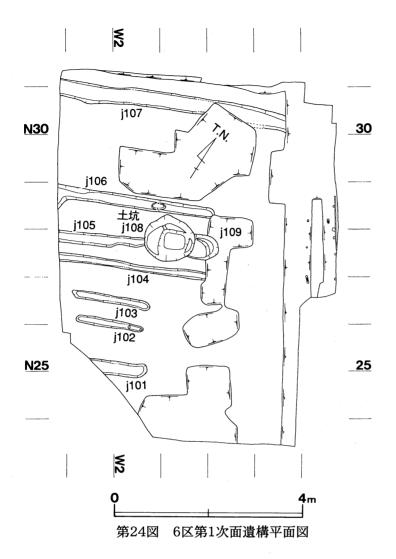
第23図 5区丸木杭検出状況断面図

埋桶 n 101については、掘り方は約52.5~54cm、桶は口縁の直径約51~54cm、底部内面径約41cm前後、深さ約40cmを測る。ほぼ完形で濃灰色砂質土・黄灰色細砂の下層埋土中には火箸・下駄等の出土がみられ、上半では攪乱土が混入していた。埋桶 n 102は底部内面径約26.5cm、深さ約10cmを測り、底の部分を残して、ほぼ全体が削平されていた。

なお、この調査区については、N10ラインより西側はこれ以上工事による掘削が行われないとのことから、8 区を分割して、同ラインより東側においては全面調査を行い(8 -1 区)、西側においては現地保存のため、トレンチ調査に止めることとした(8 -2 \cdot -3 区)。

$(1) 8-1 \boxtimes$

8区東半に位置する。この調査区は攪乱が著しく、部分的にⅢ・V層が残るが、標高T.P.約4.63mの地表面から下へ約0.45~0.94mまで攪乱土層で覆われており、その下から X層(淡黄色粘土)を検出した。調査区内の状況はその性格から、3つに区分できる。調査区内の南側には断面形状が逆凸形で幅約3.90~4.16m・深さ約85cmを測り、方位N−73°−Eを示す、大型の溝(大溝011−C)を検出した。中央付近



には、方位N-80°-Eを示し、幅約20~66m・深さ約2~40mを測る溝約20条(溝 n 302、305~309、311~313、316~318、323、326~328、331、335、337~338)を検出した。これらの溝は大溝とは若干方向性が異なっており、また濃灰色粘質土層の埋土からは土師器皿、瓦質羽釜、須恵器甕、備前焼などの中世の遺物が出土した。さらに北側については、ベースとなる土層が淡黄色シルト層へと変化し、下水道管から北側に向かって降る緩やかな傾斜がみられた。

なお、この調査区からは直径約 0.45mと直径約0.25m、方位N-58・55.4°-Eの下水管を検出した が、府道大阪十三高槻線と併走して おらず、むしろ旧片山高浜線と直交 していることから、府道敷設以前に 埋設されたものと考えられる。

$(2) 8 - 2 \boxtimes$

8-1区の西側に設定した約 1.23×1.23m、面積約1.46㎡を測る 調査区である。調査区内の土層序に ついてはⅡ層及びV層の下では、濃 灰色粘土と橙褐色粗砂が交互に堆積 し、標高T.P.約3.24~2.89mの傾

斜面を有する XI 層を検出した。この傾斜面は、8-1 区で検出した大溝011-C の延長線上に位置しており、この大溝の北側の傾斜面ではないかと考えられる。

(3) 8-3区

この調査区は8-2区の北側に位置するL字形の調査区で、面積約1.62㎡を測る。

調査区のほぼ全域が X 層まで攪乱を受けていたが、これは 8 - 1 区中央付近で検出した下水道管の埋土と考えられる。なお、わずかに残った X 層の上面からピットの一部とみられる落ち込みを 2 カ所検出した。

■ 9 - 1 区

この調査区は、東地区において最も北側に設定した調査区で、南北長約20.38m、東西長約2.38~3.48m、面積約62.17 m^2 を測る。標高T.P.約4.54~4.64mの地表面下約0.64~1.29mまで攪乱を受けており、旧表土層及びV層についても攪乱を受けていた。標高T.P.約3.71~3.78mで検出したX層が遺構面であるが、この面では北端から池跡・ピットを検出した。この他、攪乱を受けてはいたが、調査区の中央から南側にかけて、幅約1.6~1.67m、高さ約0.3mの高まりを検出した。この高まりはいくつかの層で形成されているが、いずれの層も細礫の混ざった硬質の粘土だった。またこの高まり内には水道管等の埋設管を設置したと考えられる、幅約0.60mの断面コの字形の溝 1 条と、幅約0.37m・幅約0.32~52m(継ぎ目部分に当たる部分はそれぞれ約0.9~1.4・約0.81~0.83m)の断面

U字形の溝2条がこれと併走していた。 これらのことから、この高まりは南北 方向に延びる道の痕跡であり、近年ま で機能していたと考えられる。なお、 この高まりとその両側では、ベース層 であるX層が凸形になっており、盛土 するだけでなく、その周辺を削平して 構築した可能性も考えられる。

■ 9 - 2 ×

9-1区のすぐ南側に位置する調査 区で、南北長約12.92m、東西長約3.8 ~4.06m、面積約47.98㎡を測る。標 高T.P.約4.47~4.51mの地表面下約 $0.32 \sim 1.23$ mまでが攪乱土層であり、 Ⅲ層~V層についても、9-1区同様 に、その大部分が攪乱を受けていた。

調査区内からは9-1区の継続と考 えられる、高さ約0.27mの高まりを検 出したが、この区でも既埋設管を設置 していたとみられる幅約0.52mの断面 コの字形の溝1条、幅約0.45~ 0.65m・幅約0.26~0.4m (継ぎ目部 分に当たる部分は約3.9m・約0.46~ 0.48m) の断面U字形の溝2条がこれ と併走していた。

この他、調査区の南東隅からは4-

≶ 柵列012 1365 0 i367 30 <u>N30</u> 大溝011-A j301 i359 358 357 i361 1378 i377 # j375 🌠 j376 j371 i346 i343 349 336 j345 **26 347** i342 i348 j335 j338 ⊮ j337 i339 b) 334 25 N25 j331 i327 1330 i323 i326 8

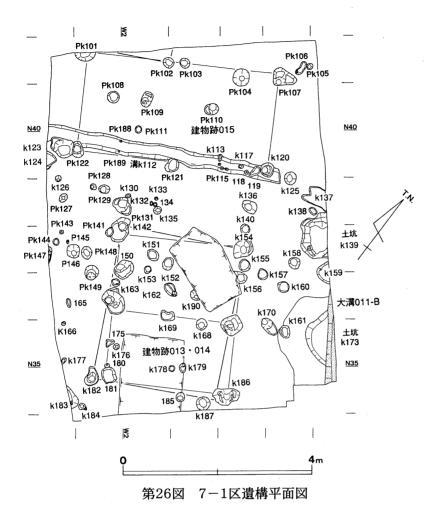
第25図 6区第2次面遺構平面図

2区等で検出した池跡032の一部(東岸に当たる)とその護岸施設を検出した。池跡はここでは深さ 約1.89mを測る。また護岸施設は、約39~53cmの間隔で、直径約6.5~12cm、長さ約1.28~2.05m の丸木杭を打ち込み、矢板を支えていた。方位についてはN-40~47°-Wを示し、高まりとほぼ同 じ方向を示していた。

■10区

10区は、東地区の中央付近に位置する調査区で、南北長約32.9m、東西長約4.1~4.85mの範囲、面積 約144.25㎡を測り、今回の調査で最も長い調査区である。この調査区では標高T.P.約4.29〜4.53mの 地表面から厚さ約0.43~0.7mの現代盛土層を経て旧表土層(Ⅲ層)・Ⅳ層・V層が堆積し、標高T. P.約3.48mで濃灰色粘土層上面が姿を表す。これが第1次面であり、調査区中央に幅約39~50cm、 残存長約6.33m、深さ約10cmを測り、方位N-35°-Wを示す溝1条 (溝t147)、北端には幅約50 ~81cm、残存長約4.53m、深さ約8cmを測り、方位N-1°-Eを示す溝1条(溝t146)を検出し た他、中央から北端にかけて杭列1列を検出した。

また、第2次面はΨ・IX層(第17~19層)をベースとして、調査区中央に幅約11~46cm、残存 長約3.75~4.34m、深さ約3~6 cmを測り、方位N-42.5~43.2°-Eを示して併走する3条の溝 (溝t316~318)を検出し、北側では溝状に連なる土坑群を検出した。この土坑群はいずれも灰色粘 質土を埋土とし、東西長約58~86cm、南北長約30~47cm、深さ約8~22cmを測り、方位N-12°-Wを示すものと、東西長約55~60cm以上、南北長約35~98cm、深さ約8~22cmを測り、 方位 $N-49^{\circ}-E$ を示すものがみられた。また調査区の南側では、直径約 $7\sim26$ cm、深さ約 $2\sim7$ cm を測り、方位N-53°-Wを示す円形のピット列を検出した。



第3次面では、標高T.P. 約3.47~3.5mの X 層をベー スとし、調査区の中央部 (N109ライン付近) から南 に向かってなだらかに傾斜 する谷状地形を検出した。 谷状地形の最深部はN95ラ イン付近で、遺構面から最 深部までの深さは約0.95m を測る。この谷状地形内か らは、第47層等をベースと して、直径約14~43cm、深 さ約4~21cmの円形のピッ ト4基(ピットt501~ t504·t509)、約2.6× 1.56m、深さ約43cmの土坑 1基(土坑t505)を検出し た。そして、この土坑内か らは布留式土器甕が出土し た。

■11-1区

南北長約24.95m、東西長約2.8m、面積約63.47 m^2 を測る。標高 T.P.約4.52 \sim 4.65mの地表面下約0.75 \sim 0.88mまでII層が、さらにその下にはIII・IV・Vの各層が

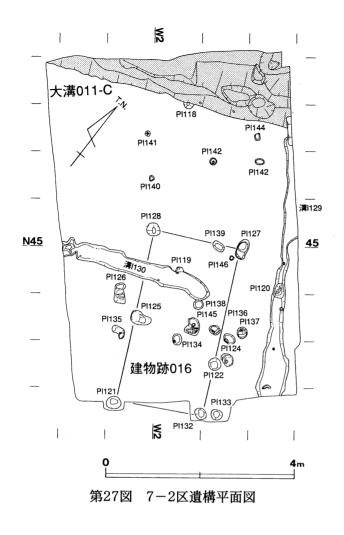
堆積しており、高城 B 遺跡において普遍的に観られる土層で構成される。そして、標高 T.P.約3.20~3.38mには W層(茶褐色粘土)及び X層(淡黄色粘土)の上面から187基に及ぶ多量の土坑、及び溝を検出した。これらの土坑群は、遺構内の埋土に濃灰色粘土を主体とし、円形若しくは不定形を呈するものと、灰色砂質土を埋土としほぼ長方形を呈するものの 2 種認められた。検出状況から前者→後者へ、時期に相違があるとみられる。また、これらの土坑群については、北から南に向かって密度が濃くなり、重複の度合いを深めていく傾向がみられた。

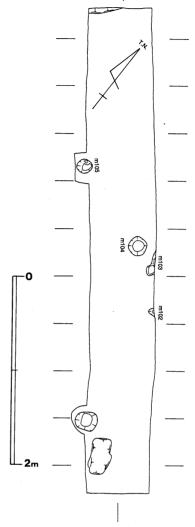
■11-2区

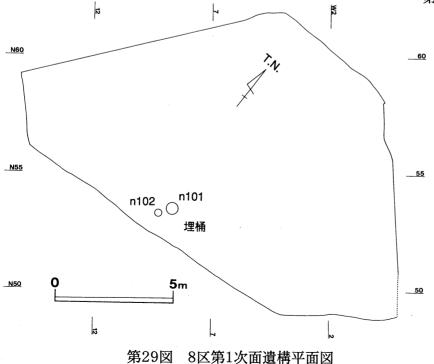
南北長約10.17m、東西長約3.25m、面積約31.9㎡の範囲を占める調査区である。標高 T.P.約4.21~4.59mの地表面下約0.45~0.87mまで II 層(盛土層)が堆積し、順次 II ・ IV ・ V 層がみられる。さらにその下には遺構面である X 層が認められた。この遺構面では、調査区の南北に位置する11-1 区や12-1 区同様に、不定形の土坑が多量にみつかった。ただし、ここでは個別に把握するのが困難なほど、著しく複雑に重複していた。埋土については、主に黄色の粘土小塊を含む濃灰色の粘土・粘質土で、調査区中央の低くなった所では、さらにその上に濃灰色砂質土層が広く覆っていた。深さは中央から北側では約46~52cm、南端で約17cmを測る。

12-1区

南北長約14.2m、東西長約2.7m、面積約35.9m²を測る調査区である。標高T.P.約4.25~4.51mの地表面から、深さ約0.53~0.77mのⅡ層以下、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの各層が堆積し、第1次遺構面であるⅧ層

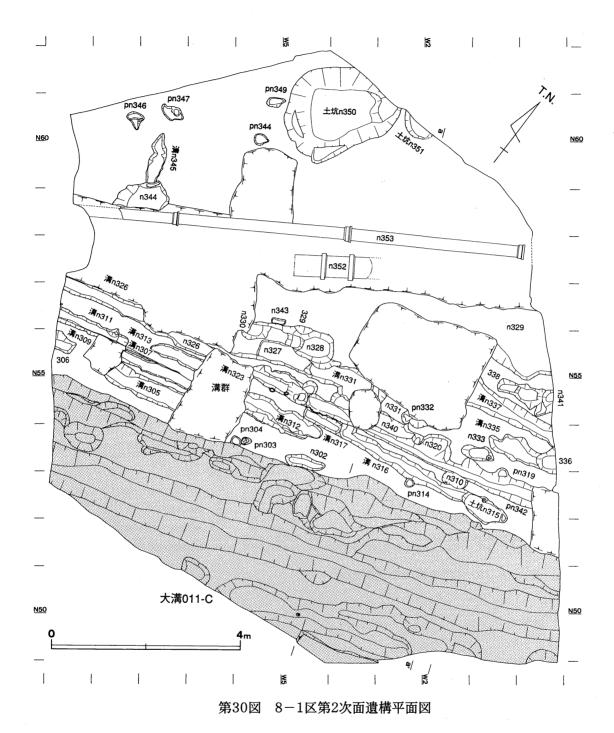






第28図 7-3区遺構平面図

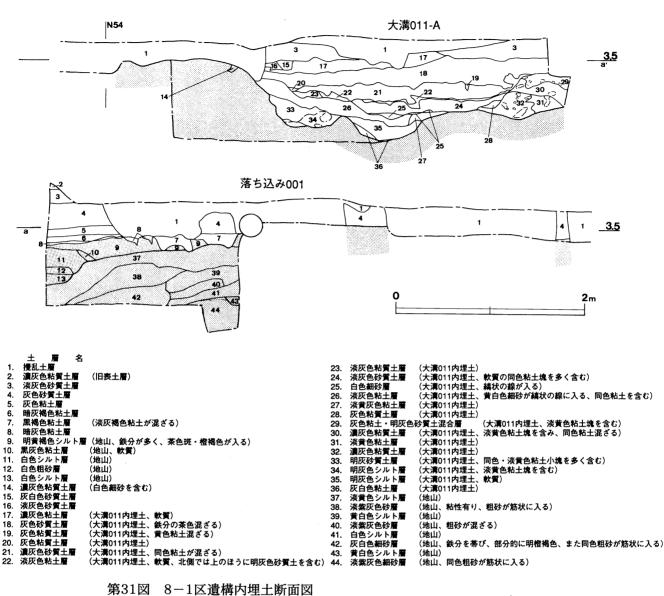
上面に達する状況 がみられた。この 遺構面では11-2 区と同様、著しい 重複のために一つ ひとつ個別に把握 するのは極めて困 難だったが、これ らの土坑以外には 幅約19~50cm、 深さ約3~15cmを 測り、方位N-44.4°-WからN-37.3°-Eへ方向を 転じる、3条の溝 を検出した。また



™層の約5~30cm下のX層上面では黒褐色粘土を埋土とするピット・土坑などの遺構を検出した。

■12-2区

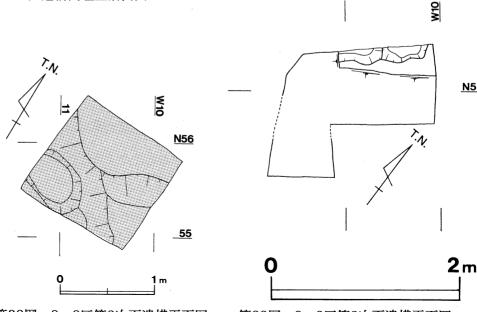
1-1区とともに最南端に位置する調査区の一つ。南北長約22.4m、東西長約2.8m、面積約54.81㎡ を測る。標高 T.P.約4.39~4.55mの地表面下、約0.63~0.85mまで盛土層がみられる。 \mbox{W} 層(茶褐色 粘土層)上面からは、幅約36~46・30~70cm、深さ約13cmを測り、方位N-37.5・38.5° $-\mbox{W}$ を示す、併走し合流する 2 条の溝と深さ約8cmを測る落ち込みを検出した。この他、11-1 区~12-1 区 にかけて展開する土坑群と類似した、ピットや土坑が多数検出されたが、ここでは不規則に重複する



のではなく、溝状に 方位N-34.7°-W を示す方向性が認め られた。

Ⅵ層より約5~ 30cm下のX層上面 (第2次面)では、 黒褐色粘土を埋土と するピット・土坑な どの遺構を検出し た。

5. 遺 構 今回の発掘調査で



第32図 8-2区第2次面遺構平面図

第33図 8-3区第2次面遺構平面図

N5

は、掘立柱建物、大溝、溝、ピット、土坑、土坑群、 池跡、道跡等数多くの遺構が発見された。

(1) フラスコ状土坑f117

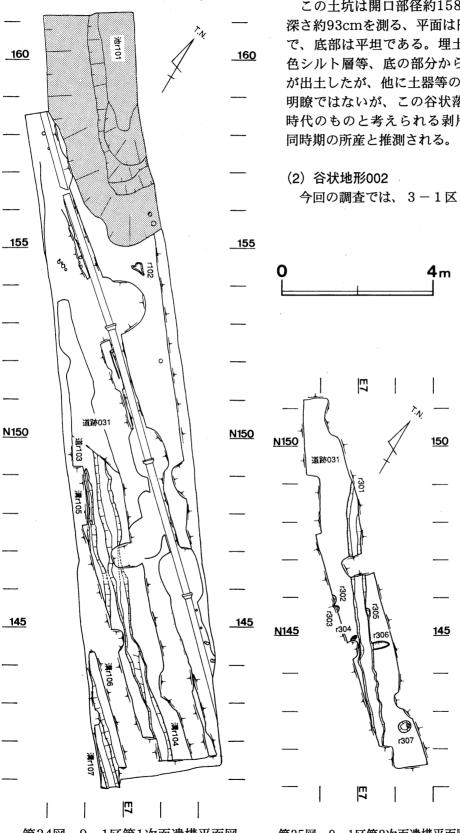
この土坑は開口部径約158cm、底部径約195cm、 深さ約93cmを測る、平面は円形、断面は台形の土坑 で、底部は平坦である。埋土は黒褐色粘土・淡黒灰 色シルト層等、底の部分からサヌカイトの剥片1点 が出土したが、他に土器等の遺物はみられなかった。 明瞭ではないが、この谷状落ち込み内には他に縄文 時代のものと考えられる剥片が数点出土しており、 同時期の所産と推測される。

今回の調査では、3-1区・3-2区・4-1区・

谷状の落ち込み地形 を発見した(谷状地 形002)。この谷状 地形は、尾根の痕跡 と考えられる南北両 側の高まりに挟まれ て延びている。この 地形は、削平されて 平坦になった尾根の 遺存部分の標高T. P.約3.5m (10区) から緩やかに傾斜し ながら降り、N95 ライン付近でT.P. 約2.55m (10区) の最深部に達する。 幅は約31.45mに及 び、方位N-55.7~ 58.7°-Eを示す。 谷状地形内の埋土 は、下から紫灰色粘 土層・黒灰色粘土 層・暗灰色粘土層・ 暗茶褐色粘土層等の 層が順次堆積してい た。このうち、紫灰 色粘土層~暗灰色粘 土層からは殆ど遺物 の出土はみられなか ったが、第3次遺構

面の谷底で発見され

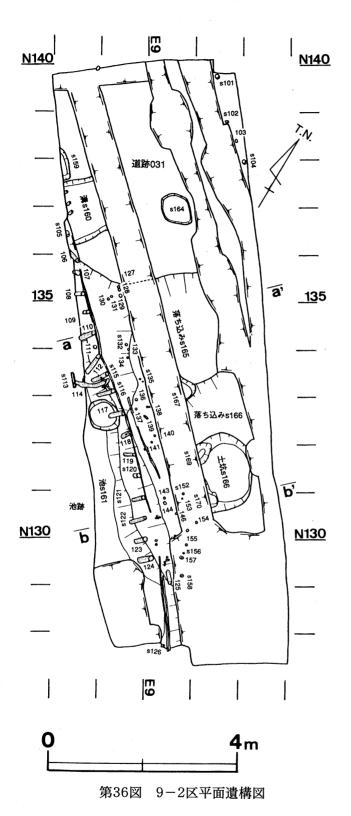
10区にまたがって



第34図 9-1区第1次面遺構平面図

E7

第35図 9-1区第2次面遺構平面図



た遺構からは、弥生土器や布留式土器が出土し、暗茶褐色粘土層からは、土師器皿、瓦器椀、須恵器鉢、青磁等14世紀中頃までの遺物が出土した。また、谷状地形上を覆う灰色粘土層からは、瓦質羽釜や備前焼擂鉢等の15世紀後半の遺物の出土がみられた。これらの出土遺物から、古墳時代前期頃にはほぼ埋没が始まり、14世紀前半頃にはほぼ埋没したと考えられる。

なお、明瞭ではないが、この他にも 堆積状況から低い高まりを挟んで、8-1区の北半と、 $1-1\cdot1-2$ 区・12-2区の2力所にも谷状に降る 地形が展開すると考えられる。

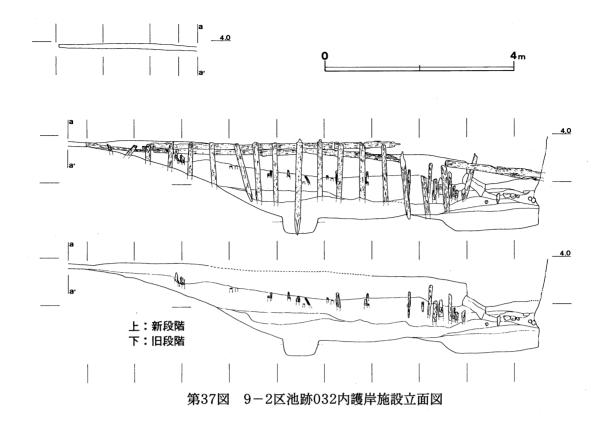
(3) 大型土坑 h 164

5区の南半部で検出した不定形の土坑で、東西径約2.24m以上、南北2.85m、深さ約57cmを測る。埋土は土坑中央に縦方向に入る9層を境に、南北で大きく異なっており、北側は暗茶褐色~黒褐色の粘土(第4~8・10・12~15・17層)で構成されてもいで、南側では灰白色等の軟質に対して、南側では灰白色等の軟質に対して、南側では灰白色等の軟質が表がに対した。遺物については、第3・11・16・18・19層)で構成されていた。遺物については、第72図(1))が出土したのみで他からは全別としなかった。このため、時期かた。

(4) 井戸跡k172

7-1区の南東端で検出した遺構で、大溝011-Bと重複する形で発見された。標高T.P.約4.25mの遺構面では、直径は約1.47mを測り、北側の段を有する部分では約57×81cm、深さ約206.5cmの底面では約45×41cmとなる。さらにその下には開口部の直径約10cm、深さ約50・43.5cmを測る、

杭を打ち込んだような痕跡が発見された。このうち、北側のものについては XI 層にまで達していた。 埋土については、上半では軟質の黒色粘土層が厚く覆い、下半では厚さ約8~16cmの黒灰色~茶褐色 の粘土・シルト層が幾層にも堆積する様子がみられた。これらの埋土内には、下半からは布留式土器 甕、須恵器蓋杯など古墳時代の遺物が、上半では布留式土器の他、土師器椀など平安時代の土器が出



土した。この井戸は古墳時代中期頃に使われていたが、廃絶後も埋め戻されることなく、徐々に堆積 し、平安中期頃に至って、一挙に埋め戻されたと考えられる。

(5) 大溝011

6区・7-1区・8-1区・8-2区にまたがって検出された遺構で、6区~7-3区で検出した掘立柱建物群を取り囲むように開削されていた。幅約2.5~4.16m、深さ約17~85cmを測り、方位N-58.4°・73°-Eを示す。6区では横断面形U字形だが、8-1区では逆凸形となり、埋土も8-1区では複雑な堆積を示しており、幾度か掘り直されたものと考えられる。出土遺物については、6区は土師器皿が出土し、8-1区では上層から土師器皿、瓦器椀、瓦質土器甕、須恵器鉢、中層から土師器皿・甕、瓦器椀、須恵器鉢、瓦質羽釜、下層から土師器皿・甕、瓦器椀、瓦質羽釜、須恵器蚕・鉢、最下層から土師器皿・甕、須恵器杯、樟葉型瓦器椀、備前焼、平瓦、さらに底面より緑釉陶器が出土した。

このうち、8-1区の大溝011-Cについては、埋土の検出状況や出土遺物から、建物群廃絶後も継続的に使用され、中世に至って埋没したと想定される。

(6) 柵列012

大溝011-Aの北岸で併走し、3間($1.25\sim1.5$ m)を確認した。方位 $N-59^\circ-E$ を示し、南西方向には調査区外にも続くと考えられる。掘り方は円形で直径約 $12\sim36$ cm、深さ約 $6\sim28$ cmを測る。ピット内からは遺物の出土はみられなかった。

(7) 建物跡013

7-1区で検出した堀立柱建物跡で、調査区内での検出部分は1間(2.65m)×2間(3.3m)と考えられ、主軸の方位はN-26° -Wをとる。柱の掘り方は円形で直径約 $30\sim59$ cm、深さ約 $37\sim59$ cmを測る。柱穴内からは土師器皿・椀・甕、黒色土器A類椀、須恵器杯・甕などの遺物を出土した。建物跡014と重複関係にある。

(8) 建物跡014

建物跡013同様、7-1区で検出した。検出部分は、1間(2.62m)×2間(3.16m)で、主軸の方位はN-28.5°-Wである。柱の掘り方は一辺約 $28\sim59$ cm、深さ約 $16\sim56$ cmで、隅丸方形と考えられるが、建物跡013と重複関係にあり、明確ではない。柱穴内からは土師器皿・椀・甕、黒色土器A類椀、須恵器杯・甕などの遺物を出土した。

(9) 建物跡015

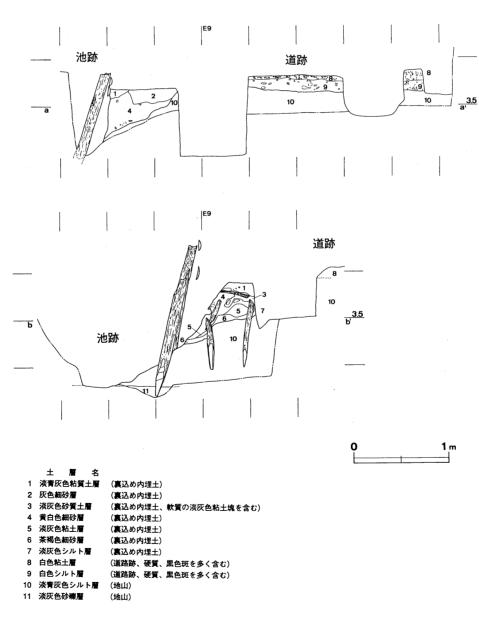
1間(2.06m)×2間(4.07m)であるが、西北西側のPk101が7-2区の建物跡016と重複している他、南側の $Pk120 \cdot Pk121 \cdot Pk122$ も溝k112と重複関係にある。主軸の方位は $N-61.2^\circ-E$ を示す。柱の掘り方は円形で、直径約 $21\sim58$ cm、深さ $23\sim50$ cmである。遺物は土師器皿、黒色土器A類椀などを出土した。

(10) 建物跡016

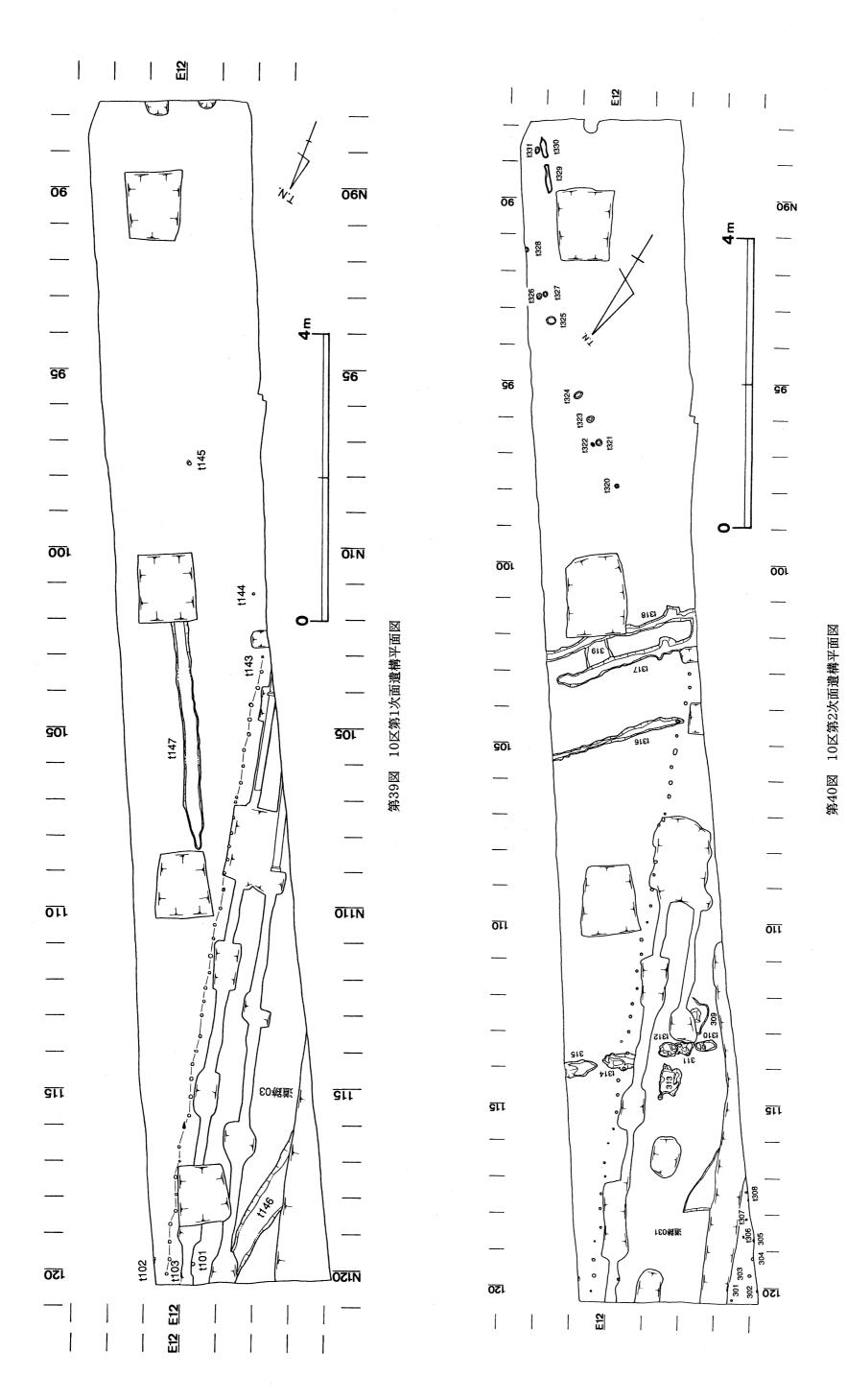
7-2区で検出した堀立柱建物跡で、1間 (1.9m) $\times 2$ 間 (3.74m) であるが、南側のPk101が 7-1区の建物

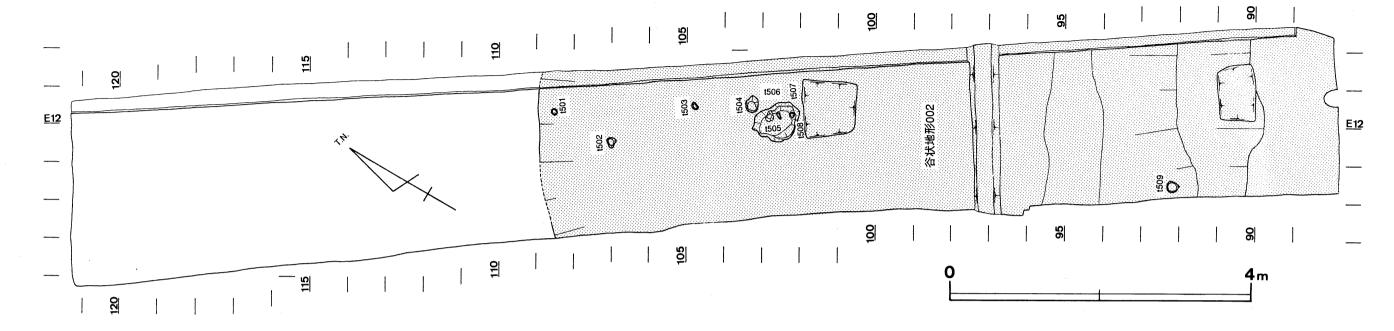
跡015と重複し、 明確ではない。 また、この建物 跡は溝1130とも 重複関係にあ る。主軸の方位 はN-24.2°-Wを示し、柱の 掘り方は円形 で、直径約25~ 32cm、深さ12 ~39cmを測る。 遺物は土師器 皿・椀・甕、黒 色土器A類椀な どを出土した。

(11) 土坑群

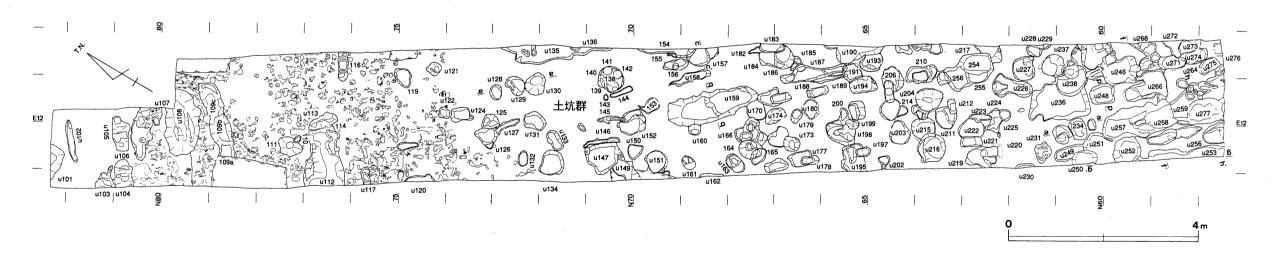


第38図 9-2区遺構断面図

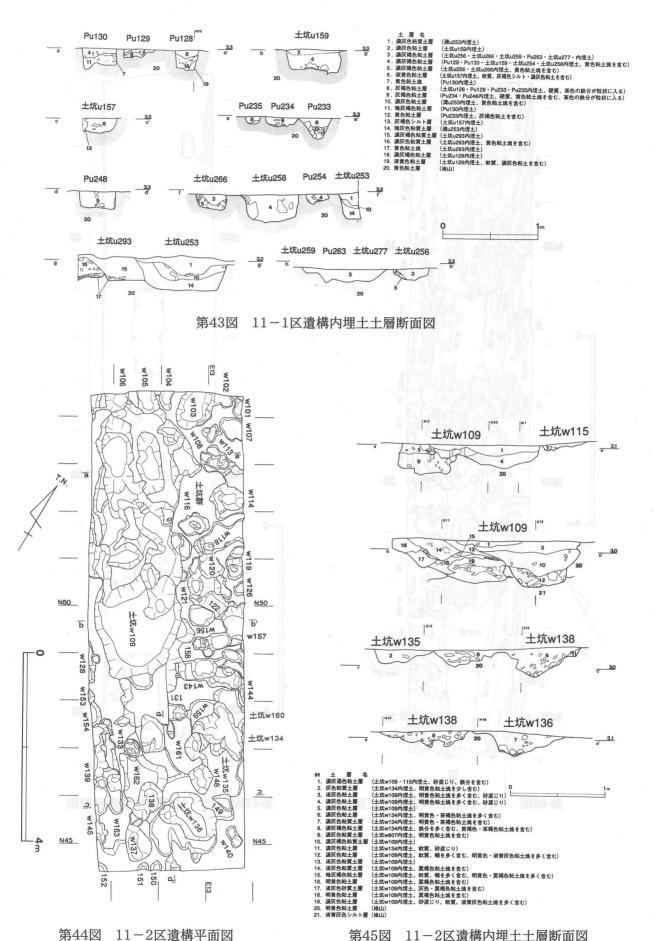




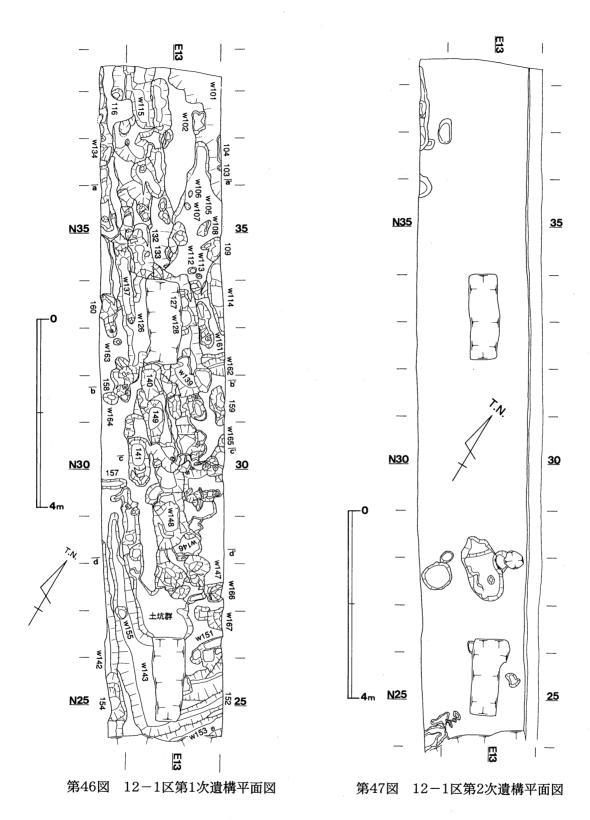
第41図 10区第3次面遺構平面図

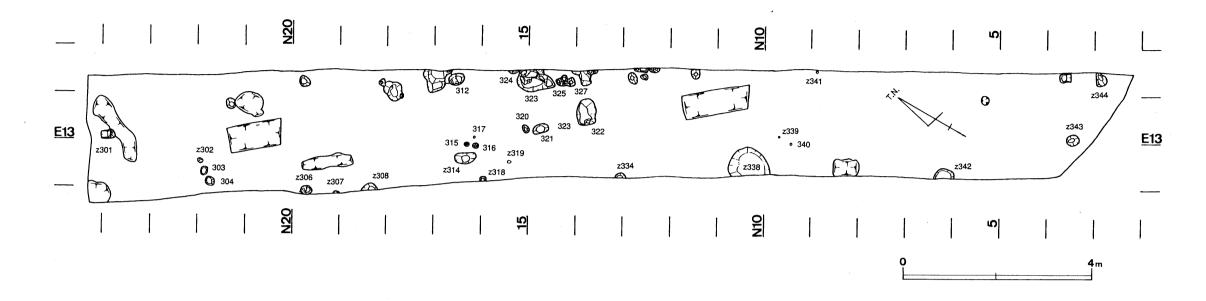


第42図 11-1区遺構平面図

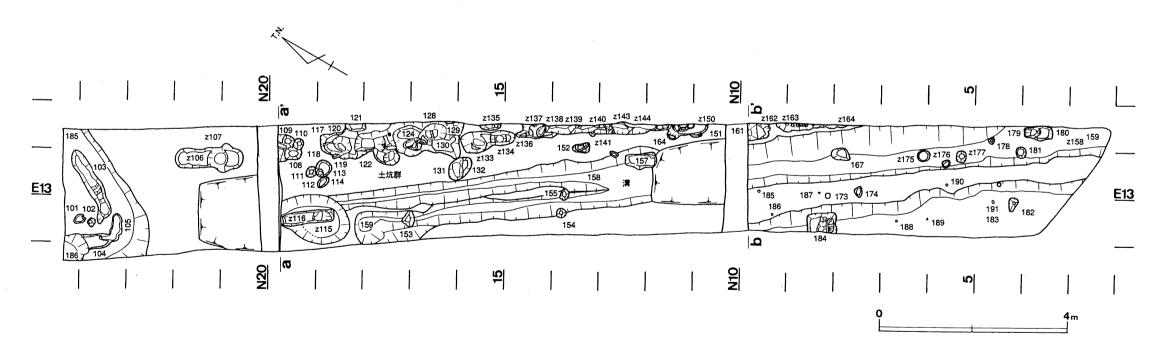


第45図 11-2区遺構内埋土土層断面図

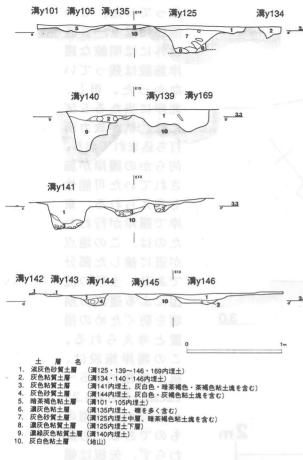




第48図 12-2区第1次面遺構平面図



第49図 12-2区第2次面遺構平面図



第50図 12-1区第1次面遺構内 埋土土層断面断面図

1条を検出したものの、土坑群の継続は認められなかった。また、東地区でも谷状地形の展開する10区では土坑群が全く検出されず、11-1区から出現することから、これらの土坑群は谷状地形002南岸を北限とするとみられる。11-1区では、 $N74\sim78$ ラインに南西~北東方向に帯状に広がる足跡の密集地域が確認されたが、その付近から出現し始め、北から南に向かって徐々に増していく。さらに11-2区及び12-1区では、著しく重複し土坑の個別の形状は判別しがたくなるが、12-2区に及んでその数を減じ、溝状に延びる程度となる。これらの検出状況から、3-1区~12-1区に帯状に高密度分布地域があり、さらにその周辺に向かって減少させながら広く分布していると考えられる。

また埋土については、大別して濃灰色粘土層を主体とするものと、灰色砂質土層の2種を検出した。このうち前者については、開削後埋め戻されず放棄され、流れ込んだ土砂により埋没した可能性が考えられる。

(12) 道跡031

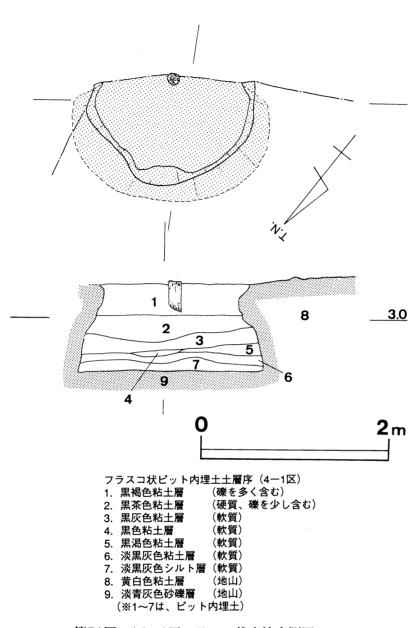
道跡については、9-1区・9-2区・10区・3-1区で検出した。この道路跡には下水及び通信用ケーブル等の埋設管を設置した、断面形がU字形或いはコの字形を呈する溝が併走していた他、道の両端には約6.5~49cmの間隔で打ち込まれた直径約5~11.5cm丸木杭による杭列が検出された。杭列については、調査区の幅が狭いため、ほとんどの調査区で片側しか検出されなかったが、9-2区では東西両側の杭列が検出され、その幅は約3.9mであった。

9-1区・9-2区では約30cmの比高差が認められたが、10区では道の内側とその周辺との比高はがほぼ同一であった。これは10区では道路部分が削平を受けたために平坦化したものとみられるが、特に9-1区南半から9-2区にかけては道路上面に硬質の砂礫層が幾層にも積み重なっており(14層~28層)、道路敷設の際に、さらに土砂を積み上げたものと考えられる。また9-2区では道路上に浅い土坑が認められたが、道路上の土砂が流失した際に補修のために挿入した土砂が当初のものと異なっていたことにより、結果的に土坑状の痕跡として遺存したと考えられる。道路跡の方位については、杭列等の方位から3-1区では $N-26^\circ-W$ 、10区では $N-22^\circ-W$ 、9-2区になると $N-40^\circ-W$ から $N-47^\circ-W$ となり、9-1区ではさらに $N-49^\circ-W$ から $N-47^\circ-W$ へと推移しており、本来の道はS字状に迂曲していたとみられる。

時期については、9-1区では近世に堆積したと考えられるV層の堆積以前に、地山であるX層 (淡黄色粘土層) が道の両側で削平され、比高差を生じていたことや、9-1区、9-2区及び10区 の全てにおいて埋設管が併走して敷設されていたことなどから、近世頃に設置され、昭和初期につけ替えられたと想定される。

(13) 池跡032

この池跡は、4-1区・4-2区・5区・9-2区にまたがっていた。西側に向かって更に広がっていることから、その範囲は南北長約26.6m以上、東西長約12.2m以上となり、V層をベースとして深さ約1.89mを測ると考えられる。平面形状は台形を示すようにみられるが、全体像は明確ではない。南北方向の断面形状は逆台形をしており、埋土は上半がコークスを主体とする攪乱士、下半が軟質の



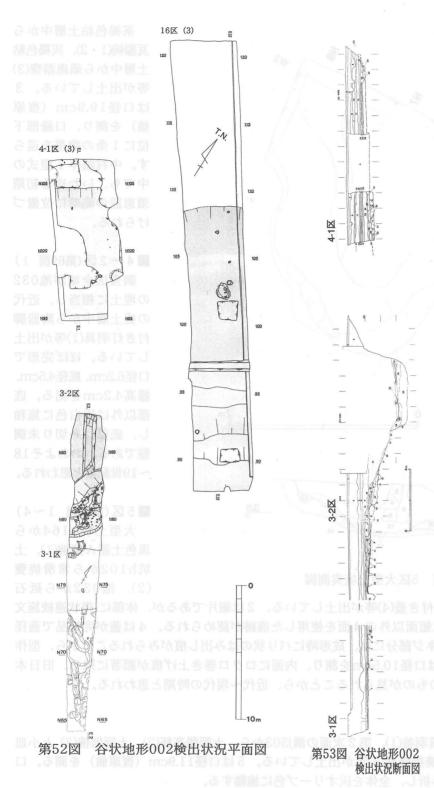
第51図 14-1区フラスコ状土坑実測図

濃灰色粘土層から なっていた。この 池跡には9-2区 以外には明瞭な護 岸施設は残ってい なかった。但し、 北岸に当たる5区 には、杭が数カ所 打ち込まれており、 何らかの護岸が施 されていた可能性 も考えられる。東 岸で護岸が行われ たのは、この地点 が道に接した部分 であり、土砂の流 出による道路の崩 壊を防ぐための措 置と考えられる。 この護岸施設は、 杭が直径約6.5~ 12cm、長さ約1.28 ~2.05mと大型の ものであるにも関 わらず、矢板は幅 約10~15cm、長 さ約1.31~3.04m のものが2列(高さ 約23.5cm) に並ん でいるのみで、更 に下方に及んでい なかったことから、 この池を開削した 後、土砂が堆積し て幾分浅くなった

時点で、設置されたと考えられる。むしろ、この杭列の東側の裏込め内に埋没していた、一見無規則に打ち込まれた直径約4~7.5cm、長さ約36~72mの丸木杭群が5区でみつかったものと類似しており、池の周囲に普遍的に構築されたものであった可能性が考えられる。なお、この池跡内埋土のうち、下半の軟質の濃灰色粘土層からは土師器皿、須恵器鉢、瓦質土器甕、備前焼甕、染付椀、平瓦など主に中世~近世期の遺物が出土したが、埋土上半はコークスを主体とする攪乱土からなっており、桟瓦、陶器灯明皿・鍋・蓋等が出土した。江戸時代に開削後、徐々に土砂が堆積して形状を変えながらも存続し、昭和初期に行われた吹田土地区劃整理組合の区画整理事業による、道路つけ替えの際に埋没したものと考えられる。

6. 遺物

今回の発掘調査では、遺構及び遺物包含層等から、縄文時代の石器をはじめとして、弥生時代〜近代に至る土器・石製品・金属製品・木製品等の遺物を収納箱約19箱分出土した。建物跡の柱穴内や



井戸、大溝、谷状地形、土坑 群などからの良いものの良いもので状況の良いものである。 た。しかし、今回の調査が出土してまり、 たっな器種が出土してまり、 様々な多様性がそのとさいる。 は、こでは、主に図れる た遺物の概要を記載する。

■1-2区(第66図 1)

全般的に細片が多く、図化可能なものは極く僅かである。1は泥面子のひょっとこである。完形品で縦2.7cm、横2.1cm、厚み1.2cmを測る。出土層位は不明であるが、扇浦編年第Ⅰ期(19世紀第1~3四半期)に位置づけられる。

■3-2区(第67図 1~7) 調査区の大半が谷状地形 002と池e102の埋土に相当 し、中世後半期の陶器類が出 土している。

1は土坑d131から出土の 弥生土器で、全体的に摩滅が 著しく、部分的にヘラ磨きが 看取が出来る。

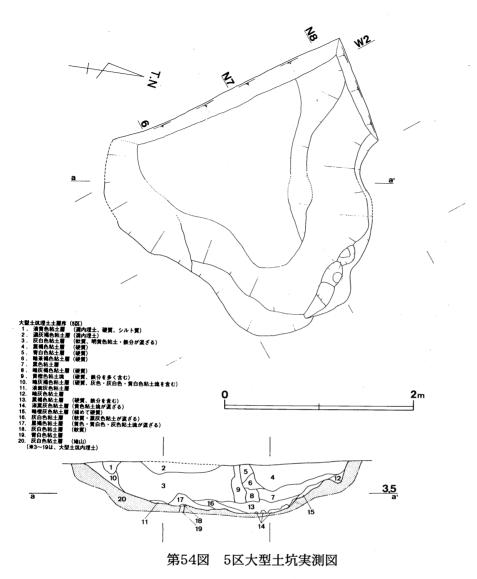
谷状地形002上層からは、 瓦質羽釜(2)、備前焼擂鉢(3)、 青磁椀(4)等が出土している。 2は口径26.5cm(復原値)、 鍔径35.2cm(復原値)を測 る。鋤柄編年C群Ⅲ期(15世紀前半)に位置づけられる。 3は口径36cm(復原値)を 測り、内面に7条1組のすり目を施す。佐野編年ⅣB期古

相(15世紀後~末葉)に位置づけられる。胎土は砂粒を含み、やや粗い。

池e102からは、備前焼擂鉢(5・6)、陶器甕(7)等が出土している。 5 は復原口径25.8cmを測り、IVB期古相に 位置づけられる。 6 は底径12.2cm(復原値)を測り、内面に 9 条 1 組のすり目を施す。おおよそ16世紀頃と考えられる。

■ 4-1区 (第68図 1~3)

遺構内からの出土は少なく、多くは各遺物包含層中からのものである。



茶褐色粘土層中から 瓦器椀(1・2)、灰褐色粘 土層中から須恵器甕(3) 等が出土している。3 は口径19.9cm(復原 値)を測り、口縁を巡り 位に1条の突帯を巡式の 中でも、いわゆるであいいた。中村編年I型初 中でも、いわゆるで置づけられる。

■4-2区(第69図 1) 調査区全域が池032 の埋土に相当し、近代 の盛土層中から陶器脚 付き灯明具(1)等が出土 している。ほぼ完形で 口径6.2cm、底径4.5cm、 器高4.2cmを測る。底 部以外は灰白色に施釉 し、底を切り未調 整である。おおよそ18 ~19世紀頃と思われる。

■5区(第70図 1~4) 大型土坑h164から 黒色土器A類椀(1)、土 坑h102から常滑焼甕 (2)、池032から砥石

(3)、撹乱坑から陶器壷とネジ付き蓋(4)等が出土している。 2 は細片であるが、体部に 帯状連続施文 (押印文) が認められる。 3 は短面以外の 4 面を使用した痕跡が認められる。 4 は蓋が完形品で蓋径 10.9cm、器高5.5cmを測る。ネジ部分には、成形時にバリ状のはみ出し痕がみられることから、型作りの可能性が考えられる。壷は口径10.5cmを測り、内面にロクロ巻き上げ痕が顕著に残る。旧日本陸軍の毒ガス容器などに類似のものが見られることから、近代~現代の時期と思われる。

■6区(第71図 1~5)

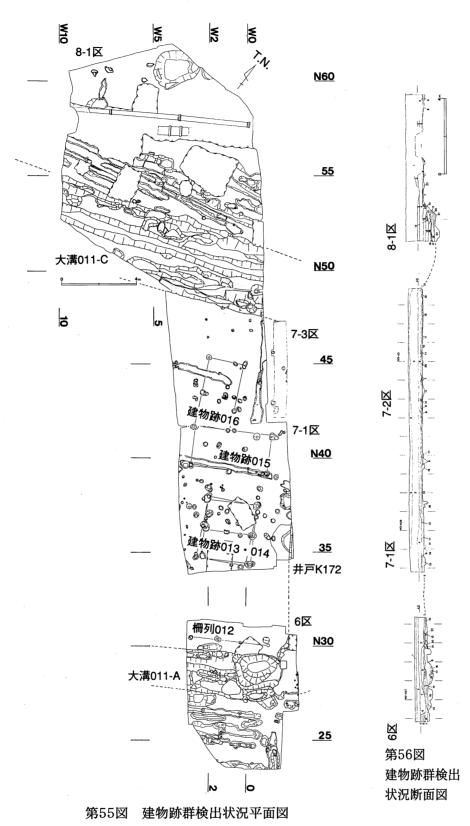
第1次面の土坑j108から瓦質羽釜(1)、第2次面の溝j303から、土師器高杯(2)、土師器椀(3) と小皿(4)、濃灰色粘質土層から瀬戸焼折縁皿(5)等が出土している。5は口径11.9cm(復原値)を測る。口縁部は大きく屈曲して端部が外折し、全体を灰オリーブ色に施釉する。

■7-1区

(1) 第72図 $(1 \sim 9)$

遺物は遺構面上の各ピットおよび遺物包含層(黒褐色粘土層)から出土し、平安時代中期の黒色土器・土師器と、古墳時代中期の須恵器・土師器とに大別出来る。

 $1\sim 9$ は井戸k172から出土の遺物で、埋土最上位から平安期の粗製土師器椀(9)、埋土中位以下から 須恵器の蓋杯 $(1\cdot 5\sim 7)$ 、弥生土器(2)、布留式土器など古墳時代の土師器 $(3\cdot 4\cdot 8)$ 等が出土している。



復原口径は1.4cm、5が11cmを 11.4cm、5が11cmを 11.4cm、5が11cmを 2.1 のででで2.2 削 2.2 削底調のを 2.3 のを 2.3 のを 2.4 に 2.4 に 3.5 に 3.5 に 3.5 に 3.5 に 4.5 に 4.5

甕(8)は口径18cm、胴部最大径28.9cm (ともに復原値)を測る。内面は上下方向のケズリ、体部はハケ調整を施し、3条/cmと5条/cmの2種類の原体を使用している。布留式期以降(5世紀後半)の土師器に位置づけられる。

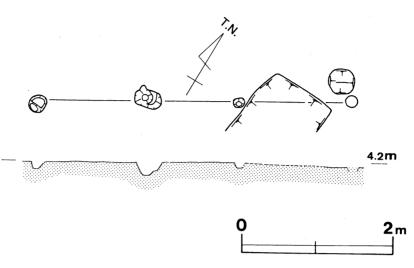
(2) 第73図 (10~40) 土師器小皿はピット k154から(10)、ピット k108から(11)~(13)、 ピットk139から(14)・ (15)、ピットk156から (16)がそれぞれ出土し ている。(12)~(16)は 「て」の字状口縁皿で ある。器厚は3~4 mm程度で、復原口径 は大きいもの(12)で 13.7cm、小さいもの (16)で9.2cmである。 (12)~(16)は伊野分類 Bb~Bcタイプ(11世紀 中~後葉)に位置づけ られる。

土師器椀はピットk137から(17)・(19)、ピットk139から(18)、ピットk154から(20)が出土している。いずれも体部・底部外面は指圧調整を施し、それ以外の箇所はナデ調整を基本に仕上げる。(17)は口径15cm(復原値)、器高3.7cm、高台径7.6cm(復原値)を測る。

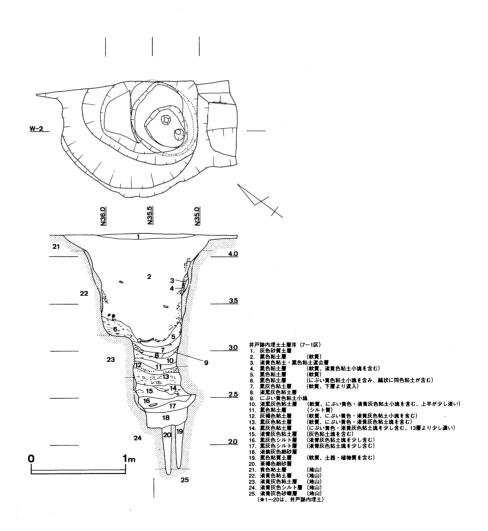
黒色土器はピット k120から(21)~ (23)・(32)、ピット k129から(24)、ピ ットk139から(25)、 ピットk154から $(26) \cdot (31) \cdot (34) \sim$ (36)、ピットk156 から(27)・(28)、ピ ットk164から(29)、 ピットk170から (30)、ピットk107 から(33)がそれぞれ 出土している。すべ て内黒仕上げのA類 である。復原口径は 15cm程度で、大き いものでも17cmを 越えない。(23)・ $(24)\sim(27)\cdot(29)\cdot$ (30)・(41)は口縁端 部内面に沈線を巡ら す。おおよそ10世 紀中頃~後半の範疇 に位置づけられる。

ピットk120から 土師器鍔甕 (37) が出土している。口 径19.6cm、鍔径 26.9cm (ともに復 原値)を測る。おお よそ10世紀中頃の 所産と考えられる。

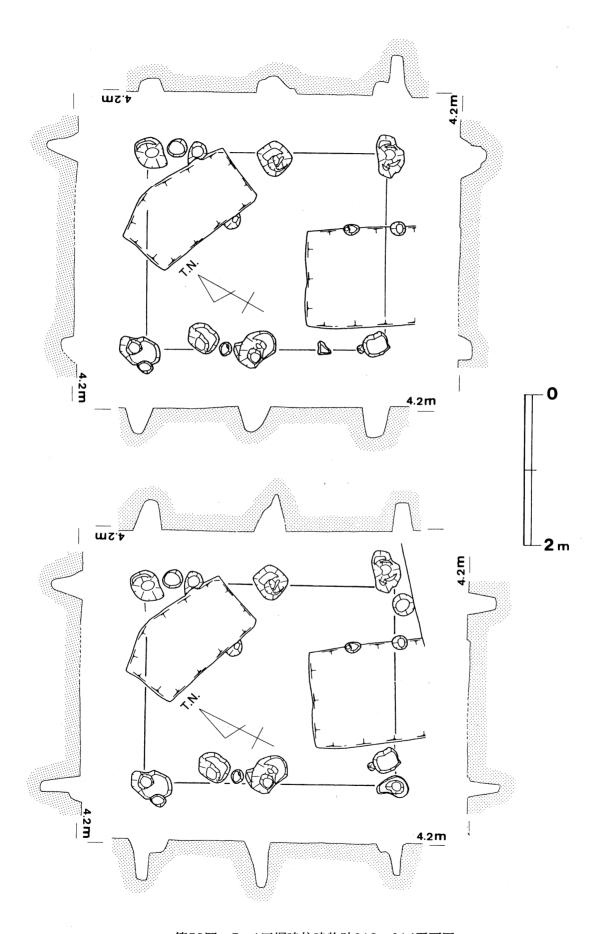
須恵器はピット k159から(38)、ピットk197から(39)、ピットk121から(40)が出土し(38)と(40)が出土し(38)と、コス2~3段では、中村階あるは、中村階あるは、担手部分は把手がは大りにでは、大きに変値がある。(38)は一つでは、大きには、1500円では、1



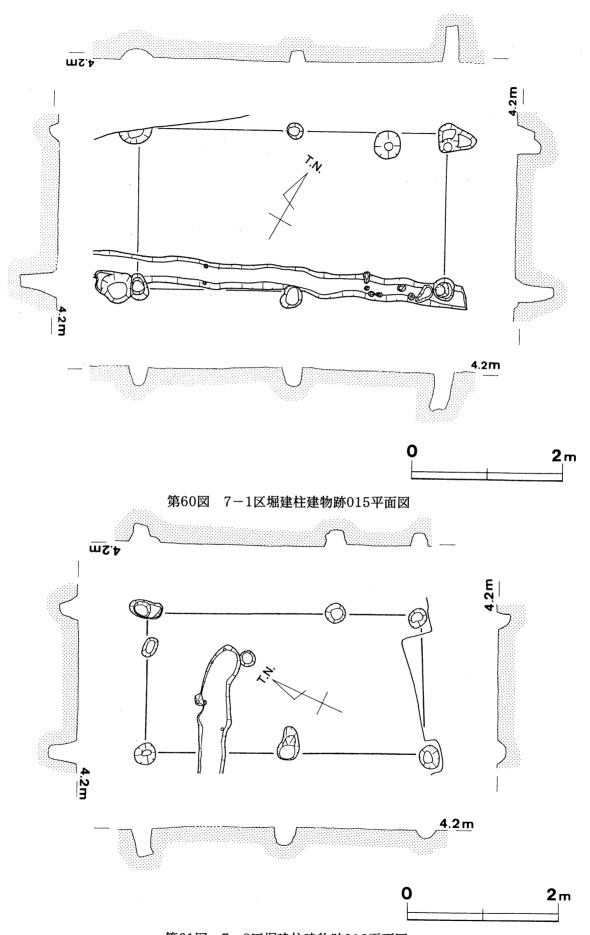
第57図 6区柵列012平面図



第58図 7-1区井戸跡k172実測図



第59図 7-1区堀建柱建物跡013·014平面図



第61図 7-2区堀建柱建物跡016平面図

飾る。(39)は高杯の杯部で、口径12cm (復原値)、胴径13.2cm (復原値)を測る。 (40)は平安時代頃の鉄鉢形土器である。

黒褐色粘土層中からは黒色土器A類 椀(41~43)と、土師器鍔甕(44)等が出 土している。

■7-2区(第74図 1~3)

ピット123から黒色土器A類椀(1)、ピット1128から土師器椀(2)、溝1130から 灰釉陶器椀(3)等が出土している。 3 は 口径13cm(復原値)を測り、口縁部は直 線的に開いて、全面を灰白色に施釉する。

■7-3区(第75図 1~3)

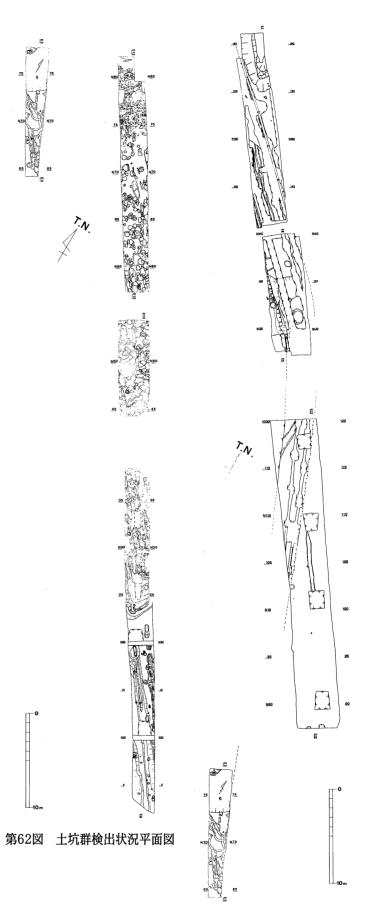
ピットn104から黒色土器A類椀、ピットn101からは「て」の字状口縁皿(2)や用途不明の鉄製品(3)等が出土している。3は錆の付着が著しいが、原形は「ロ」字状を呈し、縦2.5cm、横4.6cm、断面径6~7mmを測る。

■8-1区(第76図 1~10)

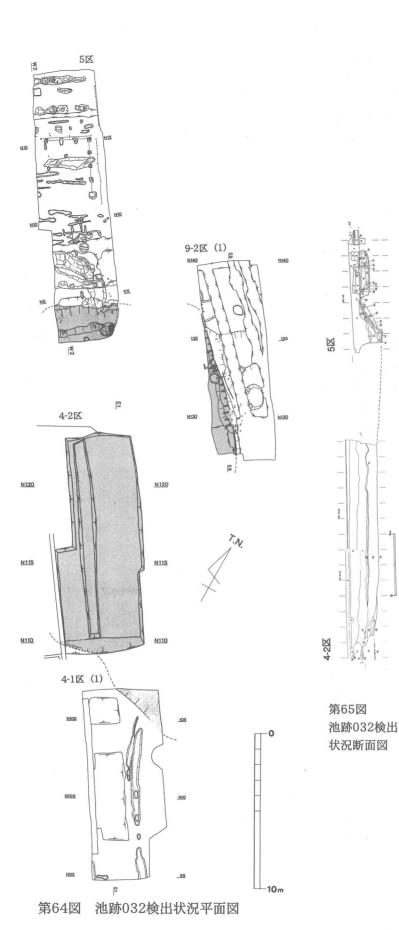
大溝011-Cから瓦質土器(1・2)や白磁 椀(3)等が出土している。1は羽釜で、 残存高3.5cmを測る。体部外面はヘラ削 り調整を施す。京都型の系譜に近いと 考えられる。

2は甕で、残存高3cmを測る。摩滅が著しいが、体部外面に平行タタキ目を施す。鋤柄編年Ⅱ-3期(15世紀中葉)に位置付けられる。3は白磁椀で口径17.4cm(復原値)を測る。体部から口縁部にかけて内湾気味に外上方に開き、口縁部にやや大きめの玉縁状の口縁を持つ。明緑灰色の釉薬を全面に施釉する。おおよそ12世紀までの年代幅に収まると思われる。

土坑n310から土師器小皿(4・5)が出土している。4は埋土下層出土の「て」の字状口縁皿で、口径10.2cm(復原値)を測る。5は埋土上層から出土し、復原口径9.7cmを測る。全面ナデ調整のみで仕上げる。前者は小森・上村編年IV期(11世紀末~12世紀後葉)に位置づけられる。



第63図 道跡検出状況平面図



灰色粘質土層からは瓦 器椀(6)、滑石製石鍋(7)等 が出土している。7は破 片のため口径等は不明で、 器厚は1.7cmを測り、体 部外面に煤が付着する。

濃灰褐色粘質土層からは灰釉陶器椀(8)等が出土している。復原口径18cmを測る。口縁端面は強いナデにより凹線状を呈する。全体を灰白色~にぶい黄橙色に施釉する。

第 1 次 面 の 埋 め 桶 n101から鉄製火箸(9・ 10)等が出土している。 近代の遺物である。

- ■8-2区(第77図 1) 調査区全域が第2次面の大溝011-C埋土に相当し、中世の平瓦(1)が1点出土している。破片のため全長等は不明で、器厚1.8cmを測る。凸部にコビキ痕(斜め方向の緩弧線)が残る。
- ■9-1区(第78図 1) 調査区全域が遺構面近くまで撹乱を受けており、 全体的に出土遺物の数量 は少ない。

池r101から須恵器甕(1)が出土している。口径33.8cm(復原値)を 測り、口縁端面は浅い凹線状を呈する。

■9-2区(第79図1・2) 池032の裏込め土内に は東播系須恵器こね鉢 (1)等が含まれていた。 森田編年Ⅱ-2期(12世紀末~13世紀初)に 位置づけられるが、この 裏込めの時期を示すもの ではないと考えられる。池032埋土からは施釉陶器鍋(2)等が出土している。口径15cm(復原値)を 測り、体部から外側に屈曲する受け部と、短く立ち上がる口縁端部を持つ。全面に淡黄色の釉薬を施 す。18~19世紀頃の所産と思われる。

■10区

(1) 第80図 (1~27)

遺構内からの出土は少なく、大半が各遺物包含層中からの出土である。

第1次面の溝t147から土師器小皿(1)、第2次面の土坑t314から瓦器椀(2)、第3次面の土坑t505中層から土師器甕(3)等がそれぞれ出土している。

1は口径 $6 \, \mathrm{cm}$ の小形で、口縁部は丸みをもって立ち上がる。積山編年皿 $5 \, \mathrm{#}\, 11$ 段階($18 \, \mathrm{tem}$)に近いか。 $2 \, \mathrm{tem}\, 11$ は口縁端部内面に沈線が巡る楠葉型の製品と思われ、橋本編年 $11 \, \mathrm{Im}\, 11$ ($12 \, \mathrm{tem}\, 11$)に位置づけられる。

黄色粘土層(地山) 直上から土師器壷(4)、瓦器椀(5)、瓦質鍋(6)、東播系須恵器こね鉢(7)等が出土している。

6 は口径20.7cm(復原値)を測る。体部 は寸胴で、口縁受け部の屈曲が鋭く端部は三角形を呈する。 鋤柄編年中世Ⅲ期(13世紀後半~14世紀前半)に位置づけられる。

黒褐色粘土層からは内黒仕上げの黒色土器A類椀(8)、灰色粘土層から土師器小皿(9) \sim (15)、土師器鉢(16)、和泉型瓦器椀(17) \cdot (18)、東播系須恵器こね鉢(19) \sim (23)、須恵器甕(24)、青磁椀(25) \cdot (26)、白磁壷(27)等が出土している。

 $9\sim10$ は「へそ」皿と思われ、15は「コースター形」皿である。鋤柄編年中世IV期(14世紀後半~15世紀中葉)の範疇に収まると思われる。19は口径28cm(復原値)を測り、内面に粘土の接合痕が残る。池田編年 II -1期(12世紀前半)に相当する。24は甕の頸部で、頸部径7.9cm(復原値)を測る。内面は同心円痕をすり消している。頸部にハケ調整(8条/cm)、

体部にタタキ目を施し、おおよそ8~9世紀代の範疇である。25は口径13.4cm(復原値)で、体部に蓮弁文を飾り、オリーブ灰色に施釉する。小野編年青磁蓮弁文A群(14世紀代)に位置づけられる。

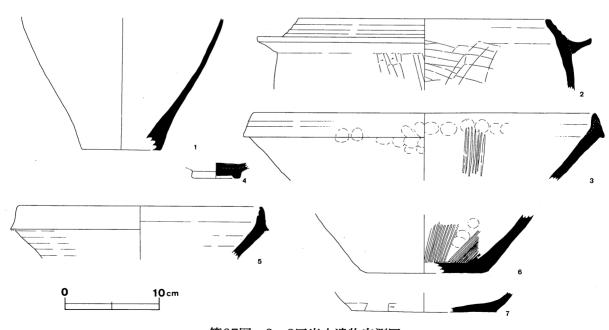


(2) 第81図 (28~49)

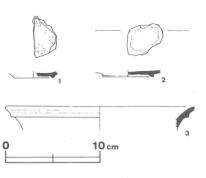
灰色粘質土層中から土師器小皿(28~31)、土師器鉢(32)、黒色土器B類椀



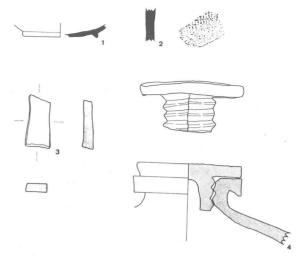
第66図 1-2区出土 遺物実測図



第67図 3-2区出土遺物実測図



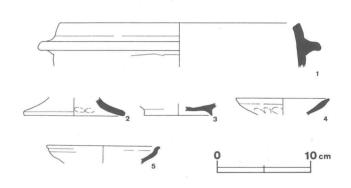
第68図 4-1区出土遺物実測図



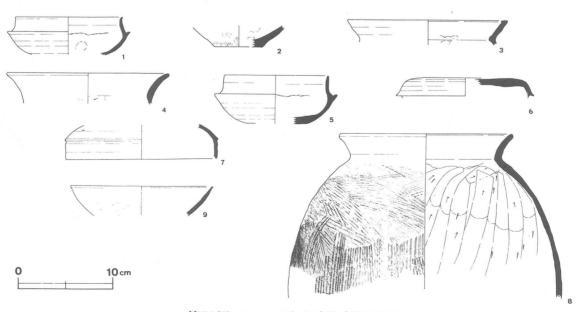
第70図 5区出土遺物実測図



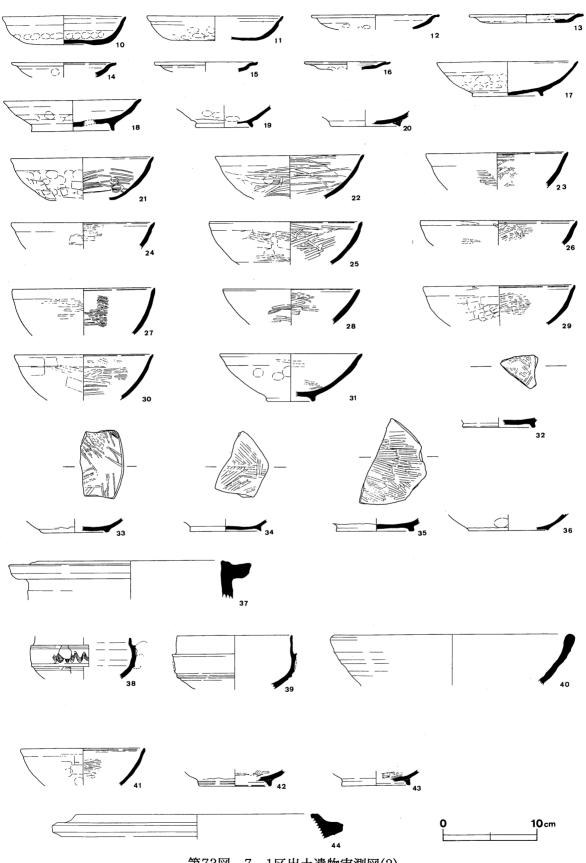
第69図 4-2区出土遺物実測図



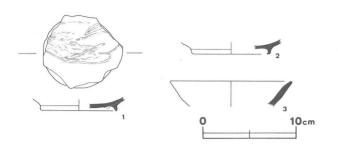
第71図 6区出土遺物実測図



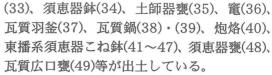
第72図 7-1区出土遺物実測図(1)



第73図 7-1区出土遺物実測図(2)



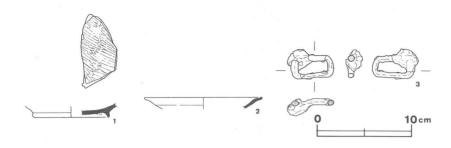
第74図 7-2区出土遺物実測図



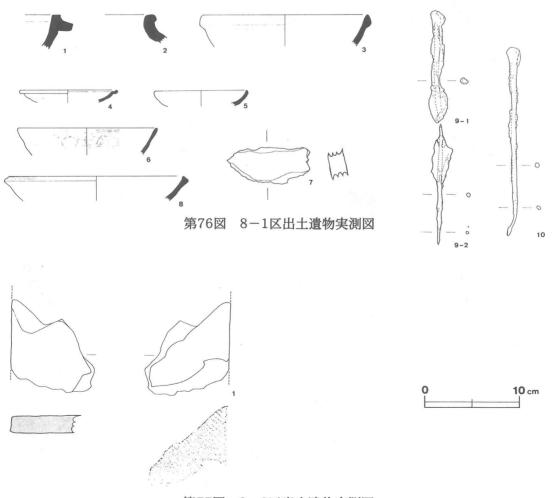
33は両黒仕上げで、高台内面に横方向のハケ調整を施す。37は口径27cm、鍔径30.8cm(ともに復原値)を測り、口縁端部は丸味を帯びて内傾し、下湾気味に短い鍔が

付く。内面はハケ調整 (14条/cm)、体部は指圧 調整の後へラ削り調整を 施す。

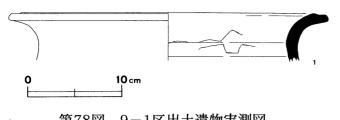
38・39は京都型の瓦質 鍋で、38は口径24cm (復原値)、39は口径 24cm (復原値)を測り、 体部は指圧調整後にヘラ 削りを施す。前者は鋤柄



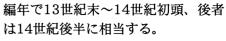
第75図 7-3区出土遺物実測図



第77図 8-2区出土遺物実測図



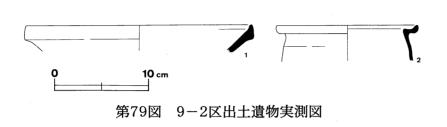
第78図 9-1区出土遺物実測図

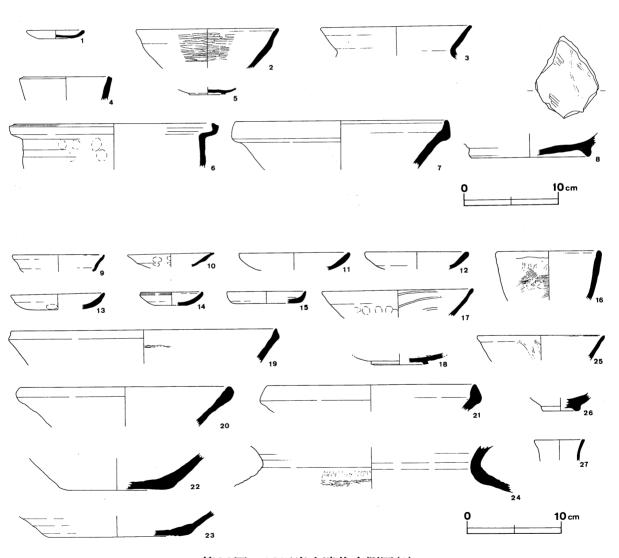


40は口径31cm、胴径31.8cm (と もに復原値)を測る。小片のため把 手や孔の有無は不明。口縁端部はや や丸みを帯び、口縁部に回転ナデの 痕跡が明瞭に残る。難波分類D類

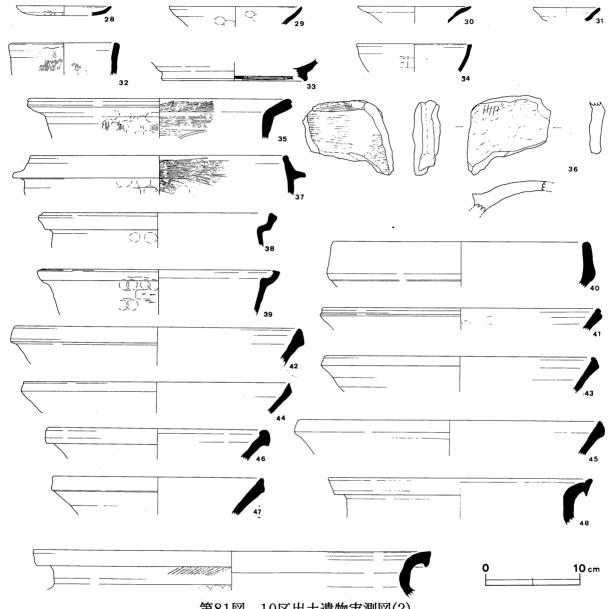
> (18世紀) に位置付けら れる。本層の最下限遺物 である。

> 41~47のうち、口径 は41~45が30cm弱(復 原値)、46・47が22cm 程度(復原値)を測る。 41・43は口縁部に重ね





第80図 10区出土遺物実測図(1)



10区出土遺物実測図(2) 第81図

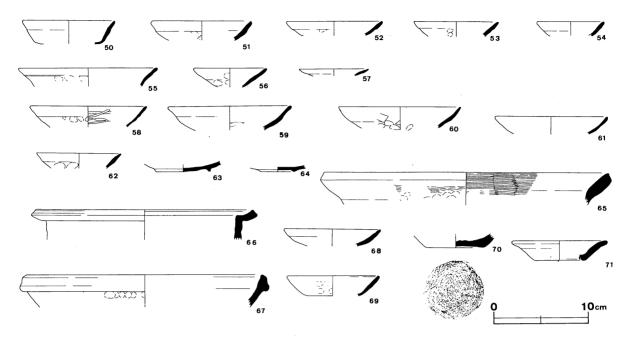
焼き痕が残り、41・44は口縁端部が浅い凹線状を呈する。46は口縁端部が玉縁状を呈する新しい様 相で、森田編年Ⅲ-3期(14世紀後半)に位置づけられる。

48はいわゆるN字状口縁を呈し、口径28cm (復原値)を測る。おおよそ鎌倉時代前半頃と思われる。

(3) 第82図 (50~71)

灰色粘質土上面からは土師器小皿(50~57・62)、瓦器椀(63・64)、土師器甕(65)、京都型瓦質鍋 (66)、東播系須恵器こね鉢(67)等が出土している。50~57・62は底部を欠くが、多くは「へそ」皿 を彷彿させる器形である。復原口径は10cm前後のもの(50~52)と、8cm前後のもの(53・54・56 ~58)等があり、55は14.6cm (復原値) を測る。鋤柄編年中世Ⅳ期 (14世紀後半~15世紀中葉) に 位置づけられる。

瓦器椀は復原口径が13cm前後で、体部外面には指圧調整のみで、内面に粗いヘラ磨きを施すもの



第82図 10区出土遺物実測図(3)

 $(58 \cdot 59)$ と、ナデ調整のみで一切ヘラ磨きを施さないもの $(60 \cdot 61)$ とがある。尾上編年 $III-3 \sim IV-2$ 期(13世紀前~中葉)程度に相当する。

67は口縁端部が上下に大きく拡張し、「く」の字状の縁帯を形成する。池田編年Ⅲ-2期(14世紀前半)に位置づけられる。

淡灰色粘質土層からは、土師器小皿(68・69)、無釉陶器(70)、瀬戸折縁皿(71)が出土している。71 は口径10.2cm (復原値)、器高2.1cm、高台径5.6cm (復原値)を測る。高台の畳付けも含めて、全面に浅黄色の釉薬がかかる。

■11-1区(第83図 1~33)

ピットu226からは土師器小皿(1・2)が出土している。土坑u239から土師器の小形甕(3)が出土している。口径22.9cm(復原値)、器高15cmを 測る。球胴型の体部に短く外反する口縁部が開き、内面・体部ともナデの後ハケ調整を施す。古代後Ⅲ期(10世紀後半~11世紀中葉)に位置づけられる。

黒色土器は溝u256(5)、ピットu237(6)、ピットu191(8)から出土している。 5 はA類椀、 $6\sim8$ は B類椀である。 6 は口径15cm(復原値)を測る。体部は深く内湾し、口縁端部内面に沈線を巡らす。

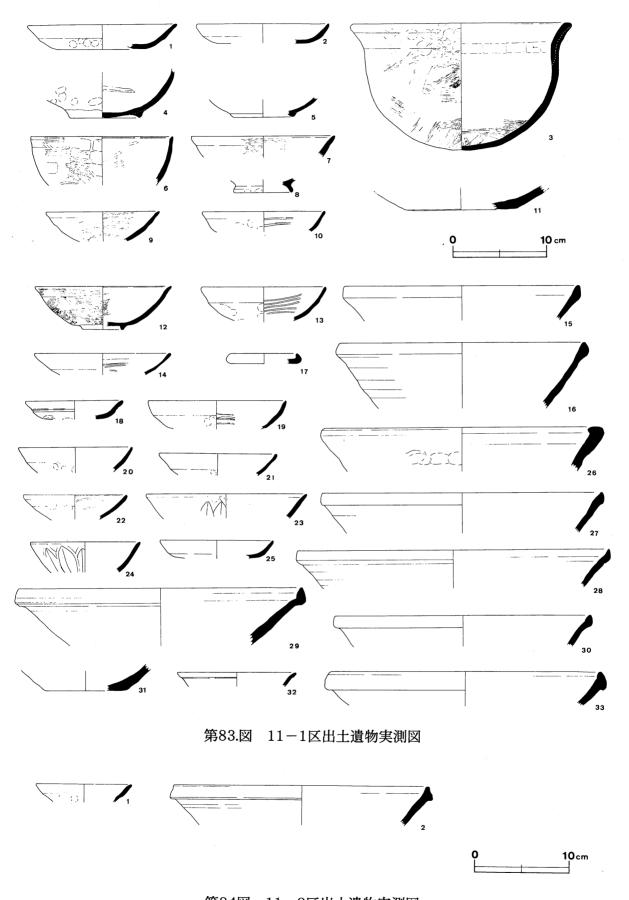
和泉型瓦器椀はピットu137(9)、ピットu124(10)から出土している。 9 は口径12cm (復原値)、10は口径13cm (復原値) を測る。尾上編年 $\mathbb{N}-1$ 期頃(13世紀中葉)に位置づけられる。

淡黄色粘土層(地山)直上からは黒色土器 A 類椀(4)、同 B 類椀(7・12)、和泉型瓦器椀(13・14)、東播系須恵器こね鉢(15・16)、土師器小皿(2・17・18)等が出土している。17はいわゆる「コースター形」皿である。口径(復原値) 7 cm、胴径(復原値) 8 cm、器高1.1cmを測り、横方向のナデ調整のみで仕上げる。

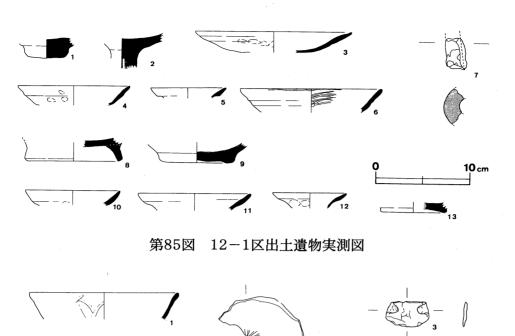
暗灰色粘土層から和泉型瓦器椀($19\sim22$)、龍泉窯系青磁椀($23\sim25$)、瓦質鉢(26)、東播系須恵器 こね鉢($26\sim30$) 等が出土している。

20の瓦器椀は内面・体部ともナデ調整のみで仕上げで、磨きは施さない。23と24は体部に連弁文を飾り、小野編年青磁連弁文椀A(14世紀)に位置づけられる。25は口縁端部外面は削り出し状の低い段がまわる。26は口径30cm(復原値)を測り、口縁端部を外折する。29の鉢は口縁端部が「く」の字状に内折する。森田編年Ⅲ−2期(14世紀前半)頃に相当する。

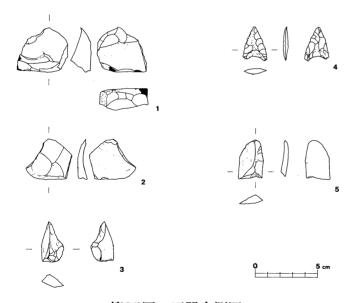
淡青灰色砂質土層から土師器小皿(32)、東播系須恵器こね鉢(33)が出土している。33は口縁端部が



第84図 11-2区出土遺物実測図



第86図 12-2区出土遺物実測図



第87図 石器実測図

縁帯を形成に ボスコー3 ボスコー3 ボスカー3 ボスカー

■11-2区 (第84図1~2) 濃灰色粘質土 層から土師器小 皿(1)、ピット 143から東播系 須恵器こね鉢(2) 等が出土してい

1は口径10cm (復原値) を測 り、体部に接合 痕跡が見られ

る。 2 は口径27cm(復原値)を測る。 口縁端部が拡張されて、端面は浅い凹線状を呈する。池田編年Ⅱ-2期頃に相当する。

■12-1区(第85図 1~13)

主に第1次面遺構内と遺構面直 上から出土している。

ピットy102では弥生土器(1)、溝y140では土師器高杯(2)が含まれていた。土師器小皿は溝y125(3)、溝y149(4)、溝y101(5)から出土している。この他に瓦器椀(6)、溝y134からフイゴの羽口(7)、溝y148から灰釉陶器(8)、溝y105から白磁椀(9)等が出土している。

3は土師器皿で、口径16.6cm

(復原値)、器高2.2cmを測る。体部は指圧調整の後へラ削りを施す。小森・上村編年IX期(15世紀後半)に位置づけられる。7は径4.4cm(復原値)、残存長3.4cmを測り、表面に被熱痕が残る。

茶褐色粘土層(第 1 次面)上面から土師器小皿($10\sim12$)、須恵器の円盤状高台部分(13)等が出土している。 $11\cdot12$ は底部を欠損するが、器形から「へそ」皿であろう。鋤柄編年中世 $\mathbb N$ 期に位置づけられる。

■12-2区(第86図 1~3)

土坑z133から青磁椀(1)が出土している。口径15.6cm(復原値)を測り、全体を灰オリーブ色に施釉する。小野分類青磁連弁文椀A群に位置づけられる。

淡青灰色砂質土層からは瀬戸端折皿(2)、茶褐色粘土層上面からは鉄製釿の先端部分(3)等が出土している。2は口径12cm(復原値)、器高2.4cm、高台径6.9cm(復原値)を測る。見込みに印花を施し、高台部も含めて全体を明緑灰色に施釉する。16世紀前葉頃と思われる。

■石 器 (第87図 1~5)

1は石核(剥片石核)と考えられる。10区中央部の黄色粘土層(地山)より出土した。石材はサヌカイトで、法量は長さ3.90cm、幅3.50cm、厚さ1.65cm、重さ23.58gを測る。背面と側面の二面は剥離面であり、背面の右下方側面は自然面を残している。腹面には、上端部に打点があり、下方向に割りとられた状況である。

2 は剥片で、10区中央部黄色粘土層(地山)より出土した。石材はサヌカイトで、法量は長さ3.20cm、幅3.65cm、厚さ0.75cm、重さ9.72gを測る。背面は剥離面で下方側面に自然面を残す。

3 は剥片(砕片)で、4-1 区の明黄色粘土層(地山)より出土した。石材はサヌカイトで、法量は長さ3.25cm、幅1.80cm、厚さ0.85cm、重さ3.89gを測る。

4は凹基無茎石鏃。 7-2区井戸 k 172内埋土(北半)の黒色粘土層より出土した。石材はサヌカイト。欠損は基端の両側で、法量は鏃身の長さ約2.75cm、基部幅約1.95cm、厚さ0.45cm、重さ1.64gを測る。縄文時代のものと考えられる。

5 は剥片で、4-1 区土坑 f 119内埋土の黒褐色粘土層より出土した。石材はサヌカイトで、法量は長さ3.10cm、幅1.90cm、厚さ0.65cm、重さ3.21gを測る。

~参考文献~

一参考文献~
伊野近富「土師器」『概説中世の土器・陶磁器』 1995年 中世土器研究会・真陽社 京都文化博物館学芸員編『平安京出土土器の研究』(古代學研究所報告第4輯) 平成6年 (財) 古代學協會 鋤柄俊夫「大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』分析・考察編 1995年 (財)大阪文化財センター 佐野 元「備前窯」『六古窯の時代』 1998年 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 『江戸のくらしー近世考古学の世界ー』 平成2年 新宿区立新宿歴史博物館 『関西近世遺跡の在地土器の生産と流通』 1992年 関西近世考古学研究会 『瀬戸・美濃系大窯とその周辺』 1997年 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究』第9(本文) 1992年 (財)大阪市文化財協会 鋤柄俊夫他「中世食器の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997年 国立歴史民俗博物館研究報告

動柄俊夫他「中世食器の地域性」「国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997年 国立歴史民俗博物館研究報告 谷川章雄「考古学から見た江戸の生活史」「江戸のくらしー近世考古学の世界ー』 平成5年 新宿区立新宿歴史博物館 積山洋「近世大坂出土の土師質土器編年、素描」『研究紀要』3 1995年 (財)大阪府埋蔵文化財協会早乙女勝元/岡田黎子編『毒ガス島』(母と子でみる17) 1994年 草の根出版会 相馬一成・写真と文『置いてきた毒ガス』(母と子でみる40) 1997年 草の根出版会 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号

1996年(財)京都市埋蔵文化財研究所

池田征弘他『神出窯跡群』 1998年 兵庫県教育委員会 関川尚功・余語琢磨・安田龍太郎他『日本土器事典』 1996年 雄山閣 鋤柄俊夫「各地の瓦質土器」『概説中世の土器・陶磁器』 1995年 中世土器研究会・真陽社

第2章 自然科学による調査

第1節 高城 B遺跡検出資料の花粉分析

川崎地質株式会社 関西支社 渡辺 正巳

1 はじめに

高城B遺跡は吹田市高城町及び高浜町に立地する遺跡である。当分析調査では、遺跡周辺の植生変遷の推定、および花粉化石群集の変化から地層の堆積時期を推定するために、発掘調査に伴って露出した各地点より採取した試料を対象として花粉分析を行った。

2 分析試料について

2-1 分析試料の数量

吹田市教育委員会によって採取された8試料を対象として、分析を行った。分析処理数と検出数量 および計画数量を表1-1に示す。

地 点 名	花粉					
	実 施 数	検出数				
5区大型土坑h164	4	4				
7-1区井戸k172	2	2				
7—1区溝k137	1	1				
7-1区土坑k139	1	1				
合 計	8 8					
計画数	8	3				

表1-1 分析処理・検出数量表

2-2試料採取地点および層準

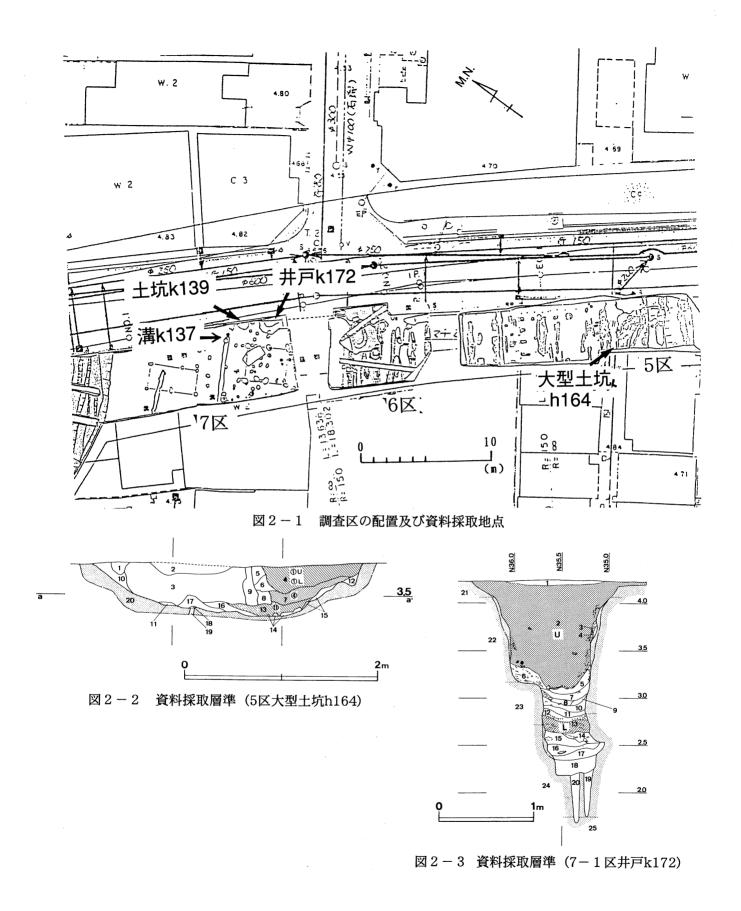
(1)調査区の配置および試料採取地点

図 2-1 に調査区の配置および試料採取地点を示す。また、以下に示す平面図・土層図は、吹田市より提供を受けた原図をもとに作成したものである。

(2) 試料採取層準

以下に各地点の試料採取層準を示す。また、7-1区溝k137、土坑k139は、各地点1試料の分析であったことから省略した。

5区大型土坑h164の土層図は図 2-2 のとおりであり、①U、①L、④、⑩が試料採取層準である。



7-1区井戸k172の土層図は図2-3のとおりであり、U、Lが試料採取層準である。

2-3微化石の検出状況

検出状況(珪藻・火山ガラス・プラント・オパールは概査結果)は以下のとおりである。 検出状況は以下のように分けた。

◎:十分な数量が検出できる → 検定・計数可能

○:少ないが検出できる → 検定可能・統計処理不可能な場合有り

△:非常に少ない★ 検定可能・統計処理不可能※:検出できない★ 検定・計数・統計処理不可能

(1) 5区大型土坑h164

試料NO.	花粉	珪藻	プラント・オパール	火山ガラス
1 U	Δ	Δ	0	0
1 L	Δ	×	0	0
4	Δ	×	0	Δ
1 1	Δ	×	0	Δ

(2) 7-1区井戸k172

(3) 7-1区溝k137

試料NO. 花粉 珪藻 プラント・オパール 火山ガラス 1 Δ × **©** Δ

(4) 7-1区土坑k139

試料NO. 花粉 珪藻 プラント・オパール 火山ガラス 1 Δ × ◎ ×

3 花粉分析方法

(1) 原理

粘土層などの堆積物や遺跡の土壌には、動物性もしくは植物性の微小な化石(=微化石)が含まれており、それらを物理・化学的処理によって抽出し、顕徴鏡で化石の種類や数を検定し、種々の目的にそった調査を行う方法が微化石分析であって、花粉分析はそのひとつである。

堆積物に含まれる花粉化石は、その堆積当時陸上に生育した樹木や草が生産した花粉が、水系や大 気系を経由して堆積物粒子とともに埋積したものである。

陸上に生育する樹木や草、つまり"植生"は気候の変化や時代とともに変化し、その変化が堆積物中の花粉化石の構成や量の変化として反映する。

従って、花粉構成や消長データは、地層の識別や対比、古植生の復元に利用することができる。

(2) 分析処理法

①分析試料

分析に供する試料は、シルト又は粘土で、その量は10-200g (湿潤重量) である。試料は花粉化石の形状を保持するため湿潤状態のまま使用する。

分析に供する試料の採取間隔は、堆積層の状態と目的によって数センチメートルから数メートルと 異なるが、遺跡調査の場合は、一般に遺物に基づく土層区分に対応した採取間隔をとることが多い。

②分析処理

分析処理の手順は図3-1に示す分析フローのとおりである。1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。 分析処理に要する薬品・器具設備の概要は以下のとおりである。 1) 処理薬品 : 水酸化カリウム、硫酸、フッ化水素、塩化亜鉛 他

2) 処理器具、設備:遠心分離機、振動マイクロフィルター、他一般分析器具

③顕微鏡による検定・計数

抽出した花粉化石は、グリセリンゼリーと混合してスライドグラス上に滴下し、カバーグラスをかけて封入してプレパラートとする。各試料につき2~3枚のブレパラートを作成する。ブレパラートを顕微鏡(バノックスAHBLB1万能顕微鏡)により400-1000倍率で観察し、メカニカルステージによる帯分析で通常木本花粉で100個から250個の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉の検定、計数も行う。

(3)解析法

花粉分析結果の解析の手順は

- 1) 各花粉種類の出現率 (パーセント表示) 計算と花粉ダイアグラムの作成
- 2) 各地点における花粉消長パターンの読みとりと花粉帯分帯
- 3) 地層対比や古植生・古気候の復元の順で進める。

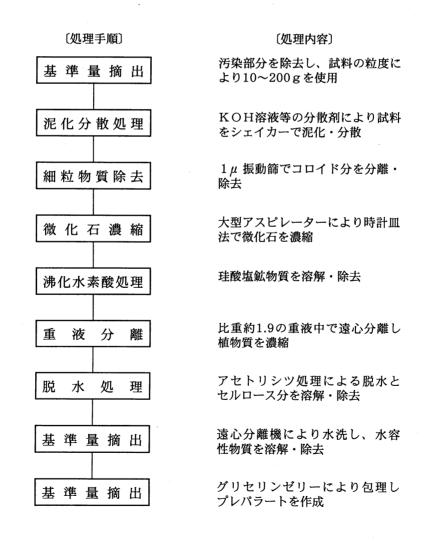


図3-1 花粉分析処理フロー

4 花粉分析結果

(1) 花粉化石の含有状況

8 試料の花粉分析を行った結果、すべての試料から花粉化石が検出された。しかしほとんどの試料で花粉化石の含有量が少なく、統計処理に耐えうる量の花粉化石が検出できたのは、7-1 区井戸 k172のみであった。

(2) 検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は表4-1に示す28種類であった。

前述のようにほとんどの試料で充分な量の花粉化石が検出されず、7-1 区井戸k172試料Lでのみ充分な量の花粉化石が検出された。この試料の花粉組成を特徴づける種類は、以下に示すようなも

のであった。

- ① 卓越木本花粉 マツ属(複移管東亜属)、スギ属
- ② 卓越草本花粉 イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属
- ③ 栽培種花粉 (可能性のある種類も含む)

表 4-1 検出花粉化石種類一覧表

〔樹木花粉種類〕

		1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -	
8	Abies		(モミ属)
13	Pinus (Diploxylon)		(マツ属:複維管束亜属)
23	Tsuga		(ツガ属)
24	Sciadopitys		(コウヤマキ属)
26	Cryptomeria		(スギ属)
27	Cupressaceae		(ヒノキ属)
50	Alnus		(ハンノキ属)
51	Betula		(カバノキ属)
53	Carpinus-Ostrya		(クマシデ属-アサダ属)
58	Castanopsis-Pasania		(シイノキ属-マテバシイ属)
59	Fagus		(ブナ属)
61	Cyclobalanopsis		(アカガシ属)
62	Quercus		(コナラ亜属)
65	Aphanancte-Celtis		(ムクノキ属-エノキ属)
66	Ulmus-Zelkova		(二レ属ーケヤキ属)
69	Moraceae-Urticaceae		(クワ科-イラクサ科)

〔草本花粉種類〕

207	Typha	(ガマ属)
230	Cyperaceae	(カヤツリグサ科)
232	Gramineae (<40)	(イネ科:40ミクロン未満)
233	Gramineae (>40)	(イネ科:40ミクロン以上)
263	Curciferae	(アブラナ科)
269	Caryophyllaceae	(ナデシコ科)
270	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	(アカザ科ーヒユ科)
276	Fagopyrum	(ソバ属)
276	Fagopyrum	(ソバ属)
322	Patrinia	(オミナエシ属)
347	Carduoidaceae	(キク亜科)
349	Artemisisa	(ヨモギ属)
350	Cichorioideae	(タンポポ亜科)

イネ科(40ミクロン以上)

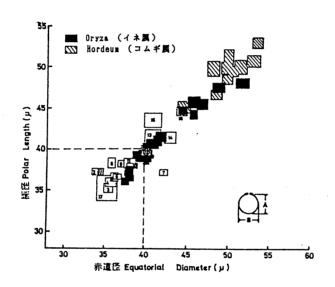
(3) イネ科の細分について

イネ科花粉を粒径から、40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分した。

稲作が行われる前の自然堆積物では、イネ科(40ミクロン未満)花粉が高率となることはあるが、イネ科(40ミクロン以上)花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範に行われだしたと考えられる弥生時代以降においては、自然堆積物でもイネ科(40ミクロン以上)花粉が高率となることが多くなる。さらに稲作遺構での分析結果では、ほとんどの場合イネ科(40ミクロン以上)花粉が高率で検出される。

一方図4 - 1に示すように、イネ科(40ミクロン以上)花粉はイネ属(Oryza)を含んでいるが、 すべてがイネ属であるわけではない。

これらの状況証拠と事実から、弥生時代以降に高率で検出されるイネ科(40ミクロン以上) 花粉



[図中のイネ・コムギ以外のイネ料]

- 1. Zizania latefolia (マコモ)
- 2. Imperata cylindrica yar.koenigii (チガヤ)
- 3, Trisetum bifidum (カニツリグサ)
- 4. Arthraxon hispidus (コブナグサ)
- 5. Digitaria adscendens (メヒシパ)
- 6. Echinochloa crusgalli subsp.edulis
- 7. Polypogen monspeliensis (ヒエガエリ)
- 8. Phalaris arundinacea (クサヨシ)
- 9. Beckmannia syzigachne (カズノコグサ)
- 10. Echinochloa crusgalli var.longiseta
- 11. Alopecurus aequalis var.amurensis (スズメノテッポウ)
- 12. Echinochloa crusgalli
- 13. Paspalnm thunbergii
- 14. Alopecurus japonicus
- 15. Echinochloa crusgalli var.oryzicola
- 16. Agropyron ciliare var.minus (アオカモジグサ)
- 17. Phragmites communis (アシ)

図4-1イネ科花粉の粒径比較図(中村、1974)

について、すべてがイネ属に由来するわけではないが、その多くはイネ属に由来すると推測される。 (4) 分析結果

花粉分析の結果を、下記の花粉ダイアグラムと花粉分析結果表、ならぴに巻末の検出花粉化石数量表に示す。花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、木本花粉、草本花粉について百分率で表した。さらに木本花粉(針葉樹)、本本花粉(広葉樹)、草本花粉、胞子の相対量も右端に示した。

また花粉化石の含有量が少なく、検出木本数が100個体に満たない試料については、検出できた種類を*で示した。

[花粉ダイアグラム]

- 図4-2 5区大型土坑h164の花粉ダイアグラム
- 図4-3 7-1区井戸k172の花粉ダイアグラム
- 図4-4 7-1 区溝k137の花粉ダイアグラム
- 図4-5 7-1区土坑k139の花粉ダイアグラム

[花粉分析結果表]

- 表4-2 5区大型土坑h164の検出花粉化石種類一覧表
- 表4-3 5区大型土坑h164の花粉化石組成表
- 表4-4 7-1区井戸k172の検出花粉化石種類一覧表
- 表4-5 7-1区井戸k172の花粉化石組成表
- 表4-6 7-1区溝k137の検出花粉化石種類一覧表
- 表4-7 7-1区溝k137の花粉化石組成表
- 表4-8 7-1区土坑k139の検出花粉化石種類一覧表

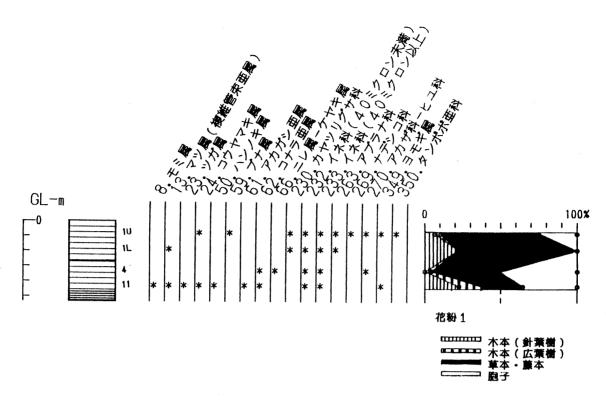


図4-2 5区大型土坑h164の花粉ダイアグラム

表4-3 5区大型土坑h164の検出花粉化石種類一覧表

Τ	AXA	CODE & NAME	TAXA	CODE & NAME
	8 13 23 24 50 59 61 62	モミ属 マツ属 (複維管束亜属) ツガ属 コウヤマキ属 ハンノキ属 ブナ属 アカガシ亜属 コナラ亜属	230 232 233 263 269 270 349 350	カヤツリグサ科 イネ科(40ミクロン未満) イネ科(40ミクロン以上) アブラナ科 ナデシコ科 アカザ科 ヨモギ属 タンポポ亜科
	66	ニレ属ーケヤキ属		

表4-3 5区大型土坑h164の花粉化石組成表

NO.	DEP, U	DEP, L	8	13	23	24	50	59	61	62	66	230	232	233	263	269	270	349	350
1U	0.05	0.10	-	-	-	2	-	1	-	-	-	4	4	1	4	1	3	1	1
			-	-	-	(67)	-	(33)	-	-	-	(133)	(133)	(33)	(133)	(33)	(100)	(33)	(33)
1L	0.16	0.21	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	2	3	1	-	-	-	-
			-	(100)	-	-	-	-	-	-	-	(50)	(100)	(150)	(50)	-	-	-	-
4	0.30	0.35	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	16	2	-	-	1	-	-
			-	-	-	-	-	-	-	(50)	(50)	-	(800)	(100)	-	-	(50)	-	-
11	0.40	0.45	1	-	1	2	1		2	2	-	-	6	1	-	-	-	1	-
			(8)	(31)	(8)	(15)	(8)	-	(15)	(15)	-	-	(46)	(8)	-	-	-	(8)	-

上段数字は化石種類コード, ()内は%

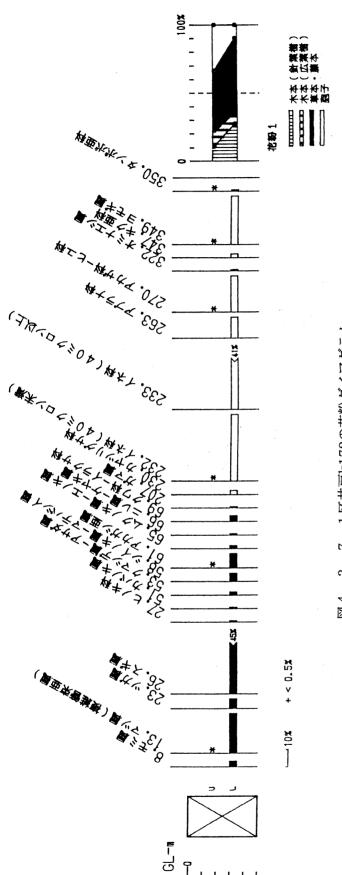


図4-3 7-1区井戸k172の花粉ダイアグラム

表4.	表4-4 7-1区井戸k172の検出花粉A	:戸k172の桟	è 出 在)化石種類一	一覧表			表4-5 7-1区井戸k172の花粉化石組成表	- 2	. 1 K	一 #	k172	の花	粉化	石組	成表			
TAXA	TAXA CODE & NAME		TAXA	CODE & NAME	NAME	NO.	DEP, U	DEP, L	_∞	13 23	3 26	3 27	51	53	28	61	65	99	69
∞	七二属		202	ガマ属		D	0.15	0.20	,	- i			1	1	•	-	•	•	
13	マツ属 (複維管束亜属)	用属)	230	カヤネツリグサ科	ゲナ科	-	080	160) (() ()	' "	· -	٠ -	٠ ٥	, ((20)	, (٠,	. •
23	ツガ属		232	イネ科 (4	イネ科 (40ミクロン未満)	1	0.50	66.0	≉ ⊛ 7 €	28 (23) (6)	95 (45)	- E	- € -	7 6	ه رو	2 8	N 6	- E	4 G
56	スギ属		233	イネ科 (4	イネ科 (40ミクロン以上)										9	9	9	3	9
27	ヒノキ科		263	アブラナ科															
51	カバノキ属		270	アカザ科ーヒユ科	は上が	Ö.	DEP, U	DEP, L	207 2	230 2	232 233		263 270	0 322	347	349	350		
53	クマシデ属ーアサ	ダ属	322	オミナエシ属	N#R														
28	シイノキ属ーアテバシイ	バツイ属	347	キク亜科		D	0.15	0.20		, . ,	2 6	1	П ('	•	T (
61	アカガシ亜属		349	ヨモギ属		_	0.30	0.35	٠ -		48 5		(50)		. 0	(20)	(20)		
65	ムクノキ属ーエノキ属	丰属	350	タンポポ亜科	73 1	1	9	9	Œ	8		(41) (12)		· 🖯	· (3)				
99	ニレ属ーケヤキ属					ē	1	; !							Ì				
69	クワ科ーイラクサ科	葆				上校鄉	上段数子は化石種類コード,	独口した	() 内は%	%									

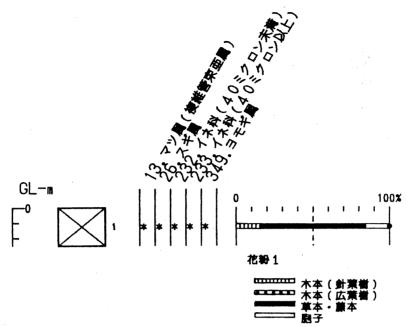


図4-3 7-1区溝k137の花粉ダイアグラム

表4-4 7-1区溝k137の検出花粉化石種類一覧表

TAXA	CODE	& NAME	TAXA	CODE & NAME
26	スギ属	(複維管束亜属) (40ミクロン未満)	233 349	イネ科 (40ミクロン以上) ヨモギ属

表 4-4 7-1 区溝k137の花粉化石組成表

 NO.
 DEP, U
 DEP, L
 13
 26
 232
 233
 349

 1
 0.10
 0.15
 1
 1
 2
 1
 5

 (50)
 (50)
 (100)
 (50)
 (250)

 上段数字は化石種類コード, () 内は%

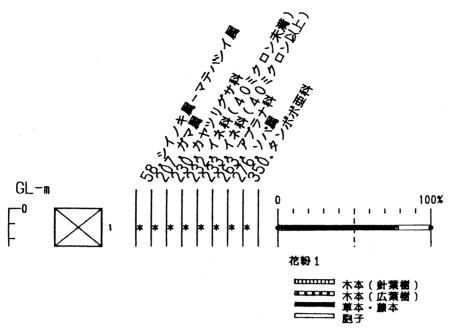


図4-5 7-1区土坑k139の花粉ダイアグラム

図4-5 7-1区土坑k139の検出花粉化石種類一覧表

58シイノキ属(複維管束亜属)263アブラナ科207スギ属276ソバ属	NAME
230 スギ属 270 ノハ属 230 スギ属 350 タンポポ亜科 232 イネ科(40ミクロン未満) 233 イネ科(40ミクロン以上)	ŀ

図4-5 7-1区土坑k139の花粉化石組成表

NO. DEP, U DEP, L 58 207 230 232 233 263 276 350 1 0.10 0.15 1 1 1 2 6 2 1 1 (100) (100) (100) (200) (600) (200) (100) (100) 上段数字は化石種類コード, () 内は%

表4-9 7-1区土坑k139の花粉化石組成表

(5) 花粉組成の特徴

前述のように、全ての試料から花粉化石が検出できたものの、統計処理に充分な量の花粉化石が検出できた試料は、7-1区井戸k172試料Lのみであった。

7-1区井戸k172試料Lでは、スギ属が45%、マツ属(複維管東亜属)が23%の出現率を示す。草本花粉では、イネ科(40ミクロン以上)が41%、イネ科(40ミクロン未満)が40%、ヨモギ属が29%の出現率を示す。

7-1区井戸k172試料Lも含めて今回の分析試料では、木本(針葉樹)花粉、草本花粉、胞子の割合が高く、本本(広葉樹)花粉の割合が低い。

5 考察

5-1 花粉分帯

通常花粉粉分析結果をもとに花粉分帯を行うが、今回の分析では花粉化石の検出量が少なかったことから花粉分帯を行わなかった。

5-2 花粉化石の含有量の少ない原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

- 1. 堆積速度が早いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
- 2. 花粉化石の平均的な粒径(数 \sim 100 μ)と堆積物の粒度が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
- 3. 土壌生成作用にともなう堆積物で、堆積速度が極めて遅く堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
- 4. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
- 5. 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

今回の多くの試料は、植物片あるいは炭片が極めて多く含まれていた(試料観察で試料が有機質に富んでいたのは、このことに起因すると考えられる。)。一方、土壌生成作用を受けた際に含まれる土壌菌がほとんど認められなかった。また古土壌中で高率になることの多い胞子化石も、決して多くはなかった。また、検出された花粉粒には花粉膜が傷んでいるものも多かった。

以上のような試料の状況より、今回、花粉化石の含有量が少なかった原因には、上記の4あるいは 5の可能性がある。また、これらの試料採取層準が「埋土」である可能性も指摘できる。

5-3 環境推定

充分な量の花粉化石が検出できた試料が7-1区井戸k172試料Lのみであったことから、この層準の堆積時の古環境を推定する。

(1) 堆積環境

7-1区井戸k172試料Lは井戸内の堆積物であり、成層していることが土層図からわかる。また試料Lでは概査の結果珪藻化石も多く含まれ、安定した堆積環境が続いたことがわかる。

(2) 堆積時期

花粉組成では、マツ属と共にスギ属が高率を示す。一方、広葉樹種の出現率は低く、草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)か高率になる。このような花粉組成は、大阪北部で平安時代頃に認められる花粉組成と一致する(例えば、王櫛遺跡:川崎地質、1994)。

また、花粉含有量の少ない他の試料についても同様の傾向が認められ、同時期に堆積した試料である可能性が指摘できる。

(3) 古植生

遺跡近辺では水田が広がる一方、丘陵都の開発が進みマツ属(アカマツ?)を要素とする二次林が

広がるようになる。一方、現在は北摂山地の一部に残存する温帯針葉樹林(中間温帯林)が山麓部にまで迫っていた可能性がある。また、スギが遺跡近辺や低地に生育していた可能性もあり、湿地林を成して行いた可能性も否定できない。

6 まとめ

今回の分析では、以下のことを考察した。

- (1) 花粉化石の含有量が少ない試料が多く、花粉帯が設定できなかった。
- (2) 花粉化石の含有量の少ない原固として、堆積後の化学変化による花粉化石の消滅、あるいは有機物に極めて富むために相対的に花粉化石の含有量が少なくなった事などが推定された。
- (3) 井戸k172試料L堆積時期の花粉組成が、大阪府北部で平安時代頃に一般に認められる花粉組成と一致することが明らかになった(井戸k172は平安時代頃のものではなかろうか?)。
- (4) 井戸k172試料L堆積時期の植生を推定した。

7 引用文献

川崎地質株式会社(1994)玉櫛遺跡の花粉、プラント・オパール分析. 池田西遺跡発掘調査概要・I - 寝屋川市池田西町-, 1-24., 大阪府教育委員会. 中村 純(1974)イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13, p.187-197.

5区大型土坑h164

5区大型土坑h164	1					
試料NO.1U	深度0.05m	n∼0.10m			総数	22
TAXA CODE & 1	NAME	NAUMBER(%)	TAXA	CODE & NAME	NAU	MBER(%)
8 モミ属 13 マツ属(複維管 23 ツガ属 24 コウヤマキ属 50 ハンノキ属 59 ブナ属 61 アカガシ亜属 62 コナラ亜属 66 ニレ属ーケヤキ		0 (0) 0 (0) 0 (0) 2 (9) 0 (0) 1 (5) 0 (0) 0 (0)	232 233 263 269 270 349 350	カヤツリグサ科 イネ科 (40ミクロン未満 イネ科 (40ミクロン以上) アブラナ科 ナデシコ科 アカザ科 ヨモギ属 タンポポ亜科		4 (18) 4 (18) 1 (5) 4 (18) 1 (5) 3 (14) 1 (5) 1 (5)
5区大型土坑h164	1					
試料NO.1L	深度0.16m	~0.21m			総数	9
TAXA CODE & 1	NAME	NAUMBER(%)	TAXA	CODE & NAME	NAU	MBER(%)
8 モミ属 13 マツ属(複維管 23 ツガ属 24 コウヤマキ属 50 ハンノキ属 59 ブナ属 61 アカガシ亜属 62 コナラ亜属 66 ニレ属ーケヤキ		0 (0) 2 (22 0 (0) 0 (0) 0 (0) 0 (0) 0 (0) 0 (0)	232 233 263 269 270 349	カヤツリグサ科 イネ科 (40ミクロン未満) イネ科 (40ミクロン以上) アブラナ科 ナデシコ科 アカザカーヒユ科 ヨモギ属 タンポポ亜科		1(11) 2(22) 3(33) 1(11) 0(0) 0(0) 0(0) 0(0)
5 区大型土坑h164	Į.					
試料NO.4	深度0.30m	n∼0.35m			総数	21
TAXA CODE & I	NAME	NAUMBER(%)	TAXA	CODE & NAME	NAU	MBER(%)
8 モミ属 13 マツ属(複維管 23 ツガ属 24 コウヤマキ属 50 ハンノキ属 59 ブナ属 61 アカガシ属 62 コナラ亜属 66 ニレ属ーケヤキ		0 (0) 0 (0) 0 (0) 0 (0) 0 (0) 0 (0) 1 (5) 1 (5)	232 233 263 269 270 349	カヤツリグサ科 イネ科(40ミクロン未満) イネ科(40ミクロン以上) アブラナ科 ナデシコ科 アカザ科 – ヒユ科 ヨモギ属 タンポポ亜科		0(0) 16(76) 2(10) 0(0) 0(0) 1(5) 0(0) 0(0)
5区大型土坑h164	Ļ					
試料NO.11	深度0.40m	ı∼0.45m			総数	21
TAXA CODE & 1	NAME	NAUMBER(%)	TAXA	CODE & NAME	NAU	MBER(%)
8 モミ属 13 マツ属(複維管 23 ツガ属 24 コウヤマキ属 50 ハンノキ属 59 ブナ属 61 アカガシ亜属 62 コナラ亜属 66 ニレ属 - ケヤキ		1 (5) 4 (19) 1 (5) 2 (10) 1 (5) 0 (0) 2 (10) 2 (10) 0 (0)	232 233 263 269 270 349	カヤツリグサ科 イネ科(40ミクロン未満) イネ科(40ミクロン以上) アブラナ科 ナデシコ科 アカザ科ーヒユ科 ヨモギ属 タンポポ亜科		0(0) 6(29) 1(5) 0(0) 0(0) 0(0) 1(5) 0(0)

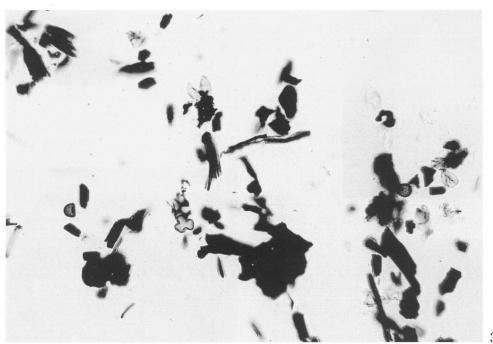
7-1区井戸k172		1			
試料NO.U 深度0.15m	~0.20m			総数	7
TAXA CODE & NAME	NAUMBER(%)	TAXA	CODE & NAME	NA	UMBER(%)
8 モミ属 13 マツ属(複維管束亜属) 23 ツガ属 26 スギ属 27 ヒノキ科 51 カバノナキ属 53 クマシデ属ーアサダ属 58 シイノキ軍属 51 アカガシ亜属 61 アカガシース 61 エンタース・エノキ属 66 ニレ属ーケャラクサ科	0 (0) 1 (14) 0 (0) 0 (0) 0 (0) 0 (0) 0 (0) 1 (14) 0 (0) 0 (0) 0 (0)	207 230 232 233 263 270 322 347 349 350	ガマ属 カヤツリグサ科 イネ科(40ミクロン未満) イブラナ科 アカザ科ーヒユ科 オミナエシ オミナエシ キク亜ギ属 ランポポ亜科		0(0) 0(0) 2(29) 0(0) 1(14) 0(0) 1(14) 1(14)
7-1区井戸k172					
試料NO.L 深度0.30m	n∼0.35m			総数	304
TAXA CODE & NAME	NAUMBER(%)	TAXA	CODE & NAME	NA	UMBER(%)
8 モミ属 13 マツ属(複維管束亜属) 23 ツガ属 26 スギ属 27 ヒノキ科 51 カバシチョス マサダ属 53 クマシデ属 アサダ属 58 シイノキ属 アマデバシイ 61 アカガショス スター 61 アムクメキ属 65 エクスート 66 ニレ属 7 クリキーイラクサ科	4 (1) 28 (9) 7 (2) 55 (18) 1 (0) 1 (0) 2 (1) 6 (2) 10 (3) 2 (1) 1 (0) 4 (1)	207 230 232 233 263 270 322 347 349 350	ガマ属 カヤツリグサ科 イネ科 (40ミクロン以上) イネ科 (40ミクロン以上) アカザ科ーヒ アカザメーと属 キクモギ属 ヨシンポボ亜科		1(0) 3(1) 48(16) 50(16) 15(5) 26(9) 1(0) 3(1) 35(12) 1(0)
7-1 区溝k137 試料NO.1 深度0.10m TAXA CODE & NAME		TAXA	CODE & NAME	総数 NA	10 UMBER(%)
13 マツ属 26 スギ属 232 イネ科(40ミクロン未満)	1 (10)	233 349	イネ科(40ミクロン以上) ヨモギ属		1(10) 5(50)
7-1区土坑k139					
試科NO.1 深度0.10n	n∼0.15m			総数	18
TAXA CODE & NAME		TAXA	CODE & NAME		UMBER(%)
59 ブナ属 208 ユリ科 232 イネ科 (40ミクロン未満) 233 イネ科 (40ミクロン以上) 253 コウホネ属	1 (6) 1 (6) 1 (6) 2 (11) 6 (33)	265 277 402 403	ゴキヅル属 – アマチャヅル イブキトラノウ節 単条孔胞子 三条孔胞子	属	2(11) 1(6) 1(6) 3(17)

花粉化石顕微鏡写真説明

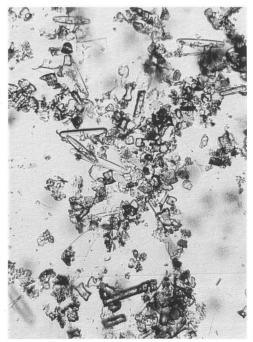
No.	学 名	和名	倍 率
1	状況写真 (5区大型土坑h 164試料1U)		約 210倍
2	状況写真 (5区大型土坑h 164試料4)		約 210倍
3	状況写真 (7-1区#戸試料k172D)		約 210倍
4	残砂状況写真 (5区大型土坑h 164試料1U)		約 210倍
5	残砂状況写真 (7-1区井戸試料k172D)		約 210倍
6	Pinus (Haploxylon)	(マツ属:単維管東亜属)	約1200倍
7	Cryptomeria	(スギ属)	約1200倍
8	Cyclobalanopsis	(アカガシ亜属)	約1200倍
9	Fagus	(ブナ属)	約1200倍
10	Gramineae (>40)	(イネ科:40ミクロン以上)	約1200倍
11	Chenopodiaceae- Amaranthaceae	(アカザ科-ヒユ科)	約1200倍
12	Patrinia	(オミナエシ属)	約1200倍
13	Carduoidaceae	(キク亜科)	約1200倍
14	Artemisia	(ヨモギ属)	約1200倍



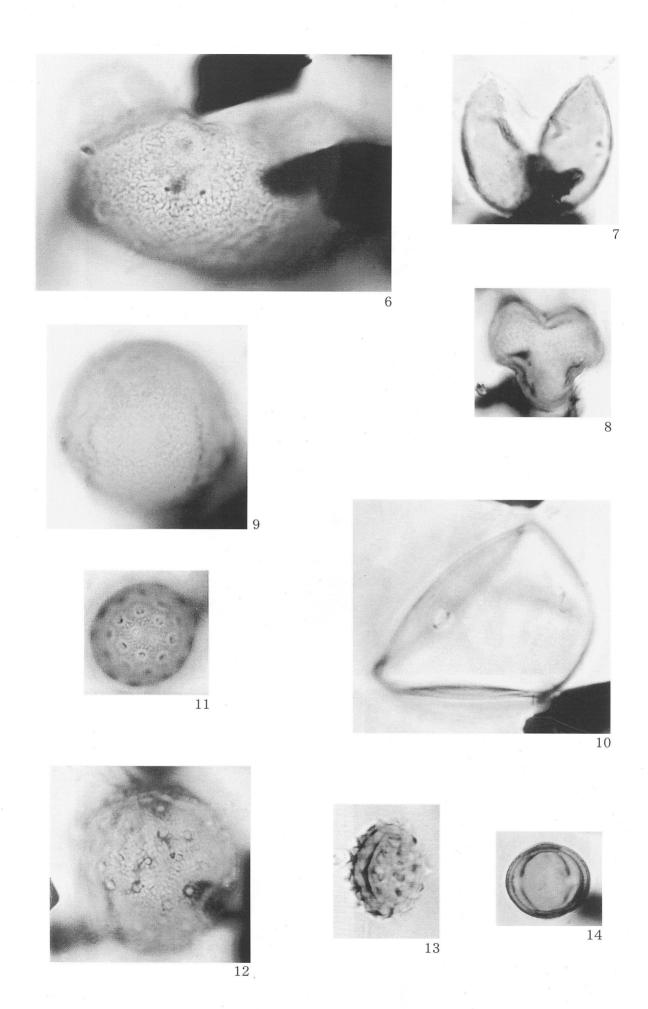








5



第2節 土坑群出土粘土の焼成実験について

清水 由夫・田中 充徳

1. はじめに

高城 B 遺跡における発掘調査では、3-1 区、11-1 区、11-2 区、12-1 区及び12-2 区から、複雑に重複した多量の土坑が確認された。これらの土坑群は、上層の茶褐色粘土と下層で地山の淡黄色粘土層を穿っていた。埋土は上層の堆積層で占められ、その中に穿たれた淡黄色粘土の小塊が僅かに混入するという堆積状況や、遺構内の出土遺物が極めて少なくいずれも細片であったことなどから、粘土採掘坑の可能性が推測された。そのため、この土坑群の性格の一端を知る手がかりの一つとして、焼成実験を試みたのである。しかし、測定や評価の仕方がよく理解できていなかったため、ここでは数値と結果のみ報告する。今後測定方法等について、各方面の方々からのご指導を仰げれたらと願うものである。

2. 焼成実験の方法

平成7年3月28日に、11-1区において粘土等の採取作業を実施した。実施地点は、N57.5 (No.25)、N62.5 (No.20)、N67.5 (No.15)、N72.5 (No.10)、N80 (No.2.5) ライン付近の5 カ所、土坑の側壁等から一定量(数cm角)の粘土を採取した。11-1区を選んだ理由は、他区の土坑群と異なり、調査区の南北で土坑の密度が大きく異なるからであり、土坑の粗密差と粘土の性質との相関関係がわかる可能性があるのではと考えたからである。また、土坑の底面からではなく側面から採取したのは、検出した土坑の底面の殆どが粘土層からシルト層へと変化しており、底面からの採取だと土坑内とは異なる土を採取することになると考えたためである。

採取した粘土は各ポイント毎に、長さ $10\text{cm} \times \text{幅} 5\text{cm} \times \text{厚さ} 1\text{cm}$ のプレート(Aグループ)及び長さ $10\text{cm} \times \text{隔} 10\text{cm} \times \text{厚さ} 1\text{cm}$ のプレート(Bグループ)を各1枚ずつ作成した。プレートの製作に当たっては、天日干し、粉砕、水被、他の土との混合などは一切行わず、採取後直ちに捏ねて成形した。

これを乾燥させてから、電気釜を使用して、700℃(Aグループ)と1210℃(Bグループ)で焼成を行った。

3. 測定方法

粘土の収縮については、成形時に長さ $10\text{cm} \times \text{幅} 5\text{cm} \times \text{厚さ} 1\text{cm}$ のプレート(Aグループ)及び長さ $10\text{cm} \times \text{隔} 10\text{cm} \times \text{厚さ} 1\text{cm}$ のプレート(Bグループ)をつくり、焼成後にその長さ・幅・厚さ・収縮率等を測定した。色調については、「新版標準土色帖」を用いた。また歪みについては、とりあえず歪んで凹面状になった面の両端を平坦な面に設置し、最も平坦面から離れたところの高さと位置を測定した。

4. 実験結果

収縮率は、成形後すぐのものを100とすると、Aグループが93、Bグループが86であり、1210℃ のものの方が大きかった。

色調については、焼成前は淡黄色(X 層)だったが、A グループは、焼成後橙色(5 YR 6/8、5 YR 7/6)~にぶい橙色(5 YR 7/4)となり、B グループは、赤(10 R 4/6)~赤褐(10 R 4/4)~暗赤(10 R 3/6)~暗赤褐(2.5 YR 3/6)へと変化した。ただし、水被等の作業を行わなかったためか、10 No. $15 \cdot 20 \cdot 25$ の 3 カ所については、10 A 10 B 両グループとも、変色せずに淡黄色(10 YR 10 A 10 S で留まった部分が帯状に残った。

焼成した10枚は、僅かなひび(A-10)はみられたが、いずれも割れることはなかった。また歪みについては、AグループではNo.2プレートが高さ0.18cm、位置4.6cm(下から)で最も歪んでいた他はあまり大きな歪みはみられなかった。これに対して、BグループではNo.15が高さ0.24cm、

位置3.9cm (下から) で最も歪み、No.2が高さ0.15cm、位置4.3cm (下から)、No.25が高さ0.13cm、位置3.8cm (下から) と続いたが、他に歪みはほとんど認められなかった。

以上のように、いずれのプレートも高温に耐えうることを示したが、直ちにこれが陶土として使われたとは明言は出来ない。今後さらに詳細な検討が必要であろう。

採集粘土焼成実験

700℃で焼成した場合 (Aグループ)

St 14		焼	财	t 1	爰					収	縮	率		地	肌のも	5調		歪	み	
名 称		X方向	1	Y方向		Z方向		х	方向	Y	方向		Z方向	部位	色調	番号	Ϋ́	方向	X	前
TS-B 2	下/左	4.6	×	9.3	×	1	cm	下	92	左	93	左下	100 %	表面	橙	5YR6/8	高さ	0.1	高さ	0.2
	中 央	4.5	×	9.15	×	1	cm	中	90	中	91.5	中央	100 %	裏面	橙	5YR6/8	位置	1.2	位置	4.6
	上/右	4.55	×	9.15	×	0.91	cm	Ŀ	91	右	91.5	右上	91 %	断面	橙	5YR6/8	(左から)	1.2	(下から)	7.0
	平均值	4.55	×	9.2	×	0.97	cm	平均值	91	平均值	92	平均值	97 %	全体	橙	5YR6/8				
TS-B 2	下/左	4.55	×	9.2	×	0.98	CER	下	91	左	92	左下	98 %	表面	橙	5YR6/8	高さ	0.1	高さ	0.1
	中 央	4.7	×	9.2	×	1	cm	中	94	中	92	中央	100 %	真面	橙	5YR6/8	位置	2.4	位置	3.7
	上/右	4.75	×	9.25	×	0.95	cm	Ŀ	95	右	92.5	右上	95 %	斯面	橙	5YR6/8	(左から)	2.4	(下から)	0.1
	平均値	4.67	×	9.22	×	0.977	cm	平均值	93.33	平均值	92.17	平均値	97.67 %	全体	橙	5YR6/8				
TS-B 2	下/左	4.59	×	9.25	×	0.94	cm	下	91.8	左	92.5	左下	94 %	表面	橙	5YR6/8	高さ	0.1	高さ	0.1
	中 央	4.55	×	9.3	×	1	cm	中	91	中	93	中央	100 %	裏面	橙	5YR6/8	位置	2.5	位置	4.6
	上/右	4.5	×	9.2	×	0.9	cm	Ŀ	90	右	92	右上	90 %	断面	橙	5YR6/8	(左から)	2.0	(下から)	4.0
	平均值	4.55	×	9.25	×	0.947	cm	平均值	90.93	平均值	92.5	平均值	94.67 %	全体	橙	5YR6/8				
TS-B 2	下/左	4.6	×	9.4	×	0.95	CIN	下	92	左	94	左下	95 %	表面	橙	5YR6/8	高さ	0	高さ	0.1
	中央	4.55	×	9.4	×	1	cm	中	91	中	94	中央	100 %	裏面	橙	5YR6/8	位置	0	位置	4.2
	上/右	4.6	×	9.4	×	1	cm	上	92	右	94	右上	100 %	断面	橙	5YR6/8	(左から)	Ů	(下から)	1,2
	平均值	4.58	×	9.4	×	0.983	cm	平均值	91.67	平均值	94	平均值	98.33 %	全体	橙	5YR6/8				
TS-B 2	下/左	4.55	×	9.2	×	0.9	cm	下	91	左	92	左下	90 %	表面	橙	5YR7/6	高さ	0.1	高さ	0
	中 央	4.25	×	9.3	×	0.95	con	中	85	中	93	中央	95 %	裏面	橙	5YR7/6	位置	3	位置	0
	上/右	4.35	×	9.25	×	0.92	cm	Ŀ	87	右	92.5	右上	92 %	斯面	にぶい橙	5YR7/4	(左から)		(下から)	U
	平均値	4.38	×	9.25	×	0.923	cm	平均值	87.67	平均值	92.5	平均值	92.33 %	全体	橙	5YR7/6				
	平均值	4.55	×	9.26	×	0.96	cm	平均值	90.92	平均值	92.68	平均值	96 %	標準:	上色帖使用					

平均値 93.18 %

1200℃で焼成した場合 (Bグループ)

St 14		焼	成	ì 1	爰					収	縮	率			地	肌のも	5調		歪	み	
名 称		X方向	1	Y方向		Z方向		х	方向	Y	方向		Z方向		部位	色調	番号	Ϋ́	方向	X	方向
TS-B 2	下/左	8.33	×	8.45	×	0.82	cm	下	83.3	左	84.5	左下	82	%	表面	赤褐	10R4/4	高さ	0.1	高さ	0.2
	中央	8.4	×	8.4	×	0.83	cm	中	84	中	84	中央	83	%	裏面	暗赤	10R3/6	位置	5.9	位置	4.3
	上/右	8.47	×	8.4	×	0.83	cm	Ŀ	84.7	右	84	右上	83	%	断面	暗赤	10R3/6	(左から)	0.0	(下から)	4.5
	平均值	8.4	×	8.42	×	0.827	cm	平均值	84	平均值	84.17	平均值	82.67	%	全体	暗赤	10R3/6				
TS-B 2	下/左	8.5	×	8.47	×	0.9	cm	下	85	左	84.7	左下	90	%	表面	暗赤	10R3/6	高さ	0	高さ	0.1
	中央	8.51	×	8.59	×	0.89	cm	中	85.1	中	85.9	中央	89	%	裏面	赤	10R4/6	位置	4.9	位置	4.5
	上/右	8.57	×	8.5	×	0.9	con	上	85.7	右	85	右上	90	%	斯面	赤褐	10R4/4	(左から)		(下から)	
	平均值	8.53	×	8.52	×	0.897	cm	平均值	85.27	平均值	85.2	平均值	89.67	%	全体	暗赤	10R3/6				
TS-B 2	下/左	8.6	×	8.41	×	0.89	cm	下	86	左	84.1	左下	89	%	表面	暗赤褐	2.5YR3/6	高さ	0	高さ	0.2
	中央	8.48	×	8.38	×	0.9	cm	中	84.8	中	83.8	中央	90	%	裏面	赤褐	10R4/4	位置	4.8	位置	3.9
	上/右	8.5	×	8.4	×	0.87	cm	Ŀ	85	右	84	右上	87	%	断面	暗赤	10R3/6	(左から)		(下から)	0.0
	平均值	8.53	×	8.4	×	0.887	cm	平均值	85.27	平均值	83.97	平均值	88.67	%	全体	暗赤	10R3/6				
TS-B 2	下/左	8.7	×	8.81	×	0.85	can	下	87	左	88.1	左下	85	%	表面	赤	10R4/6	高さ	0	高さ	0.1
	中央	8.8	×	8.78	×	0.87	cm.	中	88	中	87.8	中央	87	%	裏面	赤	10R4/6	位置	0	位置	6.6
	上/右	8.66	×	8.72	×	0.9	cm	Ŀ	86.6	右	87.2	右上	90	%	断面	赤	10R4/6	(左から)	•	(下から)	
	平均值	8.72	×	8.77	× (0.873	can	平均值	87.2	平均值	87.7	平均值	87.33	%	全体	赤	10R4/6				
TS-B 2	下/左	8.52	×	8.6	×	0.85	cm	下	85.2	左	86	左下	85	%	表面	赤褐	10R4/4	高さ	0.1	高さ	0
	中央	8.4	×	8.58	×	8.0	com	中	84	中	85.8	中央	80	%	裏面	赤	10R4/6	位置	3.8	位置	0
	上/右	8.5	×	8.58	×	0.9	cm	上	85	右	85.8	右上	90	%	断面	赤褐	10R4/4	(左から)	5.0	(下から)	
	平均值	8.47	×	8.59	×	0.85	cm	平均值	84.73	平均值	85.87	平均值	85	%	全体	赤褐	10R4/4				
	平均值	8.53	×	8.54	×	0.867	cm	平均值	85.29	平均值	85.38	平均值	86.67	%	標準土	色帖使用					

平均值 85.78 %

第3章 まとめ

今回の発掘調査では、縄文時代から近代にかけての遺構・遺物が発見された。遺構については、縄文時代の貯蔵穴とみられるフラスコ状の土坑をはじめ、弥生~古墳時代前期から中世にかけて徐々に埋没した谷状の自然地形、古墳時代中期の井戸跡、平安時代中期の建物群とそれを囲むように開削された大溝、平安時代中期~15世紀の土坑群、鎌倉時代の耕作地、室町時代の池跡、江戸時代~近代の道跡・池跡と多彩を極めた。また、遺物についても、縄文時代後期の石器をはじめとして、弥生土器、布留式土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、瓦などが多数出土した。

■谷状地形

高城 B遺跡は、千里丘陵南東側の周縁部に位置する。現在は平坦な住宅地と化しているが、本来は丘陵の開析谷が低くなりつつも続いており、低い尾根と浅い谷が襞のように延びていたと考えられる。この地形は、高城 B遺跡の調査地点では南西~北東方向に、尾根状の高まりが 2 本、谷状の落ち込みが 3 本みられた。尾根状地形については、まず、8-1 区~4 区・10区に至る地点にあり、もう一方はその南東方向にあって、11 区・3 区~2 区付近である。現在はどちらも削平を受けて平坦な地形となっており、どの辺りが頂点だったかは不明である。概して北側の方が範囲は広く、その一角は居住域となるが、南側では土坑群の開削がみられるなど、土地利用についても差異が認められた。これに対して、谷地形はこの高まりを挟むように併走していた。

谷地形の最も北のものについては、その最深部は不明だが、西地区W 2 N 5 8~5 9 ライン付近 (8-1 区中央)から傾斜が始まり、調査区の北端にまで延びていた。当調査地北方の高畑遺跡では、地表面下約20cm(標高 T.P.約5.2m前後)で地山上に展開する遺構面を検出しており、一旦下降したのち、再び上昇するとみられる。尾根に挟まれた谷地形については、西地区N 105、東地区N 109 ライン付近(4-1 区の中央付近・10 区の北 1/3 付近)を北岸とし、西地区N 73.5 付近、東地区N 82.5~88 ラインの間(3-1 区中央付近・11 区北端)を南岸とする間で、いずれもこの地点から傾斜が始まっていた。最も南側の谷は傾斜の開始地点は明瞭ではないが、12-2 区南端では約37cm程度とかなり厚くなっていた。土層・遺構等の検出状況からみて、12-1 区・1-2 区以南に展開すると考えられる。なお高城 B 遺跡の南東方約100mの地点には神境町遺跡が展開するが、ここでは吹田砂堆を形成する黄色の砂が厚く、地表面下約1.6~2.0mの中世遺構面でも、地山の洪積世粘土層は検出されなかった。南方へさらに深く下降していくとみられる。このように、当調査地一帯は千里丘陵と低湿地間に挟まれた台地上に位置するとみられるが、緩やかながら起伏を有するために土地利用に関しては制約を免れ得ないと考えられる。

■建物跡

今回検出した建物跡は、北側の尾根状地形に立地する遺構群で、 1×2 間、 2×3 間と小規模のもので構成されていた。しかし、調査区の形状や多くの用途不明ピットの存在を考えあわせると、これらの建物の規模はさらに拡大する可能性を秘めている。また、これらの建物跡は3 方向を幅約 $2.5 \sim 4.16$ mmの大溝011に囲まれていた。南北長約17.53mに対して、調査区の形状から東西長については約5.74m(大溝は11.74m)の調査範囲にとどまっており、母屋とみられる建物も明確ではなく、この居住域は実際には西方に向かってさらに広がることが推定される。

今回検出した建物跡は4棟であるが、重複関係からみると、およそ2時期に区分されるものと考えられる。建物跡013と建物跡016の一群(A群)と建物跡014と建物跡015の一群(B群)がそれである。柱穴内からの出土した黒色土器A類椀等の遺物からみて、10世紀後半~11世紀前半頃の所産と比定できるが、両群とも明確な差異は認めがたい。重複する柱穴より建物跡013→建物跡014に移行するとみられることや、溝k174→建物跡015への移行が考えられることから、A群→B群への推移が想定される。

これらの建物跡群については、それを巡る大溝(011)に囲まれており、その外側からは検出されていないことから大溝内で完結するものとみられる。また若干のズレはあるものの柵列と建物が大溝と併走或いは直交していること、建物跡の展開する6 区北半~7-3 区と、それ以外の6 区南半・8 区とでは約20cm前後の比高がみられたことなどから、これらは一連のものと考えられる。しかし、大溝011-Cでは、埋土の堆積状況より数回に及ぶ掘り直しがあったとみられ、遺物についても15世紀後半頃までのものを含んでいることから、大溝011については、建物跡群廃絶後も長期間に渡って機能していた可能性が考えられる。

ところで、今回検出した建物群については、10世紀後半~11世紀前半頃と極めて短期間のものと みられる。周囲に展開する高城遺跡・高畑遺跡・元町遺跡などの洪積世丘陵地上の集落遺跡も同様に 短期間に廃絶する傾向を示しており、当地における地域的な傾向として捉える必要がありそうである。

■土坑群

12-1 区・12-2 区・11-2 区・11-1 区・3-1 区において多数の土坑及びピットを確認した。このうち、12-1 区や11-2 区については著しい重複のため個々の形状を判別することは極めて困難だった。しかし、11-1 区については遺構毎の形状や単位が比較的わかりやすく、円形・隅丸方形・長方形もしくは不定形と様々な形状が確認された。おそらく他区における土坑群についても、11-1 区と同様な傾向を示すものと考えられる。

分布状況については、3-1区~12-2区(方位N-約36°-W)にかけて、高密度集中地域が あり、これが帯状に展開していた。そして、その北東方に向かって徐々に減じながらも、周囲に広範 な分布を持っていたと考えられる。しかし、南西側については2区、12-2区南西側、12-1区南 西端が示すように、急激に数を減じており、地域差がみられる。また谷地形の落ち込み内からは、埋 没以前の開削とみられる数基の土坑を除き、明らかに土坑群とみられる遺構は検出できなかった。沖 積作用等による埋没のため、土質の異なるところは掘削せず、地山が地表面から比較的浅いかもしく は露出した、尾根側の地域を掘削しているかのようであった。これらの土坑群は、上層の暗茶褐色粘 土層から掘り下げ、地山である淡黄色粘土層を穿っており、一部袋状になったものもみられた。埋土 については、淡黄色粘土層上層に堆積していた暗茶褐色粘土や濃灰色粘土を主とする。地山である淡 黄色粘土はブロック状に散在するにとどまっており、埋め戻されなかったかのように淡黄色粘土その ものは殆ど失われている状態だった。これら土坑の殆どが同様の傾向を示したことから、今回発見さ れた土坑群の大部分については、粘土の採掘を目的として掘削したものと想定される。いわゆる粘土 採掘坑と考えられるが、土坑群の形状や分布状況から見て、吉志部瓦窯跡の南東側で発見された粘土 採掘坑のように、国家事業として計画的に行われ、整然とした配置で掘削されたものとは異なる状況 がみてとれる。また、明確ではないが土坑群からは埋土より黒色土器椀、土師器椀・杯・甕、須恵器、 瓦器椀、瓦質土器羽釜など、主に11世紀後半~15世紀後半の土器の細片を出土した。創業期は明確 ではないが、これらの遺物より14世紀前半までの時期を主体とし、3-1区南側など一部は15世紀 後半にまで続くとみられることから、比較的長期間営まれていた可能性があり、主に在地における消 費を賄う小規模かつ日常的な生産組織があって、その生産体制のもとで継続的に採掘されたと推測さ れる。

なお、今回11-1区北端において方位N-約57°-Eを示す足跡群が発見された。これらの足跡は、N72~N81ライン間の約8.6m、最も密度の濃いところになると約2.6mの幅で分布し、しかも周辺の尾根や谷と併走していた。このことからみて、この足跡の残る幅約2.6mのラインは谷筋に併行して延びる道であった可能性が考えられる。この道の両側に起伏があるため、併走しなければならなかったのである。その時期は明確ではないが、周辺の尾根が削平され、谷が埋没するまでの間と考えられる。或いは粘土を採掘し、運搬する際の運搬路として利用されていたとも想像される。

■池跡

今回3カ所で池跡を検出した(池跡e102、池跡032、池跡r101)。 このうち、3-2区で検出した池跡e102については、谷状地形002内に展開しており、谷地形の一 角を利用して更に掘削し、池として使用したと考えられる。池跡内には軟質の濃灰色粘土・濃灰色粘質土層が厚く堆積していた。出土遺物については15世紀後半までが主体であり、近世に降る遺物はみられなかったことから、遅くとも中世末までには埋没したと考えられる。その北側には、4-2区を中心に、4-1区・5区・9-2区にまたがる池跡が検出された(池跡032)。埋土は池跡e102同様、軟質の濃灰色粘土層が約 $80\sim90$ cm堆積し、その上にコークスを主体とする土砂で埋没していた。吹田初期(昭和 $2\sim10$ 年頃)にかけて高城町を中心に区画整理事業が行われ、当時水田地帯であったこの付近も宅地へと変貌した。埋土上層については、コークス等の包含からみて、区画整理による埋め立ての土砂である可能性が高い。吹田には、朝日麦酒株式会社吹田工場や旧国鉄吹田操車場があるなど、明治以降近代化施設が展開しており、それらの廃棄燃料屑が盛り土として利用されたものと考えられる。下層埋土からは、施釉陶器製灯明皿・瓦等、近世の遺物が出土した。近世に開削され、昭和初期には埋め立てられたものと考えられる。上記の2つの池が併存してしていたかは現時点では不明であるが、少なくとも池跡e102は中世末には埋没し、近世期には池跡032が存在していたものと考えられる。

さて、これらの池跡であるが、前者は谷底に位置し、淡黄色~淡青灰色の粘土・シルト層を穿ち、さらに下層の淡青灰色礫層に到達するほど深く掘削しているのに対して、後者は約1.89mと比較的浅く、北側の比較的高いところに位置しており、立地と掘削深度において対照的な数値を示した。深いほど水の汲み上げは大変な労力を必要とする。しかし、別の面からみれば深く掘削することで狭い範囲でもより多くの水量を保持できる上、谷地形内の地下水を池に集めることが出来るので、水田の乾田化が可能な点有効と考えられる。そこには両者の時期では、立地状の地形的な違いがあった可能性が考えられる。おそらくこの2つの池は当時の立地及び環境において著しく異なる状況下で成立したものと考えられる。

■道跡

今回の調査では、9-1区・9-2区・10区・3-1区において、幅員約3.9m、周囲との比高差約30cmで、両側に杭と矢板による護岸を伴う道跡が発見された。この道跡は、10区以南においては現道(拡幅前の道路)と重複していたが、10区から北については直線的に延びる現道から東に向かって湾曲しており、『明治18年仮製地図』記載の道路の位置と酷似していた。この道路は通称「亀山街道」或いは「亀岡街道」等(以下「亀岡街道」)と呼ばれる旧街道とみられることから、今回発見された道跡については、この「亀岡街道」の一部と考えられる。「亀岡街道」の成立については、古代「三島路」を継承したものと考えられているが、本遺跡検出部分に関して言えば、起伏のある地形を横断したとは考えられず、また谷地形埋没以前に遡る明確な遺構も検出されなかったことから、本遺跡内においては当地一帯の谷地形が埋没し平坦地化した後と考えられ、近世以降の所産と推測される。なお、10区から北の街道については、吹田初期(昭和2~10年頃)行われた土地区画整理事業の際に、池跡032とともに埋没し、現道の位置につけ替えられたものと考えられる。

今回、高城B遺跡で検出された遺構については、緩やかな起伏を持つ地形上に立地しており、少なからずその影響を受けて展開していたと考えられる。中ノ坪遺跡第1次調査(古墳時代前期)や目俵遺跡(弥生時代後期~古墳時代前期)で発見された集落、昭和町遺跡(古墳時代中期)、高城遺跡(平安時代)、高畑遺跡(平安時代)など周辺の諸遺跡についても尾根状の高まりとみられる高所にあって、類似した立地状況を示していた。また、本遺跡では時期的には縄文時代後期~近・現代に至るが、このうち6世紀~10世紀前半の遺構・遺物は殆ど発見されておらず、上記の遺跡でもこの時期の遺構・遺物はあまり知られていない。5世紀後半に神崎川貫流の際に起こったとされる大洪水の影響だろうか、地域的に欠落している状況が窺われる。文献的には、『行基年譜』「天平十三年記」(741年)に「次田堀川(中略)在嶋下郡次田里」とあるが、平安時代中期成立の『和妙類従抄』(承平年間)に記載された地名には、吹田市内に相当するとみられる郷名は知られておらず、嶋下郡における吹田市域の開発の遅れを示す事例といえよう。当遺跡を含め、元町遺跡・高城遺跡・高畑遺跡など平安時代中期以降の遺跡増加は、権門勢家・大社寺等による荘園開発の進展に伴って、当地の開発が進めら

れたことを示すものと考えられる。

また、吹田市域における条里の方位の独自性については、千里丘陵や安威川による制約も考えられるが、むしろ当遺跡や中ノ坪遺跡のように、これらの土地に旧来からあった小地形に制約されたものであって、その実態に則して条里の方向性が導かれたものと推測される。目俵遺跡や中ノ坪遺跡 1次調査で発見された条里に基づく水田畦畔が鎌倉時代を遡らない時期であるところからみて、当地における条里制区画の施行は鎌倉以降に実施されたものではないかと考えられる。当遺跡調査地点南側(1-1区・1-2区)で検出された鋤溝跡や北側(5区・6区・8-1区)で検出された溝状土坑等、鎌倉時代の遺構が、嶋下郡吹田市域条里の方向性とほぼ一致するのも中ノ坪遺跡第1次調査地点・目俵遺跡同様、この地域にも条里制区画が浸透してきたことを示すものと考えられる。

~参考文献~

吹田市史編さん委員会編『吹田市史第一巻』 1990年 吹田市 吹田市史編さん委員会編『吹田市史第四巻』 1976年 吹田市

吹田市都市整備部・吹田市教育委員会『吉志部瓦窯跡 (工房跡) -都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書1-』 1998年 「『和気』 和気遺跡発掘調査報告書 - 本文編 - 」 1979年 和気遺跡調査会

京嶋覚「群集土壙の再評価-集団墓説への批判-」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3-設立10周年記念論集-』 1995年 財団法人大阪府埋蔵文化財協会

有限会社平凡社地方資料センター編「大阪府の地名。」『日本歴史地名体系28』 1986年 平凡社 「角川日本地名大辞典」編纂委員会竹内理三編「大阪府」『角川日本地名大辞典27』 1983年 角川書店 京都大學文學部国語學国文學研究室篇『諸本集成和名類聚抄〔外篇〕』 1966年 株式会社臨川書店

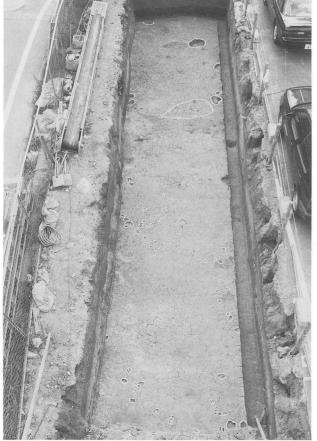


調査前風景(南から11区などを望む)



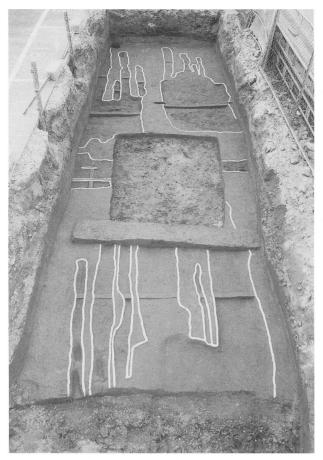
調査前風景(南から1区・12区を望む)



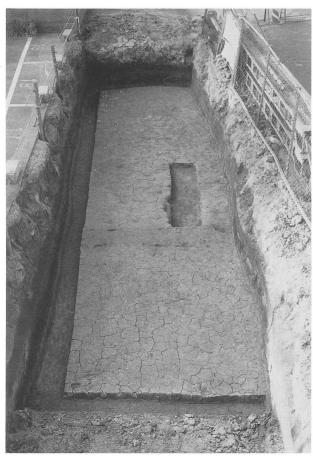


1-1区 第1次遺構面全景(北から)

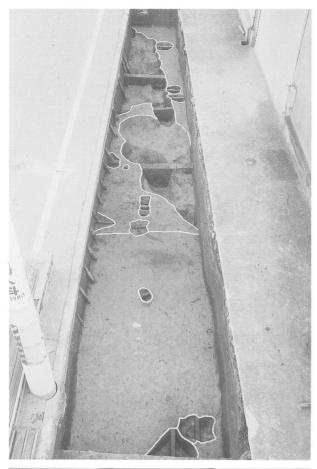
1-1区 第2次遺構面全景(北から)



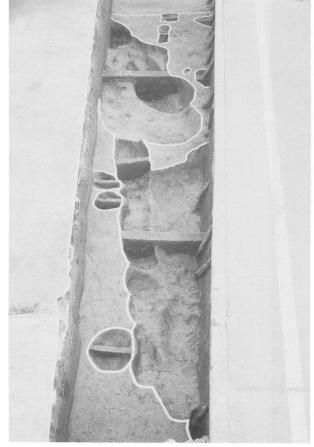
1-2区 第1次遺構面全景(南から)



1-2区 第2次遺構面全景(南から)



3-1区 遺構面全景(北から)



遺構細部 (北から)

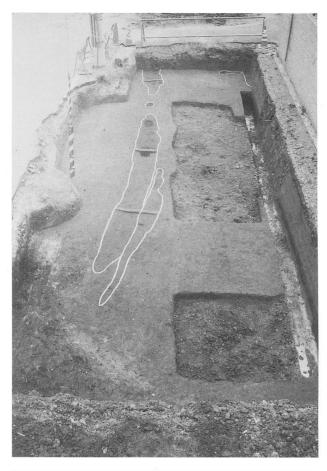
3-1区 遺構面近景(南から)



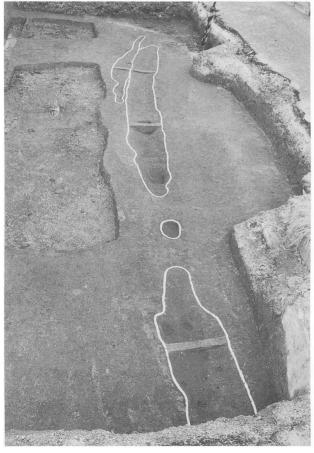
3-2区 遺構面全景(北から)



3-2区 遺構面近景(北から)



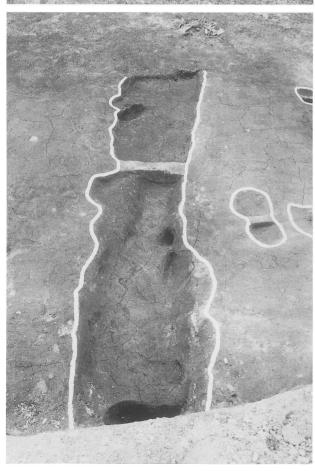
4-1区 第1次遺構面全景(北から)



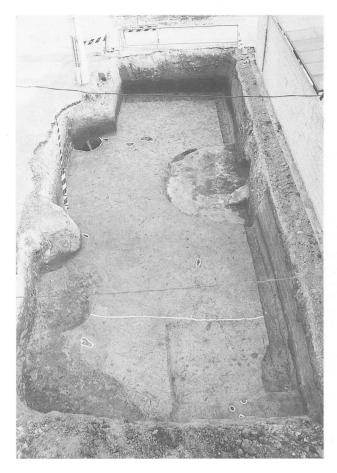
溝跡検出状況(南から)



4-1区 第2次遺構面全景(北から)



遺構検出状況 (東から)



4-1区 第3次遺構面全景(北から)



フラスコ状土坑 f 117検出状況(西から)



フラスコ状土坑 f 117内土層断面



4-2区 遺構面全景(南から)



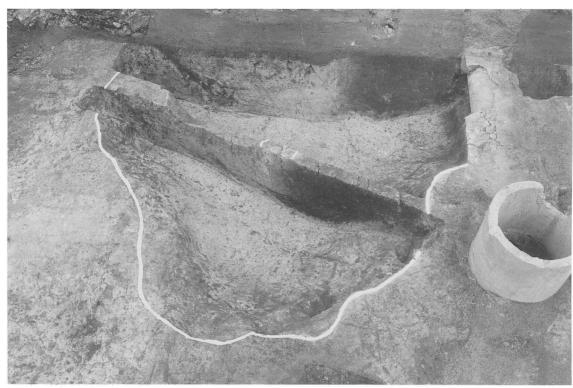
フラスコ状土坑 f 117内土層断面細部





5区 遺構面全景(南から)

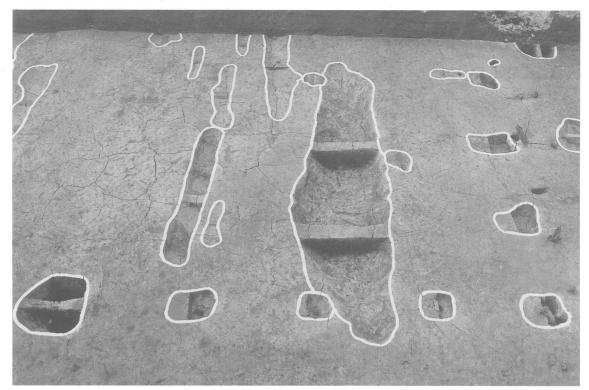
池跡032検出状況(東から)



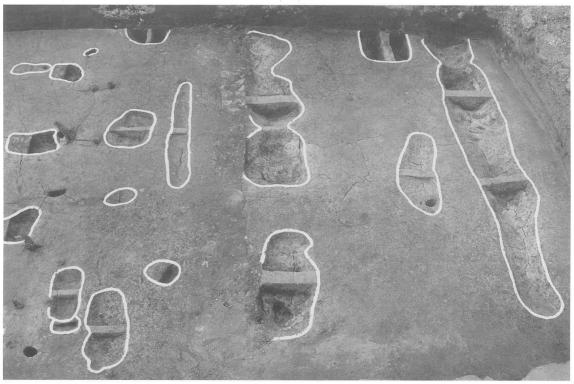
大型土坑h164検出状況(東から)



大型土坑h164検出状況細部(東から)



ピット群検出状況(東から)



ピット群検出状況 (東から)